根室市

温根沼（おんねとう）３遺跡

― 一般国道44号根室市温根沼改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 ―

平成29年度

公益財団法人　北海道埋蔵文化財センター

1　遺跡周辺の空中写真（1978年５月撮影）　この写真は国土地理院発行のものを複製し加筆したものである。

口絵2

1　遺跡全景（東から）

2　V層調査状況（西から）

1　オホーツク式土器出土状況（H64区）

2　刻印付擦文土器出土状況（F66区）

3　Ⅴ層土器集中４　東釧路Ⅲ式土器出土状況

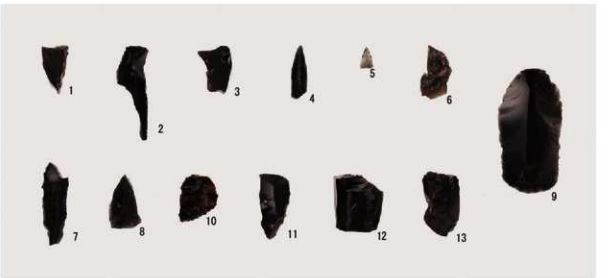
4　Ⅴ層礫集中１検出状況（北東から）

口絵４

1　基本土層49 ～ 50ライン（南西から）

2　Ⅴ層出土の土器（縄文時代早期 東釧路Ⅱ式）

3　Ⅴ層出土の土器（縄文時代早期 東釧路Ⅲ式）



4　Ⅴ層出土の黒曜石産地推定試料（縄文時代早期）

例　言

1．本書は、国土交通省北海道開発局釧路開発建設部が行う一般国道44号根室市温根沼改良工事に伴い、公益財団法人北海道埋蔵文化財センターが平成28年度に実施した、根室市温根沼３遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．温根沼３遺跡の地番は、北海道根室市温根沼284－7である。

3．調査は第２調査部第２調査課が担当した。

4．本書の執筆はⅥ章を除き、笠原　興、広田良成、山中文雄が行い、編集は広田が行った。文責者については、文末に（　）で氏名を記してある。

5．現地調査で作成した図面の整理は山中、遺物整理は広田が担当した。

6．現地調査での写真撮影は笠原・山中が行い、室内での写真撮影・整理は第１調査部第１調査課の菊池慈人が担当した。

7．各種分析・鑑定・保存処理については、下記の分析業者に委託した。保存処理を除き、Ⅵ章にその結果を掲載してある。
　放射性炭素年代測定：株式会社　加速器分析研究所
　黒曜石製石器の産地推定：株式会社　パレオ・ラボ
　鉄製品の保存処理：公益財団法人　岩手県文化振興事業団

8．調査報告終了後の出土遺物は、根室市教育委員会で保管される。

9．調査にあたっては、下記の諸機関および諸氏に御協力、御指導をいただいた（順不同、敬称略）。
　北海道教育庁生涯学習推進局文化財・博物館課、根室市教育委員会
　根室市歴史と自然の資料館：福田光夫・猪熊樹人

記号等の説明

1．遺構の呼称について

（1）遺構名は略号（P：土坑、F：焼土）の前に基本層序名を付して表した。なお、土器集中、礫集中に略号は用いなかった。

ⅢP：Ⅲ層の土坑　ⅢF：Ⅲ層の焼土　ⅤP：Ⅴ層の土坑　ⅤF：Ⅴ層の焼土

2．遺構図等について

（1）土層の表記は自然層位（基本層序）がローマ数字、遺構の層位がアラビア数字である。

（2）土色の判定には、『新版　標準土色帖』26版（小山・竹原 1967）を用いた。

（3）テフラについては、以下の略号を用いたところがある。

Ta-a：樽前aテフラ　Ko-c_2：駒ヶ岳c_2テフラ　Ma-f～j：摩周f～jテフラ

（4）平面図の方位は座標北（方眼北）を示す。

（5）縮尺は原則として40分の1であるが、土器集中では異なるものがある。いずれもスケールを付してある。なお、調査区の土層図は60分の1である。

（6）平面図の「＋」はグリッドラインの交点で、傍らのアルファベット・アラビア数字はグリッド名を表す。グリッドの見方はⅢ章1節（1）項に説明してある。

（7）平面図の「・」付きアラビア数字は、その地点の標高を表す（単位：m）。

（8）土層図・遺構図では、遺物やテフラを表すのに以下の記号を用いたところがある。

Pまたは●：土器　Fまたは▲：剥片・剥片石器　Sまたは■：礫

C：炭化木片　t：テフラ

（9）土層説明では土の混在度合の多少を「＞」で表したところがある。

（10）遺構の規模は以下のように示した。一部が失われているものは現存長に（　）を付し、計測できないものは「－」で示した。

「上端の長径×短径／下端の長径×短径／最大深（最大厚）」（単位：m）

3．遺物図について

（1）縮尺は復元土器・拓影図・礫石器が3分の1、剥片石器・鉄製品・土製品が2分の1である。

（2）遺物の計測値は以下のように示した。欠損部分がある場合は現存長に（　）を付して示した。

「最大長×最大幅×最大厚」（単位：cm）

（3）石器実測図に付した記号で、∨－∨は敲打痕、｜←→｜はすり痕の範囲を表す。

目　次

口　絵
例　言
記号等の説明
目　次
挿図目次
表目次
写真図版目次

Ⅰ章　緒　言
1　調査要項……1
2　調査体制……1
3　調査にいたる経緯……1
4　調査の経過
（1）発掘作業……4
（2）整理作業……5

Ⅱ章　遺跡の位置と環境
1　地理的環境……7
2　歴史的環境……7

Ⅲ章　調査の方法
1　発掘調査の方法
（1）グリッドの設定……13
（2）基本層序……15
（3）発掘調査の方法……17
2　整理作業の方法
（1）整理作業の方法……18
（2）遺物の分類……19

Ⅳ章　遺　構
1　概　要……21
2　Ⅲ層の遺構
（1）土　坑……21
（2）焼　土……27
（3）Ⅲ層礫集中……27
3　Ⅴ層の遺構
（1）土坑墓……30

（2）焼　土……32
（3）Ⅴ層土器集中……35
（4）Ⅴ層礫集中……37

Ⅴ章　遺　物
1　概　要……43
2　Ⅲ層の遺物
（1）土　器……43
（2）石器等……48
（3）鉄製品……54
3　Ⅴ層の遺物
（1）土　器……54
（2）石器等……61
4　微細遺物……71

Ⅵ章　自然科学的分析
1　温根沼３遺跡における放射性炭素年代測定（AMS測定）……79
2　温根沼３遺跡出土黒曜石製石器の産地推定……83

Ⅶ章　総　括
1　遺　構……87
2　遺　物……89

写真図版
引用・参考文献
報告書抄録

挿図目次

図Ⅰ－1　根室道路の用地と温根沼３遺跡調査区…… 2
図Ⅰ－2　温根沼２・３遺跡位置図…… 3
図Ⅱ－1　遺跡の位置と周辺の遺跡…… 8
図Ⅲ－1　グリッド設定図……14
図Ⅲ－2　土層柱状図……15
図Ⅲ－3　調査区土層図……16
図Ⅳ－1　遺構位置図……22
図Ⅳ－2　Ⅲ層遺構位置図……23
図Ⅳ－3　ⅢＰ－1～3……24
図Ⅳ－4　ⅢＰ－4～6……26
図Ⅳ－5　ⅢＰ－7・8、ⅢＦ－1……28
図Ⅳ－6　Ⅲ層礫集中１～５……29
図Ⅳ－7　Ⅴ層遺構位置図……31
図Ⅳ－8　ＶＰ－1、ＶＦ－5・6、Ⅴ層土器集中１、Ⅴ層礫集中３……33
図Ⅳ－9　ＶＦ－1～4……34
図Ⅳ－10　Ⅴ層土器集中２～４……36
図Ⅳ－11　Ⅴ層礫集中１・２・４……38
図Ⅴ－1　Ⅲ層礫集中３～５、Ⅲ層出土の土器……44
図Ⅴ－2　Ⅲ層出土土器点数分布図（1）…46
図Ⅴ－3　Ⅲ層出土土器点数分布図（2）…47
図Ⅴ－4　Ⅲ層礫集中５、Ⅲ層出土の石器（1）……49
図Ⅴ－5　Ⅲ層出土の石器（2）・鉄製品 …50
図Ⅴ－6　包含層石器等点数分布図……51
図Ⅴ－7　Ⅲ層出土石器点数分布図（1）…52
図Ⅴ－8　Ⅲ層出土石器点数分布図（2）…53
図Ⅴ－9　Ⅴ層遺構出土の土器（1）……55
図Ⅴ－10　Ⅴ層遺構出土の土器（2）……56
図Ⅴ－11　Ⅴ層出土土器点数分布図……58
図Ⅴ－12　Ⅴ層出土の土器（1）……59
図Ⅴ－13　Ⅴ層出土の土器（2）……60
図Ⅴ－14　Ⅴ層遺構出土の石器……62
図Ⅴ－15　Ⅴ層出土石器点数分布図（1）…63
図Ⅴ－16　Ⅴ層出土石器点数分布図（2）…64
図Ⅴ－17　Ⅴ層出土石器点数分布図（3）…65
図Ⅴ－18　Ⅴ層出土石器点数分布図（4）…66
図Ⅴ－19　Ⅴ層出土の石器（1）……67
図Ⅴ－20　Ⅴ層出土の石器（2）……69
図Ⅴ－21　Ⅴ層出土の石器（3）・土製品 …70

Ⅵ章１

図版１　暦年較正年代グラフ（参考）……82
図版２　暦年較正年代グラフ（マルチプロット図、参考）……82

Ⅵ章２

図１　黒曜石産地分布図（東日本）……83
図２　黒曜石産地推定判別図（1）……85
図３　黒曜石産地推定判別図（2）……85
図４　黒曜石産地推定判別図（3）……86

表目次

表Ⅱ－1　周辺の遺跡一覧……10
表Ⅲ－1　基準点成果一覧……13
表Ⅳ－1　遺構一覧……40
表Ⅳ－2　Ⅴ層礫集中１出土礫計測表……41
表Ⅴ－1　全遺物集計……72
表Ⅴ－2　遺構出土土器集計……72
表Ⅴ－3　遺構出土石器等集計……72
表Ⅴ－4　包含層出土土器集計……73
表Ⅴ－5　包含層出土石器等集計……73
表Ⅴ－6　Ⅲ層掲載土器一覧……74
表Ⅴ－7　Ⅲ層掲載石器一覧……74
表Ⅴ－8　Ⅴ層掲載土器一覧……75
表Ⅴ－9　Ⅴ層掲載石器等一覧……76
表Ⅴ－10　掲載鉄製品一覧……77
表Ⅴ－11　水洗選別成果一覧……77

Ⅵ章１

表１　放射性炭素年代測定結果（δ^{13}C補正値）……81
表２　放射性炭素年代測定結果（δ^{13}C未補正値、暦年較正用^{14}C年代、較正年代）…81

Ⅵ章２

表１　分析対象となる黒曜石製石器の一覧…83
表２　東日本黒曜石産地の判別群……84
表３　測定値および産地推定結果……86
表４　器種別の産地……86

写真図版目次

口絵1
1　遺跡周辺の空中写真（1978年５月撮影）

口絵2
1　遺跡全景（東から）
2　Ⅴ層調査状況（西から）

口絵3
1　オホーツク式土器出土状況（H64区）
2　刻印付擦文土器出土状況（F66区）
3　Ⅴ層土器集中４ 東釧路Ⅲ式土器出土状況
4　Ⅴ層礫集中１検出状況（北東から）

口絵4
1　基本土層49 ～ 50ライン（南西から）
2　Ⅴ層出土の土器（縄文時代早期 東釧路Ⅱ式）
3　Ⅴ層出土の土器（縄文時代早期 東釧路Ⅲ式）
4　Ⅴ層出土の黒曜石産地推定試料（縄文時代早期）

図版1
1　遺跡全景（東から）
2　Ⅴ層調査状況（西から）

図版2
1　基本土層60 ～ 63ライン（南西から）
2　基本土層Ｐ49区（西から）
3　基本土層Ｎ50区（南から）

図版3
1　ⅢＰ－１土層断面（南から）
2　ⅢＰ－１完掘（南から）
3　ⅢＰ－２土層断面（南から）
4　ⅢＰ－２完掘（南から）
5　ⅢＰ－３土層断面（東から）
6　ⅢＰ－３完掘（東から）
7　ⅢＰ－４土層断面（東から）
8　ⅢＰ－４完掘（東から）

図版4
1　ⅢＰ－５土層断面（南から）
2　ⅢＰ－５完掘（南から）
3　ⅢＰ－６土層断面（南から）
4　ⅢＰ－６完掘（南から）
5　ⅢＰ－７土層断面（南から）
6　ⅢＰ－７完掘（南から）
7　ⅢＰ－８検出（東から）
8　ⅢＰ－８調査状況（北から）

図版5
1　ⅢＦ－１土層断面（東から）
2　Ⅲ層礫集中２検出（南西から）
3　Ⅲ層礫集中１検出（南東から）
4　Ⅲ層礫集中４検出（南東から）
5　Ⅲ層礫集中３検出（北東から）
6　土器出土状況（北東から）

図版6
1　Ⅲ層礫集中５検出（南から）
2　ＶＰ－１完掘（東から）
3　ＶＰ－１土層断面（東から）
4　ＶＰ－１土器出土状況（南から）
5　ＶＦ－１土層断面（東から）
6　ＶＦ－２土層断面（東から）

図版7
1　ＶＦ－３土層断面（東から）
2　ＶＦ－４土層断面（東から）
3　ＶＦ－５土層断面（東から）
4　ＶＦ－６土層断面（東から）
5　Ⅴ層土器集中１（南から）
6　Ⅴ層土器集中２（南から）
7　Ⅴ層土器集中３（東から）
8　Ⅴ層土器集中４（南東から）

図版8
1　Ⅴ層礫集中１検出（南東から）
2　Ⅴ層礫集中１ Ｐ－１土層断面（東から）
3　Ⅴ層礫集中２検出（西から）
4　Ⅴ層礫集中３検出（南から）
5　Ⅴ層礫集中４検出（南から）

図版9　Ⅲ層・Ⅴ層出土の復元土器
図版10　Ⅲ層出土の土器
図版11　Ⅲ層出土の石器（１）
図版12　Ⅲ層出土の石器（２）・鉄製品
図版13　Ⅴ層出土の土器（１）
図版14　Ⅴ層出土の土器（２）
図版15　Ⅴ層出土の土器（３）
図版16　Ⅴ層出土の石器（１）
図版17　Ⅴ層出土の石器（２）・土製品

Ⅰ章　緒　言

1　調査要項

事 業 名：一般国道44号根室市温根沼改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査
委 託 者：国土交通省北海道開発局釧路開発建設部
受 託 者：公益財団法人北海道埋蔵文化財センター
遺 跡 名：温根沼３遺跡（北海道教育委員会登載番号Ｎ－01－308）
所 在 地：根室市温根沼284－７
調査面積：2,610㎡
受託期間：平成28年４月１日～平成30年３月30日
調査期間：平成28年５月12日～平成28年７月20日

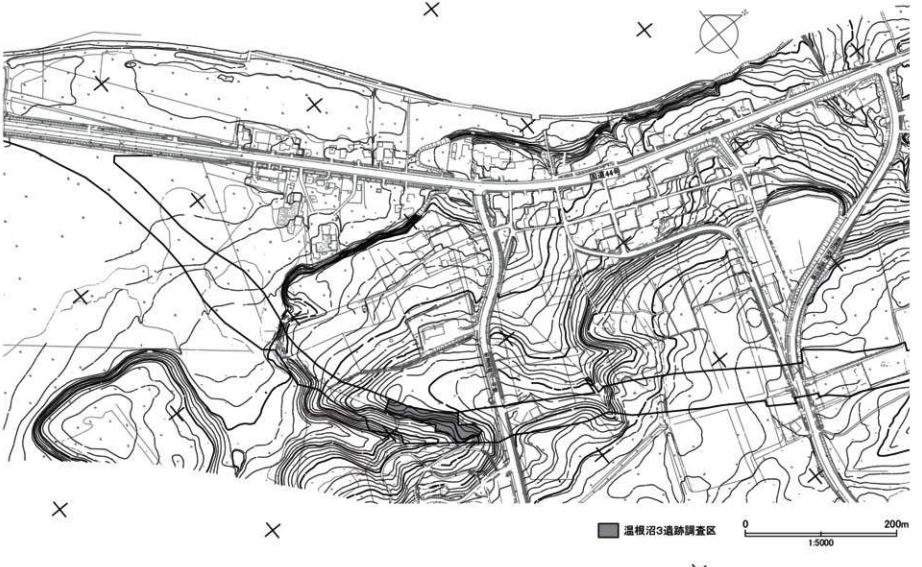
2　調査体制

平成28年度
第１調査部長　長沼　孝（常務理事兼務）　第２調査部長　三浦正人
第２調査部第２調査課　課長　笠原　興（発掘担当者）
〃　主査　広田良成（発掘担当者）
〃　主査　山中文雄（発掘担当者）
平成29年度
第１調査部長　長沼　孝（常務理事兼務）　第２調査部長　鈴木　信
第２調査部第２調査課　課長　笠原　興
〃　主査　広田良成

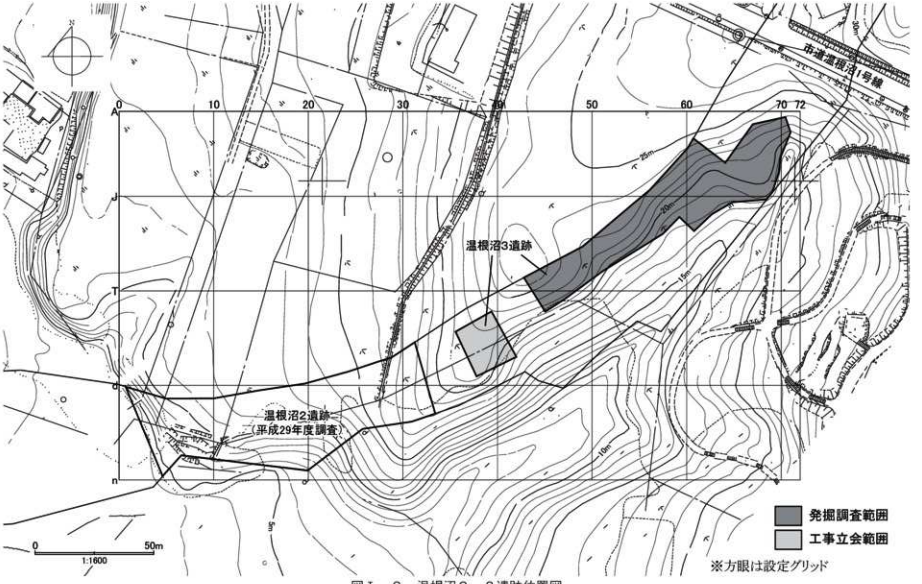
3　調査にいたる経緯

一般国道44号根室道路は、釧路市を起点とし、根室市へ至る延長124kmの一般国道44号のバイパスとして、根室市温根沼から同市穂香を結ぶ延長7.1kmの区間に計画された自動車専用道路である。平成11年度に事業化され、平成17年度に着工、全線開通は平成31年度の予定である。

工事計画の具体化に伴い、平成10年10月19日に埋蔵文化財保護のための事前協議書が北海道開発局釧路開発建設部（以下、釧路開建）から北海道教育委員会（以下、道教委）あてに提出された。平成12年９月12日、根室市教育委員会（以下、市教委）の協力を得て、道教委による埋蔵文化財包蔵地の所在調査が実施され、同年11月21日、釧路開建あてに周知の埋蔵文化財包蔵地である穂香竪穴群の発掘調査が必要であること、新規発見の幌茂尻１遺跡の平坦面については発掘調査とし、隣接する南側斜面については試掘調査が必要であること、他４か所についても試掘調査が必要であるとの回答がなされた。その後、関係者による協議や試掘調査を経て、（財）北海道埋蔵文化財センターが平成13～15年度に穂香竪穴群、平成16年度に穂香川右岸遺跡の発掘調査を実施した（北埋調報170・184・198・212）。



図Ⅰ－1　根室道路の用地と温根沼３遺跡調査区



図Ⅰ－２　温根沼２・３遺跡位置図

平成20年８月８日には、温根沼付近の路線変更に伴い、埋蔵文化財保護のための事前協議書が釧路開建から道教委あてに提出された。同年10月23日、市教委の協力を得て、道教委による埋蔵文化財包蔵地の所在調査が実施され、同年12月17日、釧路開建あてに変更区域での試掘調査が必要であるとの回答がなされた。試掘調査実施の条件が整った平成27年12月16・17日、道教委の試掘調査によって、変更区域に温根沼２遺跡、温根沼３遺跡が確認され、同月24日、釧路開建あてに両遺跡の発掘調査（温根沼３遺跡の一部は工事立会）が必要であるとの回答がなされた。なお、試掘調査は幌茂尻１遺跡の南側斜面についても行われたが、埋蔵文化財が確認されなかったので、その部分の着工については支障がない旨も12月24日に合わせて回答されている。

その後、平成28年度に温根沼３遺跡の発掘調査（当初面積2,230㎡）を（公財）北海道埋蔵文化財センター（以下、センター）が実施することになった。発掘作業は平成28年５月12日～７月20日（幌茂尻１遺跡と並行して実施）、整理作業は同年11月～平成29年３月にかけて行い、平成29年度に調査報告書を刊行することとなった。なお、温根沼３遺跡の調査面積については途中で変更があり、最終的には2,610㎡となっている。また、工事立会部分440㎡の立会については、平成28年11月29日～12月２日及び平成29年５月16日～５月19日に市教委が対応することで行われた。また、平成29年５月11日～10月27日には、センターが温根沼２遺跡の発掘調査（面積4,040㎡）を実施している。

4　調査の経過

（1）発掘作業

平成28年２月、温根沼３遺跡について、調査区北東側の1,740㎡（以下、「北東部」）はⅢ層とⅤ層、南西側の飛び地490㎡（以下、「南西部」）はⅤ層の発掘を行うように道教委から調査指示を受け、それに基づいた調査計画を立てた。

重機による表土等の掘削は４月25～28日に行い、引き続き調査区内に方眼杭を打設し、５月12日から両部分とも包含層調査に着手した。「北東部」は検出された遺構を適宜調査しながら、①Ⅲ層の掘り下げ、②重機によるⅣ層掘削（６月上旬と７月初旬の２回）、③Ⅴ層の掘り下げを行い、７月15日に作業を終えた。なお、斜面肩部ではⅣ層が薄く、Ⅴ層の遺物が一部で現れていたので、重機ではなく人力でⅣ層を掘削した。

「南西部」も検出された遺構を適宜調査しながら、Ⅴ層の掘り下げを行い、６月７日に作業を終了し、以降は全員が「北東部」で作業した。

ところで、５月下旬に「南西部」の北東壁にかかるグリッドで遺物が多く出土した。遺物は「北東部」の方向に広がると予想されたので、「北東部」の南西壁に沿ってトレンチを入れたところ、Ⅴ層から遺物が多く出土し、両者に挟まれた区域に包含層があることが推測された。このことを道教委に報告したところ、同区域についての補足的な試掘が６月14日に行われ、その結果「北東部」・「南西部」間のⅤ層380㎡（以下、「追加部」）も発掘調査に加えることになった。「追加部」については、７月初旬に重機でⅣ層まで掘削してからⅤ層を掘り下げ、「北東部」と同じく７月15日に作業を終えた。

発掘作業終了後は、７月19・20日に発掘道具・器材の水洗・整備と、引き続き調査を行う別当賀（べっとうが）一番沢川遺跡のユニットハウスへ物品搬送を行い、７月20日に現地での作業を全て終えた。調査範囲の埋め戻しは７月21～25日に行った。

（2）整理作業

現地での整理作業は、雨天等で発掘作業が困難な日を利用しながら行った。作業内容は遺構図の点検、現像（外部委託）したフィルムの整理、水洗フルイ選別、遺物の水洗・分類・台帳登録等である。

平成28年11月から平成29年３月にかけては､江別市内にあるセンターで引き続き整理作業を行った。作業内容は、遺物への注記、各種台帳の入力、土器の接合・復元、石器等の接合、分析試料の選び出し、掲載遺物の実測・トレース・写真撮影、土器片の採拓と断面実測・トレース、集計、遺構図面調整、図版作成、報告書の編集作業、図面や遺物の収納等である。平成29年度は鉄製品の保存処理、報告書の刊行、根室市教育委員会への遺物の返却等を行った。

なお、平成28年12月に年代測定試料を株式会社加速器分析研究所に、黒曜石の産地推定試料を株式会社パレオ・ラボに発送し、平成29年３月下旬に分析結果を受け取っている。また、平成29年７月に保存処理のため鉄製品を岩手県文化振興事業団に発送し、平成29年12月に保存処理が終了した鉄製品を受け取っている。

（山中）

Ⅱ章　遺跡の位置と環境

1　地理的環境

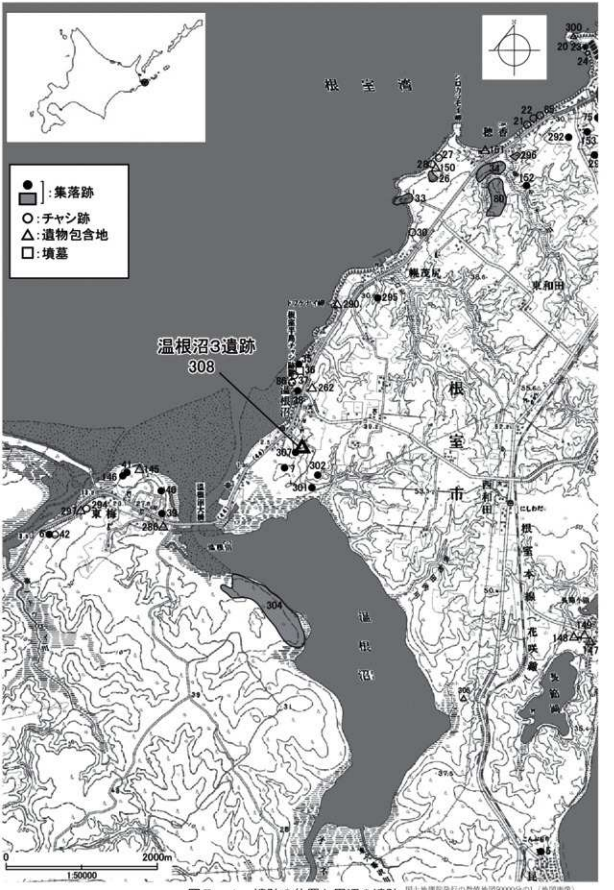
温根沼（おんねとう）３遺跡は北海道根室市温根沼284－７に所在し、根室市街からは南西へ約９㎞離れた温根沼地区に位置する。遺跡の所在する根室市は、北海道東部の根室半島及び北方領土である歯舞群島に位置する北海道最東端の市で、根室半島の先端の納沙布岬は北海道の東端となっている。行政的には根室振興局の所在地であり、北海道東部の中核的な市である釧路市の市街地から根室市街までの距離は約120㎞を測り、根室市の西側は別海町及び浜中町に接している。根室市の面積は506.25㎢で、これは歯舞群島の面積（99.94㎢）を含む。平成28（2016）年度における人口は約27,000人で、根室振興局の市町村では最も多いが、近年は周辺の多くの市町村と同様に人口の減少が続いている。市の基幹産業は水産業で、夏の花咲ガニ、秋のサンマ等の水産物が全国的にも有名である。また、国後島等の北方領土に近接し、天気の良いよく晴れた日には間近に国後島を望むことができる。

本遺跡の位置する根室半島は、半島の付け根にあたる温根沼から先端の納沙布岬までの長さが東西に約30㎞、幅約５～10㎞の規模で、北側をオホーツク海、南側を太平洋に面し、東方には歯舞群島が連なっている。根室半島の地形は、全般的に海成段丘が発達しており、東北東―西南西にのびるなだらかな高まりがみられる。大きくみると高低位の２段の段丘面に区分されるが、これらの段丘面は細かくみると海抜60～80m、40～50m、30～40m、17～25m、10～15mに分かれ、段丘の境は極めてなだらかな斜面で転換している。60～80mの面は最も標高が高く、根室半島のつけ根から厚床にかけて分布し、この面は温根沼以東の根室半島ではみられない。40～50mの面は根室市街から花咲～落石へと細長く西南から西方に続き、温根沼の東部で膨らみ、太平洋側に広く分布している。30～40mの面は、40～50mの面と同様の分布を示すが半島の東方に狭くなり、西南方向で広がり、広く半島に分布している。17～25m及び10～15mの面は、風連湖方面で発達し、更に半島北岸一帯から納沙布岬に至り、太平洋側では桂木へと分布が認められるが、それ以西の海岸沿いにはみられない（松井・吉元 1987）。遺跡の南側には、遺跡名でもある温根沼（おんねとう）が位置する。温根沼は面積5.68㎢、周囲約15㎞の汽水湖で、根室市内では最も大きい風連湖（面積59.01㎢）に次ぐ大きさである。また、風連湖等、道東地域の海岸線沿いに多くみられる縄文海進によって形成された海跡湖のひとつである。温根沼という地名はアイヌ語地名の「オンネ・トー 大きい・沼」の意味である。また、根室市街の東方太平洋側にも同名の「オンネ沼」があるが、これは別の沼である。

遺跡の立地は温根沼地区の海岸段丘上（標高23m前後）から無名の沢の源流部（標高16m前後）にかけて広がっている。今回の調査範囲は標高約18～25mの段丘面の縁辺から無名の沢付近の段丘崖上にある。段丘面は上記の17～25mに該当し北西側に広がっている。北西側の調査区際で遺構・遺物が分布していることから、温根沼３遺跡全体の範囲は、北西側の平坦な段丘面に広がるのは確実である。平坦面にかかる調査区際では特にⅤ層の縄文時代早期の遺構・遺物が多くみられることから、平坦面では当該期の集落跡が存在している可能性がある。

2　歴史的環境

根室市内では平成29年現在で308か所の遺跡が確認されており、遺跡数は道内の市町村の中でも特



図Ⅱ－1　遺跡の位置と周辺の遺跡

国土地理院発行の数値地図50000分の1（地図画像）
『根室南部』『東梅』『別当賀』『落石』（平成17年）を使用

に多く、遺跡の分布密度も高い。平面的な分布の特徴として、根室半島北側、オホーツク海側の海岸線沿いに遺跡が多く、太平洋側には遺跡が非常に少ないことが挙げられる。また、根室半島のつけ根部分をみると、オホーツク海側の風連湖の湖岸に加えて、風連湖に注いでいる別当賀川沿いに遺跡が多く集中している。根室半島の遺跡の時期は不明なものが多いが、分かるものでは縄文時代早期からアイヌ文化期の各時期がみられる。また、旧石器時代の遺跡は今の所確認されていない。遺跡の種別では集落跡が最も多く、全遺跡数の３分の２以上を占める。これは埋まりきらない竪穴住居跡などの遺構が、地表からくぼみとして確認でき、遺構の存在及び性格を把握しやすいことが理由として挙げられる。集落跡以外では、チャシ跡、墳墓、貝塚、遺物包含地がみられる。これらの中ではチャシ跡が35か所と多い。遺跡の時期は全体の約３分の１が把握され、その中では縄文時代、アイヌ文化期が多く、続縄文時代やオホーツク文化期が少ない。以下に温根沼３遺跡の周辺遺跡について述べる。なお、遺跡名の後の括弧内の数字は北海道教育委員会の遺跡登載番号である（図・表共に同じ）。

根室市の国指定史跡は２か所あり、一つは昭和51（1976）年に指定された擦文文化期の大小約350個の竪穴が密集して分布する西月ヶ岡遺跡、もう一つは昭和58・59（1983・1984）年に指定された24か所のチャシ跡からなる根室半島チャシ跡群（21 ～ 24・27・28・30・37・85・86他）がある。また、北海道指定の有形文化財では考古学資料として、平成５年に指定された「初田牛（はったうし）20遺跡出土の土偶及び墓坑出土遺物」がある。これらは縄文時代後期の墓坑から出土した石器、石製品、漆製品や、道東での出土例が極めて少ない完形に近い土偶からなっている。

周辺の遺跡については分布図（図Ⅱ－１）と、一覧表（表Ⅱ－１）を掲載した。これらは、北海道教育委員会の埋蔵文化財周知資料である「埋蔵文化財包蔵地調査カード」の根室市の分と北海道教育委員会ホームページ内サイト「北の遺跡案内」及び根室市教育委員会の「根室市埋蔵文化財マップ」等を基に作成した。当遺跡は温根沼の北側に位置し、周辺の遺跡は、温根沼が海とつながるオホーツク海側に多く分布する。遺跡の種別は全体の傾向と同じく、集落跡やチャシ跡が多い。当遺跡の近辺では平成29（2017）年度に当センターが調査した温根沼２遺跡（307）が南西に隣接し、南西側約300ｍ離れて過去に発掘調査が行われた関江谷（せきえだに）１竪穴群（７）がある。南東側には関江谷２竪穴群（301）、関江谷３竪穴群（302）がある。当遺跡北側の海岸沿いには、温根沼チャルコロモイ東竪穴群（35）等の集落跡、チャルコロフィナ１号チャシ跡（37）等のチャシ跡他がまとまって分布している。温根沼の西側でも海岸沿いに、東梅１竪穴群（39）等の集落跡、東梅風連湖口右岸チャシ跡（42）等のチャシ跡他がみられる。他に温根沼周辺では東側に温根沼東岸１遺跡（306）、西側に遺跡範囲が広大な温根沼西岸１竪穴群（304）がある。

時代別でみると、縄文時代の早期では、長節（ちょうぼし）１遺跡（147）、前期では関江谷１竪穴群（７）がある。関江谷１竪穴群は昭和29（1954）年に大場利夫らにより、竪穴住居跡３軒と貝塚１か所が調査され、出土した縄文時代前期の押型文土器について「温根沼式押型文土器」として設定された（児玉・大場1956）。その後、平成18 ～ 23（2006 ～ 2011）年には、名古屋大学と根室市教育委員会により、遺跡の測量図作成や昭和29年調査の貝塚の再調査が行われている（猪熊・新美 2007他）。中～後期では東梅風連湖口右岸竪穴群（６）、幌茂尻（ほろもしり）ポントマリ竪穴群（33）等があり、過去に当センターで発掘調査を行った穂香（ほにおい）竪穴群（34）、穂香川右岸遺跡（296）では、北筒式土器の時期の集落跡が確認された（北埋調報170・184・198・212）。晩期では温根沼１遺跡（262）、トフケナイ遺跡（290）がある。続縄文時代では、東梅４遺跡（145）、東梅２遺跡（297）、温根沼西岸１竪穴群（304）、温根沼東岸１遺跡（306）があり、いずれも温根沼周辺に位置している。オホーツク文化期は、関江谷１竪穴群（７）のみである。擦文文化期は遺跡数が多く、キナトイシ竪穴群（20）、幌茂尻東竪穴群（26）、東梅１竪穴群（39）

表Ⅱ－1　周辺の遺跡一覧

№.	遺跡名	種別	時期	所在地	立地	標高	発掘調査	文献	備考
5	昆布盛竪穴群	集落跡	不明	根室市昆布盛25,25-2	海岸段丘上	30m	－		
6	東梅風蓮湖口右岸竪穴群	集落跡	縄文(中期),擦文	根室市東梅224-5	海岸段丘上	10m	－		
7	関江谷1竪穴群	集落跡	縄文(前期・中期), オホーツク,擦文,アイヌ	根室市温根沼343-2	温根沼の北岸丘陵上	12m	○	児玉・大場 1956、猪熊・新美 2007、新美・猪熊他 2010、新美・大谷他 2011、新美・猪熊他 2012	
20	キナトイシ竪穴群	集落跡	擦文	根室市西浜町10丁目191,192,206 ～ 208,210	海岸段丘上	16m	－		
21	ニランケウシ3号チャシ跡	チャシ跡	アイヌ	根室市穂香7,13-5・同地先	海岸段丘上	10m	－	宇田川他 1985、川上編 1985、北海道教育委員会 1983	国指定史跡
22	ニランケウシ2号チャシ跡	チャシ跡	アイヌ	根室市穂香7・同地先	海岸段丘上	14m	－	宇田川他 1985、川上編 1985、北海道教育委員会 1983	国指定史跡
23	アツケシエト1号チャシ跡	チャシ跡	アイヌ	根室市西浜町10丁目206,207・同地先	キナトイシ湾の東岬	10m	－	宇田川他 1985、川上編 1985、北海道教育委員会 1983	国指定史跡
24	アツケシエト2号チャシ跡	チャシ跡	アイヌ	根室市西浜町10丁目206地先	海岸段丘上	10m	－	宇田川他 1985、川上編 1985、北海道教育委員会 1983	国指定史跡
26	幌茂尻東竪穴群	集落跡	擦文	根室市穂香37,43,45,48,63	二つの小川にはさまれた舌状の微高地上	5m	－		
27	ヲーナイ1号チャシ跡	チャシ跡	アイヌ	根室市穂香43・同地先	海岸段丘上	10m	－	宇田川他 1985、川上編 1985、北海道教育委員会 1983	国指定史跡
28	ヲーナイ2号チャシ跡	チャシ跡	アイヌ	根室市穂香43・同地先	海岸段丘上	10m	－	宇田川他 1985、川上編 1985、北海道教育委員会 1983	国指定史跡
29	東和田1竪穴群	集落跡	不明	根室市東和田70	キナトイシ川左岸台地上	25m	－		
30	ウェンナイチャシ跡	チャシ跡	アイヌ	根室市穂香59・同地先	海岸段丘上	15m	－	宇田川他 1985、川上編 1985、北海道教育委員会 1983	国指定史跡
33	幌茂尻ポントマリ竪穴群	集落跡	縄文(中期), 擦文(トビニタイ期)	根室市穂香57,58,60,62	海岸段丘上	10m	－		
34	穂香竪穴群	集落跡	縄文(早期・中～後期) 擦文	根室市穂香172-1,175,185	ホニオイ川左岸台地上	10m	○	(財)北海道埋蔵文化財センター 2002 、(財)北海道埋蔵文化財センター 2003 、(財)北海道埋蔵文化財センター 2004	
35	温根沼チャルコロモイ東竪穴群	集落跡	アイヌ	根室市温根沼2	海岸段丘上	10m	－		
36	温根沼チャルコロモイ東墳墓群	墳墓	アイヌ	根室市温根沼2		10m	－		
37	チャルコロフィナ1号チャシ跡	チャシ跡	アイヌ	根室市温根沼2,4・同地先	海岸段丘上	10m	－	宇田川他 1985、川上編 1985、北海道教育委員会 1983	国指定史跡
38	チャルコロモイ西竪穴群	集落跡	不明	根室市温根沼4	海岸段丘上	10m	－		
39	東梅1竪穴群	集落跡	擦文	根室市東梅4,8,10 ～ 12,17,24,25,44	湿地に続く緩斜台地上	15m	－		
40	東梅2竪穴群	集落跡	擦文	根室市東梅103	温根沼のオホーツク海への注ぎ口 左岸台地上	10m	－		
41	東梅3竪穴群	集落跡	擦文	根室市東梅103	海岸段丘上	10m	－		
42	東梅風蓮湖口右岸チャシ跡	チャシ跡	アイヌ	根室市東梅224-5	風蓮湖東梅舞湖口の国道沿いの台地上	10m	－		
75	穂香2竪穴群	集落跡	不明	根室市穂香89	海岸段丘上	15m	－		
80	穂香3竪穴群	集落跡	不明	根室市穂香175	ホニオイ川左岸台地上川口より500m上流	10 ～ 20m	－		
85	ニランケウシ1号チャシ跡	チャシ跡	アイヌ	根室市穂香7・同地先	穂香の海岸段丘上	10m	－	宇田川他 1985、川上編 1985、北海道教育委員会 1983	国指定史跡
86	チャルコロフィナ2号チャシ跡	チャシ跡	アイヌ	根室市温根沼4・同地先	温根沼東方,海岸段丘上		－	宇田川他 1985、川上編 1985、北海道教育委員会 1983	国指定史跡
145	東梅4遺跡	遺物包含地	続縄文,擦文	根室市東梅103	風蓮湖岸台地上	10m	－		
146	東梅5竪穴群	集落跡	不明	根室市東梅103	海岸段丘上	10m	－		
147	長節1遺跡	遺物包含地	縄文(早期)	根室市長節63,64	海岸段丘上	10m	－		
148	長節2遺跡	遺物包含地	不明	根室市長節134,139	長節湖北岸台地上	10m	－		
149	長節3遺跡	遺物包含地	不明	根室市長節137-1・2	長節湖北岸台地上	15m	－		
150	穂香4遺跡	遺物包含地	不明	根室市穂香37,43	海岸段丘上	10m	－		
151	穂香5遺跡	遺物包含地	不明	根室市穂香22,23	海岸段丘上	5m	－		
152	穂香6竪穴群	集落跡	不明	根室市穂香108	穂香川右岸台地上	20m	－		
153	穂香7竪穴群	集落跡	不明	根室市穂香92-1,93	西月ヶ岡竪穴群と沢をはさんで西側	30m	－		
262	温根沼1遺跡	遺物包含地	縄文(晩期)	根室市温根沼127-1			－		
286	東梅1遺跡	遺物包含地	縄文	根室市東梅115-1	温根沼に面した小高い台地	10m	－		
290	トフケナイ遺跡	遺物包含地	縄文(晩期)	根室市幌茂尻70-1	海岸台地上	20m	－		
292	穂香8竪穴群	集落跡	不明	根室市穂香110-1		30m	－		
294	東梅チャシ跡	チャシ跡	アイヌ	根室市宇東梅224-5	海岸段丘	12m	－		
295	幌茂尻1遺跡	集落跡	縄文,擦文	根室市幌茂尻140-2	低湿地に面した緩斜面	9 ～ 14m	○	(公財)北海道埋蔵文化財センター 2017	
296	穂香川右岸遺跡	集落跡	縄文(中～後期)	根室市穂香150,163	穂香川右岸段丘上	7 ～ 13m	○	(財)北海道埋蔵文化財センター 2005	
297	東梅2遺跡	遺物包含地	続縄文	根室市東梅224-2・5,224-5地先	海岸段丘	12m	－		
300	キナトイシ遺跡	遺物包含地	アイヌ	根室市西浜町10丁目213	海岸台地の切り通し	10m	－	猪熊 2013、猪熊 2015	採集遺物あり
301	関江谷2竪穴群	集落跡	不明	根室市温根沼343-1	温根沼北岸丘陵上	15m	－		
302	関江谷3竪穴群	集落跡	擦文	根室市温根沼343-1地先国有林	温根沼北岸丘陵上	20 ～ 25m	－		
304	温根沼西岸1竪穴群	集落跡	続縄文、擦文	根室市東梅112-1地先国有林	温根沼西岸の台地上	10 ～ 12m	－		
306	温根沼東岸1遺跡	遺物包含地	続縄文	根室市西和田国有林(1003林班る小班)	温根沼東岸 東四番沢左岸	10 ～ 15m	－		
307	温根沼2遺跡	集落跡	縄文(早期・中～後期), 続縄文,擦文,トビニタイ	根室市温根沼271,271地先,285,297,298	温根沼東岸段丘上	10m	○	(公財)北海道埋蔵文化財センター 2018「調査年報30 平成29年度」	
308	温根沼3遺跡	遺物包含地	縄文,オホーツク, 擦文	根室市温根沼284-1	温根沼東岸段丘及び斜面	15 ～ 25m	○	(公財)北海道埋蔵文化財センター 2018「根室市 温根沼３遺跡」	当報告書

等がある。発掘調査が行われた遺跡は、当センターが行った穂香竪穴群（34）、幌茂尻１遺跡（295）、温根沼２遺跡（307）で、竪穴住居跡等の遺構が検出された。また、他の時代と複合する遺跡として、東梅風連湖口右岸竪穴群（６）、関江谷１竪穴群（７）、幌茂尻ポントマリ竪穴群（33）、東梅４遺跡（145）、温根沼西岸１竪穴群（304）がある。アイヌ文化期は、国指定のチャシ跡としてニランケウシ３号・２号チャシ跡（21･22）、アツケシエト１号･２号チャシ跡（23･24）、ヲーナイ１号･２号チャシ跡（27･28）、ウェンナイチャシ跡（30）、チャルコロフィナ１号・２号チャシ跡（37・86）、ニランケウシ１号チャシ跡（85）がある。それ以外のチャシ跡では、東梅風連湖口右岸チャシ跡（42）、東梅チャシ跡（294）がみられる。他に温根沼チャルコロモイ東墳墓群（36）や集石を伴う墓坑が確認されたキナトイシ遺跡（300）がある（猪熊 2013・2015）。また、当センターでは平成29（2017）年度に、当遺跡の南西側に隣接する温根沼２遺跡（307）について発掘調査を行い、縄文時代早期～後期、続縄文時代、擦文文化期、トビニタイ文化期等の遺構・遺物を検出している（（公財）北海道埋蔵文化財センター 2018）。

当遺跡の調査では、摩周テフラの下位の黒色土（Ⅴ層）から縄文時代早期の遺構・遺物が多く出土しているが、根室市内で同時期の遺跡として穂香竪穴群（34）、根室半島の東側にあるコタンケシ遺跡（北構 1976）、トーサムポロ湖周辺竪穴群（筑波大学歴史・人類学系 1980、北埋調報317）が挙げられる。穂香竪穴群では、焼土、石器集中といった遺構と東釧路Ⅱ式土器、石鏃、石槍、石斧、すり石、砥石等の石器と石刃鏃１点が出土している（北埋調報198）。コタンケシ遺跡では遺構として土坑が検出され、遺物は条痕文土器や石器が出土している。トーサムポロ湖周辺竪穴群では、遺構として竪穴住居跡や土坑が検出され、遺物は浦幌式、東釧路Ⅱ式土器や石刃鏃石器群が出土している。今回の調査では、遺構は土坑墓、焼土、土器集中、礫集中が検出され、遺物は東釧路Ⅱ式、同Ⅲ式土器や石刃鏃石器群が出土している。他の遺跡と比べると土坑墓や大規模な礫集中の検出、また東釧路Ⅲ式土器の出土等が特徴として挙げられる。なお、同時期の遺跡と本遺跡の詳細な比較、検討はⅦ章１節で行っているので参照して頂きたい。

（広田）

Ⅲ章　調査の方法

1　発掘調査の方法

（1）グリッドの設定

温根沼３遺跡の調査区には、方位を平面直角座標第ⅩⅢ系（世界測地系）に一致させた４ｍグリッドを設定した（図Ⅲ－１）。設定に使用した基図は、一般国道44号根室市根室道路の「用地実測図原図（縮尺1：1000）」（計画機関：釧路開発建設部）である。遺跡はⅩⅢ系の座標原点より南東側の区画（第２象限）に位置するので、Ｘの座標値にはマイナス（－）が付く。第２象限では、Ｘの絶対値が原点から南に向かって、Ｙの絶対値が原点から東に向かって大きくなるため、後述する東西方向のライン名（アルファベット大文字）は南に向かって順番に並べ、南北方向のライン名（アラビア数字）は東に向かって数字が大きくなるようにした。なお、方位記号の天は方眼北（座標北）を示す。

東西方向の基線は、平面直角座標（以下、座標）のＹ軸と平行する線のうちＸ軸の－79,700を通る線で、Ａラインと呼称した。Ａラインの南側には、同ラインと平行する線を４ｍおきに引き、それぞれにアルファベット大文字のライン名を付けた。南北方向の基線は、座標のＸ軸と平行する線のうちＹ軸の102,000を通る線で、52ラインと呼称した。52ラインの両側には、同ラインと平行する線を４ｍおきに引き、アラビア数字のライン名を付けた。東西方向にのびるアルファベットラインと、南北方向にのびるアラビア数字ラインを４ｍおきに直交させることで、調査区域に４ｍグリッドを設定した。

グリッドは、各グリッドの北西隅で直交する２本のライン名を組み合わせて表す。例えば、M55区は、Ｍラインと55ラインの交点より南東側の区画である。なお、Ⅳ章の遺構図中には、グリッド名の末尾にアルファベット小文字ａ・ｂ・ｃ・ｄのいずれかが付く場合がある。これは４ｍグリッドを２ｍ四方に四分割した際の位置を表すもので、ａは４ｍラインどうしの交点、ｂは交点から南へ２ｍ、ｃは交点から南へ２ｍ・東へ２ｍ（４ｍグリッドの中心点）、ｄは交点から東へ２ｍの地点を表す。

方眼杭の打設等は測量業者に委託し、調査区傍に設置した２点の仮設４級基準点「401」・「402」から放射法で行った。同点を設置するために使用した既知点は、釧路開発建設部設置の２級基準点「H11－３」・「H11－４」・「K62－96」の３点である。仮設４級基準点の設置と方眼杭打設には、トータルステーションを使用した。

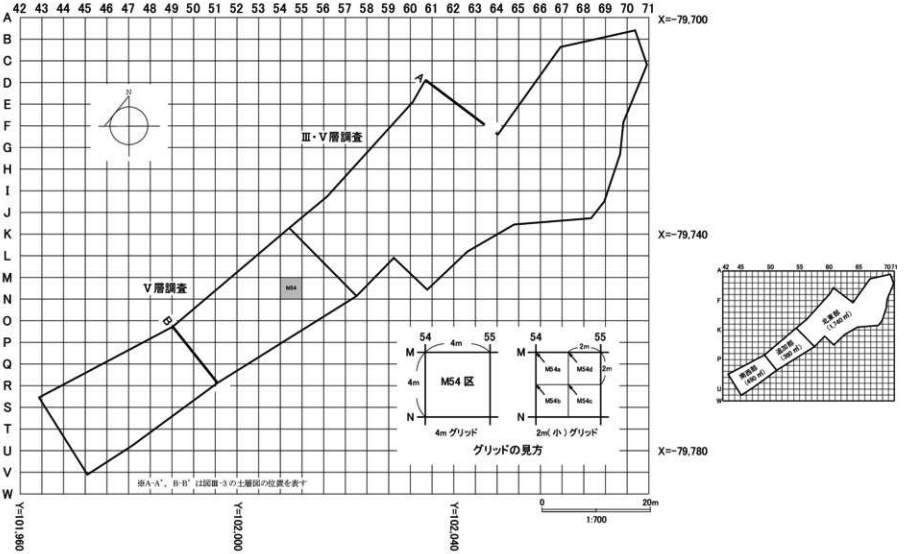
水準測量は、上記の２級基準点「H11－４」の標高31.792ｍを、オートレベルで往復観測し、両遺跡の仮設基準点等に取り付けた。

（山中）

表Ⅲ－１　基準点成果一覧

基準点	級	座標系	X(m)	Y(m)	H(m)	計画機関	備考
H11-3	2	ⅩⅢ	-79,727.665	101,773.961	10.932	釧路開発建設部	旧日本測地系の座標値を
H11-4	〃	〃	-79,711.288	102,140.600	31.792	〃	TKY2JGD・PatchJGD・
K62-96	〃	〃	-79,958.340	101,311.003	1.063	〃	PatchJGD(標高版)で変換した値
401	4	〃	-79,773.268	101,959.591	24.534	（公財）北海道埋蔵文化財センター	仮設のため調査終了後に撤去
402	〃	〃	-79,699.790	102,085.486	24.225	〃	〃

＊世界測地系（測地成果2011）



Ⅲ・Ⅴ層調査
Ⅴ層調査
M54
M54 区
4m グリッド
2m(小)グリッド
グリッドの見方
※A-A'，B-B' は図Ⅲ-3の土層図の位置を表す
X=-79,700
X=-79,740
X=-79,780
Y=101,960
Y=102,000
Y=102,040
0
20m
1:700

図Ⅲ－1　グリッド設定図

（2）基本層序

温根沼３遺跡の基本層序を以下に示す。遺物包含層は、Ⅳ層とした摩周テフラ（Ma-f～j）を挟む上下の黒色土（Ⅲ層とⅤ層）である。層相の記載にあたっては、『新版標準土色帖』26版（小山・竹原 1967）の「土色」、『土壌調査ハンドブック』（ペドロジスト懇話会編 1984）の「野外土性」・「粘着性」・「堅密度」・「層界」を用いた。

Ⅰ層：黒色の埴壌土で、粘着性は中、堅密度は堅、層厚は約10cmを測る。表土で、ササの根に富んでいる。

Ⅱ層：過去に行われた根室市域での遺跡調査から設定した。トーサムポロ湖周辺竪穴群では黒褐色、穂香（ほにおい）竪穴群では黒色・黒褐色、幌茂尻（ほろもしり）１遺跡では黒褐色、別当賀（べっとうが）一番沢川遺跡では黒褐色・暗褐色を呈し、層中に灰白色の細粒火山灰（樽前a・駒ヶ岳c_2テフラ）を疎らに含む。本遺跡では、調査区北東端のごく一部で、灰白色のテフラが混じる紫がかったシルト層を確認した。層位的にみて、これがⅡ層であった可能性があるが、他の大部分ではⅢ層と区別できなかった。

Ⅲ層：黒色・黒褐色の埴壌土で、粘着性は中、堅密度は堅、層厚は30～40cm程度を測り、Ⅳ層最上位にあるMa-fとの層界は漸変している。本層からは、縄文、続縄文、擦文、オホーツク文化期の遺物が得られている。上位には樽前aテフラ（1739年降下）、駒ヶ岳c_2テフラ（1694年降下）とみられる灰白色の細粒火山灰が疎らに認められる（土層図中の「t」）。他遺跡における両テフラの検出層位からみると、分層はできなかったが、本層上位がⅡ層に相当すると考えられる。なお調査対象となったⅢ層の範囲は、調査区北東部の1,740㎡である。

Ⅳ層：Ma-f～jの各テフラを一括した。テフラ同士の間に土壌の発達は認められない。層厚はMa-f～j全体で約25cmを測り、Ⅴ層との層界は画然としている。Ma-fは褐色を呈する軽石混じりのローム質土、Ma-gは黄橙色の軽石、Ma-hは灰色の薄層（層厚１cm程度）で、径１mm程度の噴出物から成る。Ma-iは橙色で径１cm前後の粗粒軽石が目立つ。Ma-jは層厚１cm程度の薄層で、上位は黄灰色を呈する径１mm以下の噴出物、下位は灰色の火山灰である。近年の研究によれば、Ma-f～jはカルデラ形成期における一連の噴出物と考えられており（岸本他 2009）、噴出年代は約7,600年前とされている（山元他 2010）。

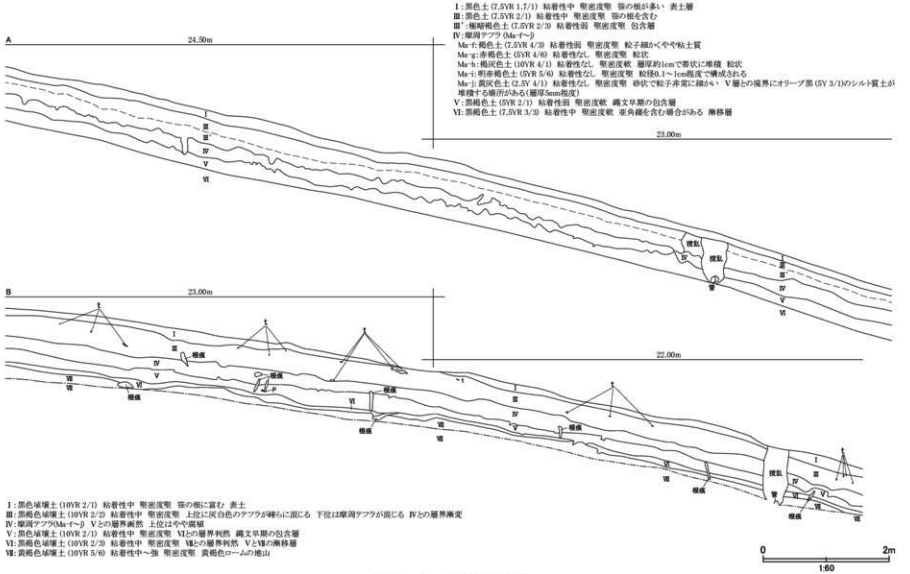
Ⅴ層：黒色・黒褐色の埴壌土で、粘着性は中、堅密度は堅、層厚は20cm前後を測り、Ⅵ層との層界は判然としている。東釧路Ⅱ式・同Ⅲ式期の遺構・遺物を包含する。同年度に調査した幌茂尻１遺跡、別当賀一番沢川遺跡では、凍土現象によってⅤ層以下の地形が凸凹していたが、本遺跡では認められなかった。

図Ⅲ－２　土層柱状図

Ⅵ層：黒褐色の埴壌土で、粘着性は中、堅密度は堅、層厚は10cm弱を測り、Ⅶ層との層界は判然としている。Ⅴ層とⅦ層の漸移層にあたる。

Ⅶ層：黄褐色の埴壌土で、粘着性は中～強、堅密度は堅、基底は確認していない。部分的に亜角礫が含まれる。本遺跡の地山にあたり、掘り下げは本層が現れるまで行った。いわゆる「ローム層（風化した火山灰層）」で、風化した雲母等が認められる。

（山中）


A
24.50m
23.00m
B
23.00m
22.00m
I：黒色土（7.5YR 1.7/1） 粘着性中 堅密度堅 袋の根が多い 表土層
II：黒色土（7.5YR 2/1） 粘着性中 堅密度堅 袋の根を含む
III：極暗褐色土（7.5YR 2/3） 粘着性弱 堅密度堅 包含層
IV：燻黄ブラ（Ma-イ-j）
Ma-ロ：褐色土（7.5YR 4/3） 粘着性弱 堅密度堅 粒子細かくやや粘土質
Ma-g：赤褐色土（5YR 4/6） 粘着性なし 堅密度堅 粒状
Ma-h：褐灰色土（10YR 4/1） 粘着性なし 堅密度軟 層厚約1cmで帯状に堆積 粒状
Ma-i：明赤褐色土（5YR 5/6） 粘着性なし 堅密度堅 粒径0.1～1cm程度で構成される
Ma-j：黄灰色土（2.5Y 4/1） 粘着性なし 堅密度堅 砂状で粒子非常に細かい V層との境界にオリーブ黒（5Y 3/1）のシルト質土が堆積する箇所がある（層厚5mm程度）
V：黒褐色土（10YR 2/1） 粘着性弱 堅密度軟 縄文早期の包含層
VI：黒褐色土（7.5YR 3/3） 粘着性中 堅密度軟 亜角礫を含む場合がある 漸移層
撹乱
根痕
I：黒色堆積土（10YR 2/1） 粘着性中 堅密度堅 袋の根に富む 表土
III：黒褐色堆積土（10YR 2/2） 粘着性中 堅密度堅 上位に灰白色のテフラが疎らに混じる 下位は燻黄テフラが混じる IVとの層界漸変
IV：燻黄テフラ(Ma-イ-j) Vとの層界画然 上位はやや疎緻
V：黒色堆積土（10YR 2/1） 粘着性中 堅密度堅 VIとの層界判然 縄文早期の包含層
VI：黒褐色堆積土（10YR 2/3） 粘着性中 堅密度堅 VIIとの層界判然 VとVIIの漸移層
VII：黄褐色堆積土（10YR 5/6） 粘着性中～強 堅密度堅 黄褐色ロームの地山
0
2m
1:60

図Ⅲ－3　調査区土層図

（3）発掘調査の方法

Ⅰ章4節（1）項で述べたように、調査区「北東部」の1,740㎡はⅢ層とⅤ層、「南西部」の飛び地490㎡と両者の間「追加部」380㎡はⅤ層の発掘を行った。重機による掘削は「北東部」が表土のみ、「南西部」と「追加部」が表土～Ⅳ層までで、掘削後は方眼杭を打設した。掘削された表土等は整形してブルーシートで覆い、土砂の飛散・流出を防止した。また、調査区が無名沢に近接していることから、沢沿いに土嚢を積み、調査で発生した排土が沢に流れ込まないようにした。

包含層調査は、4×4ｍのグリッド単位で行った。重機による掘削残土をジョレン等で除け、遺物の出土状況や土色等の変化に注意しながら、層ごとに移植ゴテ、ねじり鎌、スコップで掘り下げた。なお、遺物分布の多寡を早急に把握するため、グリッドを1つおきに掘り下げることで、全体面積の約25％を先行して調査し、その結果をみて、残るグリッドの調査順序を判断した。出土遺物はグリッド・層・遺物種類（土器・石器・礫）ごとにまとめ、出土位置と日付を記入したポリ袋に入れて取り上げた。掘り下げは地山であるⅦ層が現れるまで複数回繰り返した。

なお、「北東部」の急斜面（M57杭とG63杭を結んだ線より北西側）では一輪車が使えないので、排土は調査を終えたすぐ近くのグリッドに捨てることにし、その排土を足場として利用しながら、斜面の下方から上方のグリッドへ順次掘り下げを行った。

遺構調査は、確認したものについて適宜行った。土坑は輪郭内の覆土を半分掘り下げて、土層断面の写真撮影と土層図作成を行い、その後残り半分の覆土を掘り下げて全体を検出し、完掘写真撮影・平面図・断面図の作成を行った。焼土は小トレンチを入れて土層断面が入った全体を撮影し、土層図・平面図を作成した。土器・礫集中は竹ベラや箸・串等を用いて個々の遺物の輪郭をはっきりさせ、出土状況の写真を撮影した。図化は遺物の範囲を記録した場合と、個々の遺物の出土状況を図化した場合がある。

遺構に関連する遺物は、出土位置を計測して取り上げている。なお、ＶＦ－1～4他、黒曜石の砕片等の微細遺物が目に付いた遺構等の場合、土ごとポリ袋に入れて取り上げ、水洗フルイ選別（1㎜メッシュ）でそれらを回収した。

遺構等の記録は主に手実測で行い、遺構の平面図・断面図、調査区の土層図等を基本的に20分の1で作成した。平面図の基線には、方眼杭を利用した場合と、トータルステーションで設置した任意の点を利用した場合がある。断面図の基線はオートレベルを用いて切りの良い標高に水糸を張った。調査終了面（Ⅶ層）の地形はオートレベルを用いて2ｍごとに観測した。なお、土器・礫の出土状況図についてはオルソ（正射投影）化した写真画像から作成したものもある（Ⅴ層土器集中2・4、Ⅴ層礫集中1）。

現地調査で使用したカメラは、6×7㎝判のフィルムカメラ（マミヤ RZ67PROⅡ＜フィルムは富士フィルムのNEOPAN ACROS100・FUJICHROME PROVIA100Fを使用＞）、デジタル一眼レフカメラ（ニコンD5500）、コンパクトデジタルカメラ（リコー WG-5 GPS）である。

撮影は遺構の土層・完掘状況、遺物出土状況、調査状況、調査区全景等について行い、記録保存のため同一カットを同じ条件（シャッタースピード・絞り）で2コマ撮影し、1セットとした。ブレ・ボケ等を防止するため、撮影の際は三脚・レリーズを用いた。撮影の際には、撮影日・被写体名・被写体のあるグリッドと層位・撮影方向・カットNo・撮影者を野帳に記入し、これをもとに後日写真台帳を作成した。

（山中）

2　整理作業の方法

（1）整理作業の方法

図面類の整理作業は、まず、現地調査時に作成した遺構平面図、断面図等の「原図」について担当した調査員が点検、修正を行い、必要に応じて「素図」を作成した。その後、修正した原図や素図をスキャナーで取り込みデジタルデータ化し、それを下図として、パソコン（ＯＳ：windows10）の描画ソフト（Adobe Illustrator CC）によりデジタルトレースを行った。また、土器・礫の出土状況図等で写真測量を行った遺構については、パソコン上で図化を行った。縮尺は、遺構図は原則40分の１とし、グリッド設定図等は600分の１等で作成した。遺跡周辺を含む縮尺の大きい地形図は主に国土地理院発行の数値地図５万分の１を使用し、加筆等を行い作成した。また、遺跡周辺の地形図等については、鋼路開発建設部から提供を受けた用地実測図（縮尺1,000分の１）を使用し、加筆等を行い作成した。個々の地形図や遺構図の作成後に、上記のパソコン及びソフトで、報告書の版下を作成した。また、現地調査時に撮影した遺構の写真については画像編集ソフト（Adobe Photoshop CC）とページレイアウトソフト（Adobe InDesign CC）を使用して版下を作成した。遺構平面図等の原図・素図、撮影した写真のフィルム及びデジタルデータは整理・収納し、報告書刊行後、最終的に当センターで保管している。

遺物の整理作業は、一次及び二次の二段階に大きく分かれる。一次整理作業は５～10月にかけて、主に現地で行なった。作業内容は現地調査で取り上げた遺物の水洗、分類、カード・台帳作成、注記等である。現地作業終了後、遺物をプラスチック製の箱に収納し、江別のセンターへ搬送し、二次整理作業は江別市にあるセンターの整理作業場で行った。作業内容は、接合、復元、実測、写真撮影等である。

一次整理作業は、最初に出土遺物について、歯ブラシ等で水洗して土汚れを落とす水洗作業を行い、次に調査員が分類作業を行った。分類項目は土器であれば、時期（「群」）・部位（「口縁部」等）・残存状態（「良好」・「小破片」等）、石器等であれば、器種（「石鏃」等）、残存状態（「完形」等）、石材（「黒曜石」等）という項目ごとに分類した。出土地点や分類等は遺物カードに記入し、カードを基に遺物台帳に登録した。礫集中はカード記入の際、便宜的な遺構名として「Ｓ」という略称を用い、例えばⅢ層礫集中１であれば、「ⅢＳ－１」と記入した。遺物台帳は最終的に、パソコンの表計算ソフト（Microsoft Excel2010）で作成し、遺物の集計作業等を行った。その後、土器は、裏面に「遺跡名（略号：オ３）」・出土地点（遺構名・発掘区）」・「取り上げ番号」・「層位」について白色のポスターカラーで注記を行い、注記部分には保護用のニスを塗った。注記内容の例は遺構（ⅢＰ－１）の覆土出土の場合「オ３ ⅢＰ－１・１ フク」となる（「フク」は覆土の略）。包含層出土の例ではＪ60区のⅤ層から出土した場合「オ３ Ｊ60 Ⅴ 」となる。ただし、注記は約２㎝以下の小型の土器片や、器面が摩耗や剝離しているもの（残存状態「小破片」・「磨耗」・「剝離」）については行っていない。石器等についても必要に応じて、同様の注記を行った。礫集中や包含層出土の礫については、遺物カード作成後に廃棄したものもある。また、土坑や焼土等で剝片・砕片、骨片、炭化物等の微細遺物の採取を目的として土壌ごと取り上げてポリ袋に入れたものについては、１㎜メッシュのフルイによる水洗選別法で微細遺物を回収し、他の遺物同様、分類、カード記入、台帳登録作業を行った。

二次整理作業では、土器については最初に接合作業を行った。まず遺構出土の土器片を優先し、次に包含層出土のものを発掘区単位で広げた。接合作業の結果、全体の形状を把握できる個体の中から、部位や接合状況を勘案して、７個体（Ⅲ層出土３点、Ⅴ層出土４点）について復元し、実測した。そ

の他の接合した土器片は原則的に全て接着剤で固定し、補強が必要なものは樹脂を充填した。次に復元土器以外のものから、部位や文様等が特徴的な土器を報告書掲載用に抽出し、Ⅲ層出土の土器30点（内遺構出土３点）、Ⅴ層出土の土器57点（内遺構出土15点）について、拓影図の作成及び断面図の実測を行った。石器は、点数の多いⅤ層出土について接合作業を行った。次に器種ごとに報告書掲載用の石器を抽出し、Ⅲ層出土の石器25点（内遺構出土２点）、Ⅴ層出土の石器61点（内遺構出土８点）について実測を行った。Ⅴ層出土の円盤状土製品２点についても、実測を行っている。土器、石器共にⅤ層出土が多いため、接合、実測した遺物は縄文時代早期の土器・石器が多い。また、Ⅲ層出土の鉄製品（鋲）１点は最初に実測・トレース、写真撮影を行い、その後保存処理を行った。

遺物の実測及びトレースは破片土器の断面図のトレースを除き、手作業で行っている。実測、トレース終了後、センター内の写場で報告書掲載用の写真撮影を行い、写真については画像編集ソフト（Adobe Photoshop CC）を使用して版下を作成した。

それらと併行して、遺物台帳を基に出土遺物の点数表、発掘区ごとの遺物点数分布図、掲載遺物一覧等の表作成を行い報告書に掲載した。整理作業終了後には遺物の収納作業を行った。大きく掲載遺物と非掲載遺物に分け、復元土器は段ボール、それ以外の遺物はプラスチック製の箱に収納し、収納台帳を作成した。最終的にこれらの遺物は根室市教育委員会が保管する。

（2）遺物の分類

・土器

Ⅰ群　縄文時代早期に属する土器群
- a類：貝殻腹縁文・条痕文・沈線文のある土器群。テンネル式・浦幌式などに相当するもの。
- b類：撚糸文・絡条体圧痕文・短縄文などが施される土器群。
  東釧路式系土器群（東釧路Ⅱ式・東釧路Ⅲ式・コッタロ式・中茶路式・東釧路Ⅳ式）

Ⅱ群　縄文時代前期に属する土器群
- a類：縄文実底土器・押型文尖底土器など。綱文式・朱円式・温根沼式などに相当するもの。
- b類：刺突文土器・押型文平底土器など。網走式・シュブノツナイ式などに相当するもの。

Ⅲ群　縄文時代中期に属する土器群
- a類：刺突文土器・押引文土器・押型文平底土器など。常呂川河口押型文Ⅰ群、智東式等に相当するもの。
- b類：モコト式・北筒Ⅱ式の古段階に相当するもの。

Ⅳ群　縄文時代後期に属する土器群
- a類：北筒Ⅱ式の新段階、北筒Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ式などに相当するもの。
- b類：手稲式・鉈澗式・エリモB式などに相当するもの。
- c類：堂林式・御殿山式・栗沢式などに相当するもの。

Ⅴ群　縄文時代晩期に属する土器群
- a類：大洞B・BC式に併行するもの。
- b類：大洞C1・C2式、幣舞式などに相当するもの。
- c類：大洞A・A´式、緑ヶ岡式などに相当するもの。

Ⅵ群　続縄文時代に属するもの

Ⅶ群　擦文文化期に属するもの

Ⅷ群　オホーツク文化期に属するもの（トビニタイ式土器を含む）

残存状態分類基準

「良　好」：破片の表裏面及び割れ口の残存状態が良いもの
「剥　離」：破片の表裏面のいずれか、あるいは両面が約1/2以上剥離・剥落しているもの
「磨　耗」：破片が磨耗しているもの
「小破片」：大きさが長径２cm程度以下の小さな破片

・石器等

剥片石器では石鏃、石槍・ナイフ、両面調整石器、石錐、スクレイパー、二次加工・使用痕のある剥片（U・Rフレイク）、石核、剥片（砕片を含む）、原石がある。また、これらとは別に石刃鏃石器群として、石刃鏃、彫刻刀型石器（彫器）、削片、二次加工ある石刃などがある。礫石器では磨製石斧、たたき石、すり石、砥石、台石・石皿、加工・使用痕ある礫がある。その他として礫、土製品がある。土製品には円盤状土製品がある。

・金属製品

鉄製品として鉄鍋がある。

残存状態分類基準

「完　形」：ほとんど欠損が無く、ほぼ全体が残っているもの
「準完形」：全体の3/4程度が残っているもの
「半　形」：全体の1/2程度が残っているもの
「　片　」：全体の約3/5以上を欠損するもの

（広田）

Ⅳ章　遺　構

1　概　要

Ⅲ層で土坑８基（ⅢＰ－１～８）、焼土１か所（ⅢＦ－１）、礫集中５か所を検出した（図Ⅳ－１・２）。土坑は楕円形のもの（ⅢＰ－２・３・４・８）と円形のもの（ⅢＰ－１・５～７）がある。これらの時期は判然としないが、周囲の遺物出土状況からみて、64ライン以東のものは擦文文化期後期またはオホーツク文化期の可能性がある。なお、Ⅲ層の調査は「北東部」の1,740㎡について行った。

Ⅴ層では、土坑墓1基（ＶＰ－１）、焼土６か所（ＶＦ－１～６）、土器集中４か所、礫集中４か所を検出した（図Ⅳ－１・７）。いずれも縄文時代早期のものである。土坑墓（ＶＰ－１）は平面形が長径約1.3mの楕円形で、坑底の西北隅から小型の土器１個体が出土した。斜面下の平坦部で検出した焼土４か所（ＶＦ－１～４）は、約２mの間隔をあけて一列に並んでおり、その周囲では黒曜石の剥片石器が比較的多く出土した。土器集中１・４は東釧路Ⅲ式、２は同Ⅱ式の破片のまとまりで、３は両者が出土した。礫集中１は、拳よりやや大きな礫・礫片約1,500点が５×６mの範囲にまとまっており、一部ではそれらが隙間なく密集していた。礫・礫片の大部分は被熱している。

2　Ⅲ層の遺構

（1）土　坑

ⅢＰ－１（図Ⅳ－３、図版３－１・２）

位　置　G67区　　**平面形態**　円形

規　模　0.77×0.64 ／ 0.75×0.59 ／ 0.20m

確認・調査　調査区東側のG67区で、円形の黒色土の落込みを確認した。南側の一部が試掘坑によって切られている。南東側を半裁した結果、Ⅳ層（摩周テフラ）を掘り込んだ土坑であることを確認した。

覆　土　覆土１層には焼土粒と微細な骨片も含む。また、覆土２層は海砂と考えられる。

底面・壁　底面はⅣ層で、南東側には凹みがある。壁は西側が急角度で立ち上がる。

遺物出土状況　覆土１層中に骨片を含む。北東端の壁際からは礫が１点出土した。

時　期　周辺から出土した包含層の遺物等から擦文文化期後期またはオホーツク文化期が考えられる。

（笠原）

ⅢＰ－２（図Ⅳ－３、図版３－３・４）

位　置　D68区　　**平面形態**　隅丸長方形

規　模　1.38×0.56 ／ 1.31×0.51 ／ 0.35m

確認・調査　調査区北東側D68区のⅣ層上面で、隅丸長方形の黒色土の落込みを確認した。短軸方向で南側を半裁し、床面と壁の立ち上がりを確認した。

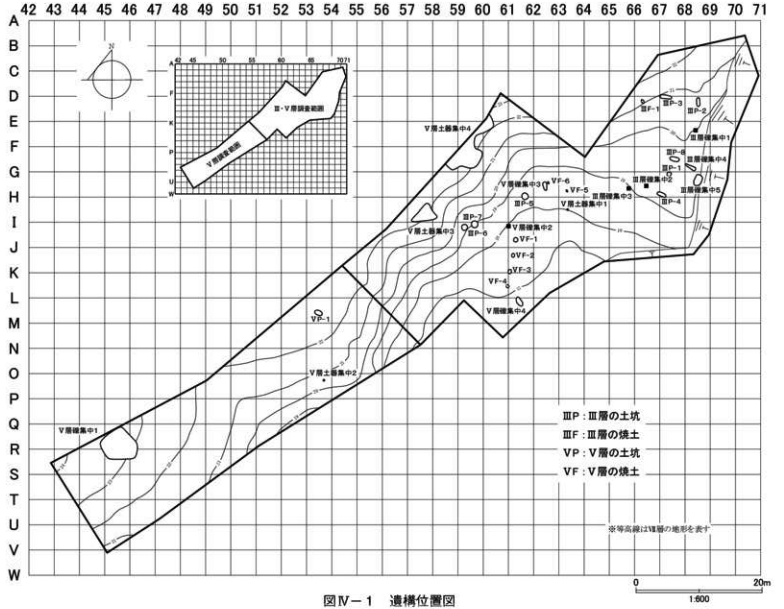
覆　土　覆土はⅢ層が主体で、覆土２層には摩周テフラがブロック状に混じる。

底面・壁　底面はⅣ層で、地形に沿って南側に傾斜する。壁は北側で鋭角に立ち上がる。

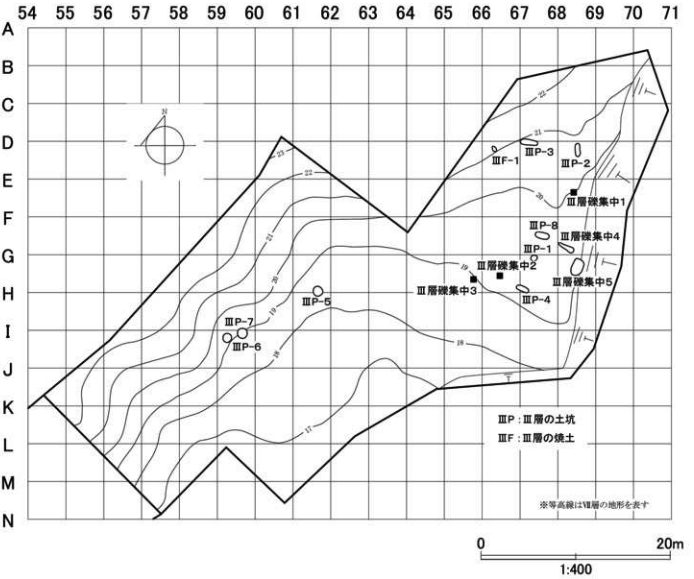
遺物出土状況　遺物は出土していない。

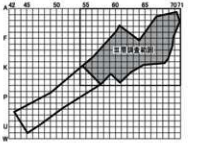
時　期　周辺から出土した包含層の遺物等から擦文文化期後期またはオホーツク文化期が考えられる。

（笠原）


42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71
A B C D E F G H I J K L M N O P Q R S T U V W
Ⅲ・Ⅴ層調査範囲
Ⅴ層確認調査範囲
Ⅴ層土器集中4
Ⅴ層土器集中3
Ⅴ層土器集中2
Ⅴ層土器集中1
Ⅴ層礫集中1
Ⅴ層礫集中2
Ⅴ層礫集中3
Ⅴ層礫集中4
Ⅲ層礫集中1
Ⅲ層礫集中2
Ⅲ層礫集中3
Ⅲ層礫集中4
Ⅲ層礫集中5
ⅢP-1
ⅢP-2
ⅢP-3
ⅢP-4
ⅢP-5
ⅢP-6
ⅢP-7
ⅢP-8
ⅢF-1
VP-1
VF-1
VF-2
VF-3
VF-4
VF-5
VF-6
ⅢP：Ⅲ層の土坑
ⅢF：Ⅲ層の焼土
ⅤP：Ⅴ層の土坑
ⅤF：Ⅴ層の焼土
※等高線は1m間の地形を表す
0
20m
1:600

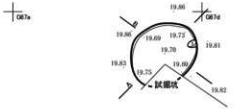
図Ⅳ－１　遺構位置図


54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71
A B C D E F G H I J K L M N
ⅢF−1
ⅢP−3
ⅢP−2
Ⅲ層礫集中1
ⅢP−8
Ⅲ層礫集中4
ⅢP−1
Ⅲ層礫集中2
Ⅲ層礫集中5
Ⅲ層礫集中3
ⅢP−4
ⅢP−5
ⅢP−7
ⅢP−6
ⅢP：Ⅲ層の土坑
ⅢF：Ⅲ層の焼土
※等高線はⅦ層の地形を表す
0
20m
1:400


Ⅲ層調査範囲

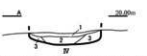
図Ⅳ－２　Ⅲ層遺構位置図

ⅢP-1



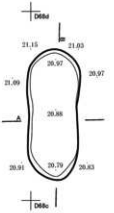
ⅢP-1

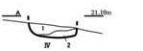
番号	分類	遺物出土標高(m)	備考
1	礫	19.71	



1：黒色土（7.5YR 2/1） 粘着性弱 堅密度軟 Ⅲ層 明赤褐色土（2.5YR 5/6）が帯状に混じる
骨片あり 板状礫あり
2：褐灰色砂（7.5YR 4/1） 粘着性なし 堅密度弱
3：黒褐色土（7.5YR 2/2） 粘着性中 堅密度軟 Ⅲ＞Ⅳ（わずか）

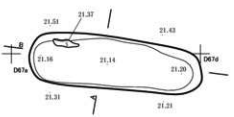
ⅢP-2

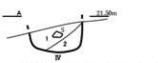




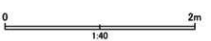
1：黒色土（10YR 1.7/1） 粘着性中 堅密度軟 Ⅲ層
2：黒褐色土（10YR 2/2） 粘着性中 堅密度軟 Ⅲ＞Ⅳ（径1～5mmのブロック状）

ⅢP-3





1：黒色土（7.5YR 1.7/1） 粘着性中 堅密度軟 Ⅲ層 大礫2点 板状礫1点 小破片数点あり
2：黒褐色土（7.5YR 2/2） 粘着性中 堅密度軟 Ⅲ＞Ⅳ（わずか）



図Ⅳ－3　ⅢP－1～3

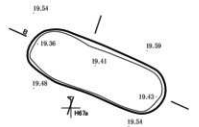
ⅢＰ－３（図Ⅳ－３、図版３－５・６）
位　置　D66・D67区　　**平面形態**　隅丸長方形
規　模　1.84×0.57／1.70×0.52／0.32m
確認・調査　調査区北東側D66・67区のⅣ層上面で、隅丸長方形の黒色土の落込みを確認した。短軸方向の東側を半裁し、床面と壁の立ち上がりを確認した。
覆　土　覆土はⅢ層が主体である。覆土２層には摩周テフラが僅かに混じる。
底面・壁　底面はⅣ層で平坦である。壁は西側が急角度に立ち上がる。
遺物出土状況　板状の礫が北西端で壁に張り付くように出土した。覆土中から礫が６点出土した。
時　期　周辺から出土した包含層の遺物等から擦文文化期後期またはオホーツク文化期が考えられる。
（笠原）

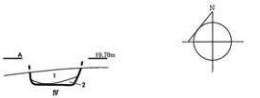
ⅢＰ－４（図Ⅳ－４、図版３－７・８）
位　置　G66・G67・H67区　　**平面形態**　隅丸長方形
規　模　1.52×0.56／1.44×0.48／0.22m
確認・調査　調査区東側G66・G67区のⅣ層上面で、隅丸長方形の黒色土の落込みを確認した。短軸方向で東側を半裁し、床面と壁の立ち上がりを確認した。
覆　土　覆土はⅢ層が主体である。覆土２層にはⅣ層摩周テフラがブロック状に混じる。
底面・壁　底面はⅣ層で、西側がやや傾斜する。壁は急角度に立ち上がる。
遺物出土状況　覆土１層からⅦ群土器片が２点、二次加工・使用痕ある剝片１点、礫が１点出土した。覆土２層からも礫が１点出土した。
時　期　出土した遺物等から擦文文化期後期またはオホーツク文化期が考えられる。
（笠原）

ⅢＰ－５（図Ⅳ－４、図版４－１・２）
位　置　G61・H61区　　**平面形態**　円形
規　模　0.95×0.93／0.83×0.79／0.72m
確認・調査　丘陵傾斜地下部のG61・H61区のⅣ層上面で、円形の黒色土の落込みを確認した。南側を半裁し、土層観察を行いながら掘り下げを行った。約70cm掘り下げた時点で床面を検出し、ややフラスコ型に立ち上がる壁面を確認した。
覆　土　覆土は埋戻しと考えられ、Ⅲ層を主体にⅣ層やⅤ層、Ⅵ層が混じる。最下層に黒褐色土の薄層が堆積する。
底面・壁　底面はⅥ層で、東側に傾斜する。壁は胴部で括れ、開口部に向かい外反する。
遺物出土状況　覆土中からⅠ群ｂ類の土器片が２点出土した。
時　期　周辺から出土した遺物等から縄文時代中期後半から後期前葉の北筒式期が考えられる。
（笠原）

ⅢＰ－６（図Ⅳ－４、図版４－３・４）
位　置　I59区　　**平面形態**　円形
規　模　0.96×0.93／0.68×0.59／0.57m
確認・調査　斜面下部にあたるI59区のⅣ層で、黒色土の円形の広がりを確認した。断面を観察するため南東側半分を掘り下げたところ、平坦な底面と立ち上がりが検出できたことから土坑と判断した。
覆　土　覆土は５層に分けた。壁際には崩落したⅣ層が堆積する（３・５層）。
底面・壁　底面はⅤ層中につくられ、北西から南東に傾く。立ち上がりは明瞭である。

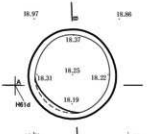
ⅢP-4

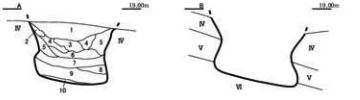




1:黒色土（7.5YR 1.7/1） 粘着性中 堅密度軟 Ⅲ層 土器2点 黒曜石1点 礫1点あり
2:黒褐色土（7.5YR 2/2） 粘着性中 堅密度軟 Ⅲ＞Ⅳ 礫1点あり

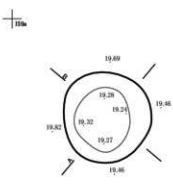
ⅢP-5





1:黒色土（7.5YR 1.7/1） 粘着性中 堅密度堅 Ⅲ層
2:褐色土（7.5YR 4/4） 粘着性中 堅密度軟 Ⅳ＞Ⅲ
3:黒褐色土（7.5YR 3/1） 粘着性中 堅密度軟 Ⅲ＞Ⅳ(粘状)
4:黒褐色土（7.5YR 2/2） 粘着性中 堅密度軟 Ⅲ主体 Ⅳがわずかに混じる
土器片2点あり
5:黒色土（7.5YR 2/1） 粘着性中 堅密度軟 Ⅲ層
6:黒褐色土（5YR 2/1） Ⅲ＞Ⅳ～Ⅵわずかに 微量の炭含む
7:にぶい褐色土（7.5YR 5/4） 粘着性中 堅密度堅
8:赤褐色土（5YR 4/6） Ⅳ＞Ⅴ混じり
9:褐色土（7.5YR 4/6） Ⅵ＞Ⅴ
10:黒褐色土（5YR 3/1） 粘着性弱 堅密度軟 Ⅴ＞Ⅵ

ⅢP-6



1:黒色土（10YR 2/1） 粘着性中～強 堅密度軟
径1、2mm程度の摩滅輝石がわずかに混じる
2:黒褐色土（10YR 2/2） 粘着性中～強 堅密度軟
径1、2mm程度の摩滅輝石がわずかに混じる
3:暗褐色土（10YR 3/3） 粘着性強 堅密度軟 Ⅳ主体
4:黒褐色土（10YR 2/2） 粘着性強 堅密度軟
径1cm程度以下の摩滅輝石(Oda・小)がわずかに混じる
5:暗褐色土（10YR 3/3） 粘着性強 堅密度軟 Ⅳ主体

0 2m
1:40

図Ⅳ－4 ⅢP－4～6

遺物出土状況　遺物は出土しなかった。
時　期　Ⅲ層から掘り込まれた土坑であるが、明確な時期は不明である。

（山中）

ⅢＰ－７（図Ⅳ－５、図版４－５・６）
位　置　H59・Ⅰ59区　　**平面形態**　円形
規　模　1.08×(1.06)／0.99×0.97／0.56m
確認・調査　斜面下部にあたるH59・Ⅰ59区のⅣ層で、黒色土の円形の広がりを確認した。断面を観察するため中央部分を溝状に掘り下げたところ、平坦な底面と立ち上がりが検出できたことから土坑と判断した。
覆　土　覆土は７層に分けた。１・２層はⅢ層土が主体、３・４層はⅣ層を主体とし、黒色土の薄層を数枚はさむ。最下部には黒色土の薄層が堆積する。
底面・壁　底面は平坦でⅦ層中につくられ、壁は垂直に近い。自然層との層界は画然としている。
遺物出土状況　遺物は出土しなかった。
時　期　Ⅲ層から掘り込まれた土坑であるが、明確な時期は不明である。

（山中）

ⅢＰ－８（図Ⅳ－５、図版４－７・８）
位　置　F67区　　**平面形態**　隅丸長方形
規　模　1.48×0.70／1.36×0.60／0.15m
確認・調査　調査区東側のF67区のⅢ層下位で、円礫のまとまりが出土した。礫集中を想定し検出に努めた結果、下位に東西方向を長軸にした隅丸長方形の落込みを確認した。長軸方向で半裁し、掘り下げを行い床面と壁面の立ち上がりを確認した。礫は上層にのみ堆積する。
覆　土　覆土はⅢ層が主体で、上位に礫の集中を伴う。埋戻しによるものと考えられる。
底面・壁　底面はⅣ層で、平坦である。壁は緩やかに立ち上がる。
遺物出土状況　覆土上層から円礫が38点出土した。
時　期　周辺から出土した遺物等から擦文文化期後期またはオホーツク文化期が考えられる。

（笠原）

（２）焼　土

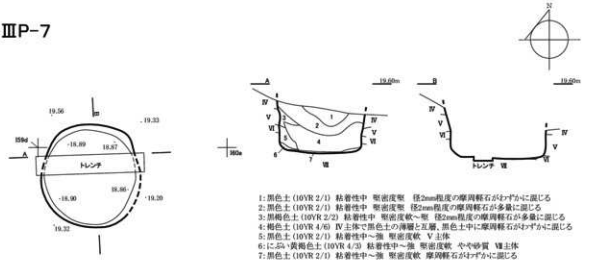
ⅢＦ－１（図Ⅳ－５、図版５－１）
位　置　D66区　　**平面形態**　長楕円形
規　模　0.67×0.41／0.13m
確認・調査　調査区北東側のC66・D66区のⅢ層中で、赤色の焼土を検出した。長軸方向で半裁を行い、土層を確認した。赤色焼土の層厚は約10㎝で、微細な骨片を含む。
遺物出土状況　骨片が出土した。土器や石器等は出土していない。
時　期　周辺から出土した遺物等から擦文文化期後期またはオホーツク文化期が考えられる。

（笠原）

（３）Ⅲ層礫集中

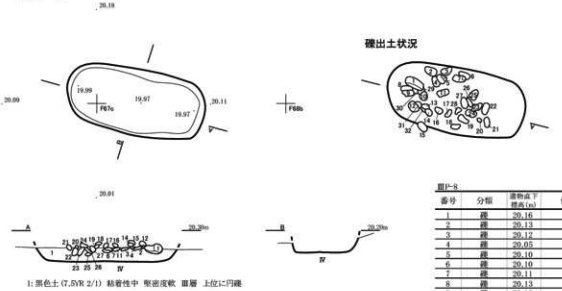
Ⅲ層礫集中１（図Ⅳ－６、図版５－３）
位　置　E68区　　**平面形態**　－
規　模　0.70×0.56m
確認・調査　調査区北東側E68区のⅢ層中で、円礫や亜角礫の集中を確認した。

ⅢP-7



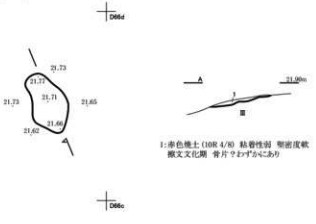
1:黒色土(10YR 2/1) 粘着性中 堅密度堅 径2mm程度の摩周軽石がわずかに混じる
2:黒色土(10YR 2/1) 粘着性中 堅密度堅 径2mm程度の摩周軽石が多量に混じる
3:黒褐色土(10YR 2/2) 粘着性中 堅密度軟～堅 径2mm程度の摩周軽石が多量に混じる
4:褐色土(10YR 4/6) Ⅳ主体で黒色土の薄層と互層,黒色土中に摩周軽石がわずかに混じる
5:黒色土(10YR 2/1) 粘着性中～強 堅密度軟 Ⅴ主体
6:にぶい黄褐色土(10YR 4/3) 粘着性中～強 堅密度軟 やや砂質 Ⅶ主体
7:黒色土(10YR 2/1) 粘着性中～強 堅密度軟 摩周軽石がわずかに混じる

ⅢP-8



1:黒色土(7.5YR 2/1) 粘着性中 堅密度軟 Ⅲ層 上位に円礫

ⅢF-1



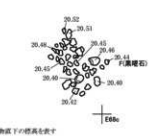
1:赤色地土(10R 4/6) 粘着性弱 堅密度軟
撤文文化期 骨片やわずかにあり

ⅢP-8

番号	分類	遺物点下標高(m)	備考
1	礫	20.16	
2	礫	20.13	
3	礫	20.12	
4	礫	20.05	
5	礫	20.10	
6	礫	20.10	
7	礫	20.11	
8	礫	20.13	
9	礫	20.12	
10	礫	20.11	
11	礫	20.09	
12	礫	20.12	
13	礫	20.11	
14	礫	20.16	
15	礫	20.18	
16	礫	20.13	
17	礫	20.14	
18	礫	20.14	
19	礫	20.17	
20	礫	20.11	
21	礫	20.14	
22	礫	20.12	
23	礫	20.12	
24	礫	20.11	2点
25	礫	20.09	
26	礫	20.12	
27	礫	20.12	
28	礫	20.15	
29	礫	20.11	4点
30	礫	20.12	
31	礫	20.08	
32	礫	20.09	3点

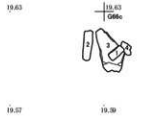
図Ⅳ－5 ⅢP－7・8、ⅢF－1

Ⅲ層礫集中1



※標高は遺物底下の標高を表す

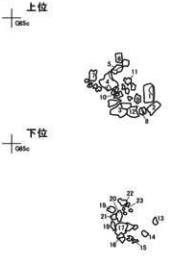
Ⅲ層礫集中2



Ⅲ層礫集中2

番号	分類	遺物底下標高(m)	備考
1	礫	19.73	
2	礫	19.68	
3	礫	19.71	2点
4	礫	19.70	

Ⅲ層礫集中3



Ⅲ層礫集中3

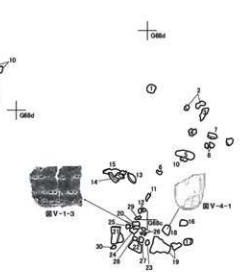
番号	分類	遺物底下標高(m)	備考
1	礫	19.67	
2	礫	19.66	
3	礫	19.65	3点
4	礫	19.64	
5	礫	19.63	
6	礫	19.65	11点
7	礫	19.65	
8	礫	19.62	2点
9	礫	19.62	
10	礫	19.64	4点
11	礫	19.61	4点
12	礫	19.61	5点
13	礫	19.61	
14	礫	19.58	
15	礫	19.60	
16	礫	19.61	
17	礫	19.60	2点
18	礫	19.59	
19	礫	19.60	
20	礫	19.60	
21	礫	19.60	
22	礫	19.59	2点
23	礫	19.57	3点

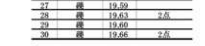
Ⅲ層礫集中4

Ⅲ層礫集中4

番号	分類	遺物底下標高(m)	備考
1	礫	20.09	
2	礫	19.96	
3	礫	19.99	
4	礫	20.01	
5	礫	20.01	2点
6	礫	20.00	
7	礫	20.00	
8	礫	19.95	
9	礫	19.98	
10	礫	19.85	
11	礫	19.96	
12	Ⅵ群土器	19.89	
13	礫	19.88	
14	Ⅵ群土器	19.93	図Ⅴ-1-2
15	礫	19.91	
16	礫	19.95	3点
17	礫	19.93	
18	礫	19.93	

Ⅲ層礫集中5





Ⅲ層礫集中5

番号	分類	遺物底下標高(m)	備考
1	礫	19.59	
2	礫	19.51	2点
3	礫	19.51	
4	剥片	19.53	
5	ナウ石	19.62	図Ⅴ-1-2
6	剥片	19.51	
7	礫	19.51	
8	礫	19.50	2点
9	礫	19.47	2点
10	礫	19.51	
11	礫	19.67	
12	礫	19.61	2点
13	礫	19.68	
14	礫	19.70	3点
15	礫	19.69	
16	礫	19.46	
17	礫	19.42	
18	たたき石	19.48	図Ⅴ-1-1
19	礫	19.48	2点
20	Ⅵ群土器	19.64	2点 図Ⅴ-1-3
21	礫	19.65	
22	礫	19.56	
23	礫	19.52	
24	礫	19.63	
25	礫	19.64	
26	礫	19.62	
27	礫	19.59	
28	礫	19.63	2点
29	礫	19.60	
30	礫	19.66	2点

図Ⅳ－6　Ⅲ層礫集中1～5

遺物出土状況　礫は41点である。この他に黒曜石の剥片が１点出土した。
時　期　周辺から出土した遺物等から撚文文化期後期またはオホーツク文化期が考えられる。
（笠原）

Ⅲ層礫集中２（図Ⅳ－６、図版５－２）
位　置　G66区　　**平面形態**　－
規　模　0.54×0.42m
確認・調査　調査区東側G66区のⅢ層中で、板状の礫と棒状礫等が重なるように出土した。
遺物出土状況　板状の礫が２点、棒状礫が２点、亜角礫１点の計５点である。
時　期　周辺から出土した遺物等から撚文文化期後期またはオホーツク文化期が考えられる。
（笠原）

Ⅲ層礫集中３（図Ⅳ－６、図版５－５・６）
位　置　G65区　　**平面形態**　扇状
規　模　（上位）0.78×0.54m（下位）0.50×0.45m
確認・調査　調査区東側G65区のⅢ層中で、板状の礫が扇状に広がる礫集中を確認した。上位と下位の２回に分けて取上げを行った。
遺物出土状況　礫が計51点出土した。この他に貼付文のあるⅧ群土器の破片が１点出土した。
時　期　出土した遺物等から撚文文化期後期またはオホーツク文化期が考えられる。
（笠原）

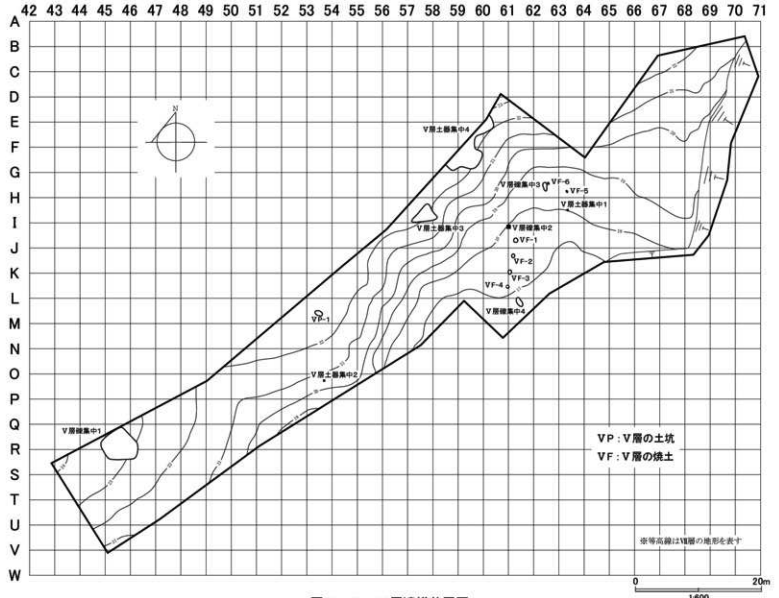
Ⅲ層礫集中４（図Ⅳ－６、図版５－４）
位　置　F68区　　**平面形態**　－
規　模　1.89×0.63m
確認・調査　調査区東側F68区のⅢ層中で、板状の礫が散布する礫の集中を確認した。
遺物出土状況　礫が20点、Ⅵ群土器片が１点、Ⅷ群の土器片が１点出土した。
時　期　出土した遺物等から続縄文時代から撚文文化期後期またはオホーツク文化期が考えられる。
（笠原）

Ⅲ層礫集中５（図Ⅳ－６、図版６－１）
位　置　G68区　　**平面形態**　－
規　模　1.82×1.17m
確認・調査　調査区東側G68区のⅢ層中で、板状の礫と円礫が混在する礫の集中を確認した。
遺物出土状況　礫が36点、たたき石が１点、すり石１点、黒曜石剥片２点、Ⅷ群土器の破片が２点出土した。
時　期　出土した遺物等から撚文文化期後期またはオホーツク文化期が考えられる。
（笠原）

３　Ⅴ層の遺構

（１）土坑墓

ＶＰ－１（図Ⅳ－８、図版６－２～４）
位　置　L53区　　**平面形態**　長楕円形
規　模　1.26×0.78 ／ 1.11×0.70 ／ 0.33m


42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71
A B C D E F G H I J K L M N O P Q R S T U V W
N
Ⅴ層土器集中4
Ⅴ層礫集中3
VF-6
VF-5
Ⅴ層土器集中1
Ⅴ層土器集中3
Ⅴ層礫集中2
VF-1
VF-2
VF-3
VF-4
Ⅴ層礫集中4
VF-7
Ⅴ層土器集中2
Ⅴ層礫集中1
VP：Ⅴ層の土坑
VF：Ⅴ層の焼土
※等高線はⅤ層の地形を表す
0
20m
1:600

図Ⅳ－７　Ⅴ層遺構位置図

確認・調査　調査区西側L53区のⅥ層上面で、北西から南東方向を長軸とした長楕円形の褐色土の落込みを確認した。短軸方向で東側を半裁し、掘り下げを行った結果、床面と壁面の立ち上がりを確認した。土壙墓であると考えられる。遺体の形態を示すようなものは残っていない。坑底直上の土壌を採取し放射性炭素年代測定用のサンプルとした。

覆　土　覆土は埋戻しで、Ⅴ層にⅥ層がブロック状に混じる。Ⅴ層の腐植土はあまり発達していない。また、赤色顔料等も認められない。

底面・壁　底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

遺物出土状況　北西隅の床面から、口縁部を欠いた底部から胴部にかけて残存する土器が出土した。

時　期　放射性炭素年代測定の結果、暦年較正年代（２σ）で7928-7895calBP、7873-7725calBPという測定値を得た（Ⅵ章１節参照）。縄文時代早期後半東釧路Ⅱ式期が考えられる。

（笠原）

（2）焼　土

ＶＦ－１～４（図Ⅳ－９、図版６－５・６、７－１・２）

位　置　ＶＦ－１：Ｉ61区　　ＶＦ－２：Ｊ61区　　ＶＦ－３：Ｊ60・Ｊ61・Ｋ60・Ｋ61区
ＶＦ－４：Ｋ60・61区

平面形態　ＶＦ－１：略円形　　ＶＦ－２：楕円形　　ＶＦ－３：略円形　　ＶＦ－４：楕円形

規　模　ＶＦ－１：0.62×0.51／0.08m　　ＶＦ－２：0.60×0.55／0.04m
ＶＦ－３：0.56×0.54／0.06m　　ＶＦ－４：(0.58)×(0.48)／0.05m

確認・調査　斜面下の平坦部のⅤ層を調査中、赤みを帯びた土の広がり４か所が、約２ｍの間隔をあけて一列に並んでいるのを確認した。４か所それぞれの中央を溝状に掘り下げて断面を観察した結果、いずれもその場で形成された焼土であることがわかった。

遺物出土状況　ＶＦ－１～４の周囲では、黒曜石の剥片類が比較的多く出土している。焼土直上の土壌を水洗選別したところ、ＶＦ－１で391点（１点はチャート）、ＶＦ－２で88点、ＶＦ－３で95点、ＶＦ－４で４点の微細な黒曜石が回収できた。

時　期　Ⅴ層で検出されたことから、縄文時代早期の遺構である。周囲で出土した土器からみて、４か所とも東釧路Ⅱ式期であろう。なお、ＶＦ－１・３から水洗選別で回収した炭化木片について放射性炭素年代測定（ＡＭＳ）を依頼したところ、暦年較正年代（２σ）でＶＦ－１では7838-7687calBP、ＶＦ－３で8016-7935calBPという値が得られている（Ⅵ章１節参照）。

（山中）

ＶＦ－５（図Ⅳ－８、図版７－３）

位　置　Ｇ63区　　**平面形態**　楕円形

規　模　0.36×0.21／0.12m

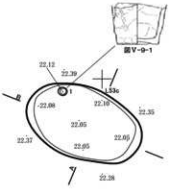
確認・調査　Ｇ63区のⅤ層を調査中、風倒木痕のくぼみに赤みを帯びた土の広がりを確認した。半裁して断面を観察した結果、その場で形成された焼土であると判断した。

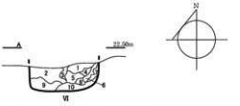
遺物出土状況　周囲で２cmほどの小角礫がまとまっていたが、下位の地山から風倒木で持ち上げられたものと考えられる。

時　期　Ⅴ層で検出されたことから、縄文時代早期のものである。周囲で出土した土器からみて、東釧路Ⅱ式もしくは同Ⅲ式期であろう。

（山中）

VP−1





1:明褐色土(7.5YR 5/6)　粘着性中　堅密度軟　VI主体
2:褐色土(7.5YR 4/4)　粘着性中　堅密度軟　VI主体　ブロック状
3:黒褐色土(7.5YR 3/1)　木根複乱
4:黒色土(7.5YR 2/1)　粘着性中　堅密度軟　V主体
5:褐灰色土(7.5YR 4/1)　粘着性中　堅密度軟　V＞VI(ブロック状)
6:灰褐色土(7.5YR 4/2)　粘着性中　堅密度軟　VI＞V
7:褐色土(7.5YR 4/6)　粘着性中　堅密度軟　VI主体
8:にぶい褐色土(7.5YR 5/4)　粘着性中　堅密度軟　VI＞V
9:灰褐色土(7.5YR 4/1)　粘着性中　堅密度軟　V＞VI(ブロック状)
10:褐灰色土(10YR 4/1)　粘着性中　堅密度軟　VI＝V　粒子細かい
腐植土がみあり発達していない

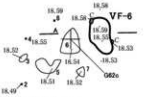
VP−1

番号	分類	遺物底下標高(m)	備考
1	1群土器	22.04	13点(破片)

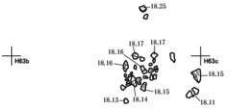
VF−5

1:黒褐色土(10YR 2/2)　粘着性中～強
堅密度軟　5mm程度の砂土/木片がブロックに混じる
2:赤褐色埴土(5YR 4/4)　粘着性中(1より強)
堅密度軟～堅
3:黒褐色土(10YR 2/2)　粘着性中
堅密度軟～堅　VIの塊が混じる

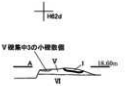
VF−6・V層礫集中3



V層土器集中1



※標高は遺物底下の標高を表す

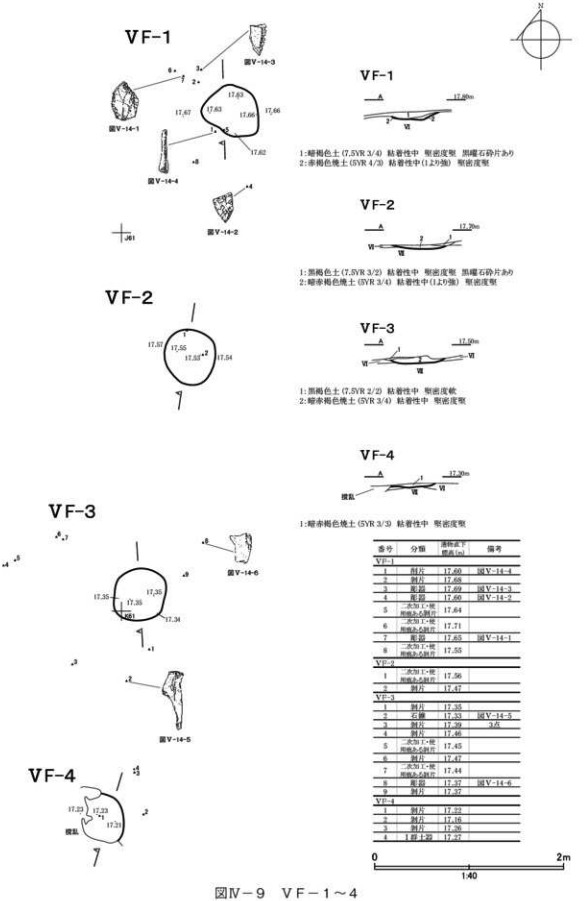


1:褐色土(7.5YR 4/4)　粘着性強　堅密度軟　炭ウ(ネットリする)

V層礫集中3

番号	分類	遺物底下標高(m)	備考
1	礫	-	53点
2	礫	-	
3	礫	-	2点
4	礫	-	
5	礫	-	19点
6	礫	-	20点
7	礫	-	8点
8	礫	-	

図Ⅳ−8　VP−1、VF−5・6、V層土器集中1、V層礫集中3



番号	分類	通称点下標点(m)	備考
VF-1			
1	剥片	17.60	図V-14-4
2	剥片	17.68	
3	彫器	17.69	図V-14-3
4	彫器	17.60	図V-14-2
5	二次加工・使用痕ある剥片	17.64	
6	二次加工・使用痕ある剥片	17.71	
7	彫器	17.65	図V-14-1
8	二次加工・使用痕ある剥片	17.55	
VF-2			
1	二次加工・使用痕ある剥片	17.56	
2	剥片	17.47	
VF-3			
1	剥片	17.35	
2	石錐	17.33	図V-14-5
3	剥片	17.39	3点
4	剥片	17.46	
5	二次加工・使用痕ある剥片	17.45	
6	剥片	17.47	
7	二次加工・使用痕ある剥片	17.44	
8	彫器	17.37	図V-14-6
9	剥片	17.37	
VF-4			
1	剥片	17.22	
2	剥片	17.16	
3	剥片	17.26	
4	1群土器	17.27	

図Ⅳ－9　ＶＦ－１～４

ＶＦ－６（図Ⅳ－８、図版７－４）
位　置　Ｇ62区　　**平面形態**　楕円形
規　模　0.40×0.24 ／ 0.05m
確認・調査　Ｇ62区のＶ層を調査中、褐色土の広がりを確認した。その中央を溝状に掘り下げて断面を観察した結果、焼けしまりがないこと等、その場で形成されたとは考えにくいが、焼土もしくは灰の可能性があると考えて記録した。
遺物出土状況　砕けたもろい礫片が周囲でややまとまって出土し、Ｖ層礫集中３として記録した。
時　期　Ｖ層で検出されたことから、縄文時代早期のものである。周囲で出土した土器からみて、東釧路Ⅱ式もしくは同Ⅲ式期であろう。

（山中）

（３）Ｖ層土器集中

Ｖ層土器集中１（図Ⅳ－８、図版７－５）
位　置　Ｈ63区　　**平面形態**　－
規　模　1.10×0.86m
確認・調査　丘陵傾斜地下のＨ63区Ｖ層中で、土器片のまとまりを確認した。
遺物出土状況　東釧路Ⅲ式の土器片が51点出土した。
時　期　出土した遺物から縄文時代早期後半である。

（笠原）

Ｖ層土器集中２（図Ⅳ－10、図版７－６）
位　置　Ｏ53区　　**平面形態**　－
規　模　0.30×0.24m
確認・調査　Ｎ53・Ｏ53区のＶ層調査中、土器片が一か所からまとまって出土したので、土器集中として記録した。
遺物出土状況　土器片は同一個体の口縁～胴部破片とみられ、残存状態は良く、大きめのものもある。土器片の点数は78点を数える。
時　期　土器片が東釧路Ⅱ式であることから、縄文時代早期である。

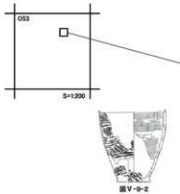
（山中）

Ｖ層土器集中３（図Ⅳ－10、図版７－７）
位　置　Ｈ57・58区　　**平面形態**　－
規　模　4.18×2.08m
確認・調査　調査区中央、丘陵傾斜地のＨ57・58区にかけてのＶ層中で、土器片の広がりを確認した。
遺物出土状況　東釧路Ⅱ式・同Ⅲ式の土器片が182点、剝片が２点、砥石片３点、加工・使用痕のある礫が１点、この他礫が５点出土した。
時　期　出土した遺物から縄文時代早期後半である。

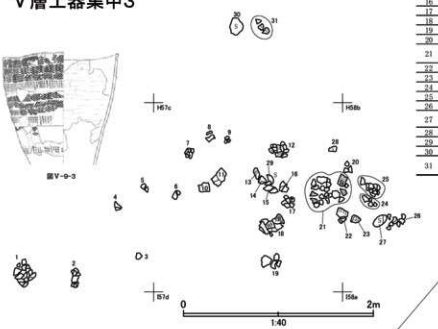
（笠原）

Ｖ層土器集中４（図Ⅳ－10、図版７－８）
位　置　Ｄ60・Ｅ59・Ｅ60・Ｆ58・Ｆ59区　　**平面形態**　不整形
規　模　10.55×(3.90)m
確認・調査　斜面の肩にあたるＥ59・Ｆ59区のＶ層調査中、土器片等が10.5×3.9mの範囲からまとまって出土したので、土器集中として記録した。土器片は細かいものも多く、約３㎝以下の小片は適宜取

Ⅴ層土器集中2



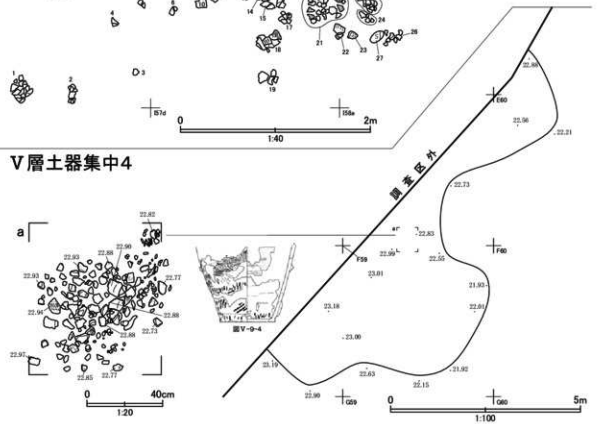
Ⅴ層土器集中3



Ⅴ層土器集中3

番号	分類	遺物底下標高(m)	備考
1	1群土器	22.51	5点
2	1群土器	22.44	10点
3	1群土器	22.39	
4	1群土器	22.53	3点
5	剥片	22.53	
	1群土器		20点
6	1群土器	22.46	4点
7	1群土器	22.47	5点
8	礫	22.41	
	1群土器		
9	1群土器	22.36	2点
10	1群土器	22.37	
11	1群土器	22.32	8点
12	1群土器	22.54	14点
13	1群土器	22.29	
14	1群土器	22.22	8点
15	1群土器	22.18	3点
16	1群土器	22.14	4点
17	1群土器	22.09	7点
18	1群土器	22.14	17点
19	1群土器	22.08	4点
20	1群土器	21.97	3点
21	剥片	21.99	
	1群土器		28点
22	1群土器	21.90	4点
23	1群土器	21.86	
24	1群土器	21.85	4点
25	1群土器	21.85	13点
26	1群土器	21.71	11点
27	加工・使用痕ある剥	21.75	
28	礫	21.99	
29	礫	22.15	
30	礫	22.59	
31	礫	22.51	
	敲石		3点

Ⅴ層土器集中4



図Ⅳ−10　Ⅴ層土器集中2～4

り上げながら集中範囲を検出した。

遺物出土状況　範囲の一部では、土器片が密集した状態も認められる（図中ａの枠内）。また、土器片とともに、黒曜石の石鏃・剥片や有溝砥石（図Ⅴ－21－61）等も得られている。土器片の点数は629点を数える。

時　期　時期が判断できる土器片がいずれも東釧路Ⅲ式であることから、縄文時代早期である。

（山中）

（4）Ⅴ層礫集中

Ⅴ層礫集中１（図Ⅳ－11、図版８－１）

位　置　Q44・Q45・Q46・R44・R45・R46区　　**平面形態**　全体：楕円形、密集部分：楕円形

規　模　全体：5.74×5.28m、密集部分：1.32×1.26 ／ 0.16m

確認・調査　R45区とその周辺のⅤ層を掘り下げたところ、礫・礫片がまとまって出土したことから、礫集中と判断した。検出作業は約３cm以下の礫片を適宜取り上げながら行った。

遺物出土状況　Ⅴ層礫集中１として取り上げた礫・礫片は1,493点を数え、総重量は約236kgである。Ⅴ層上面で礫・礫片の一部が現れていたが、まとまった状況を検出したのはⅤ層中である。まとまりは密集部分（Ａ－Ａ′部分・遺物番号129）と集中部分に大別できる。前者では完形礫が目に付き、多数の礫・礫片が重なり合っていたのに対し、後者では礫片が多く、重なって出土するものは少ない。完形礫は拳よりやや大きい転礫が大半で（最大で長さ約17cm）、礫片も転礫面があるものが多い。板状等の角礫は僅かである。これらの多くは赤みを帯びており、被熱した可能性が高い。なお、礫・礫片は集中部分の外側にも散在していたが、それらはグリッド単位で取り上げた。また、礫集中とその周囲では、Ⅴ層中に長さ１cm前後の炭化木片が微量に混じる。

時　期　Ⅴ層で検出されたことから、縄文時代早期の遺構である。周囲で出土した土器からみて、東釧路Ⅱ式期であろう。

（山中）

Ⅴ層礫集中１　Ｐ－１（図Ⅳ－11、図版８－２）

位　置　R44区　　**平面形態**　不整形

規　模　0.38×0.38 ／ 0.32×0.24 ／ 0.12m

確認・調査　Ⅴ層礫集中１の周辺をⅥ層まで掘り下げたところ、炭化木片が混じる暗褐色土の不整な広がりを確認した。輪郭をはっきりさせるため、暗褐色土とその周囲を更に掘り下げたところ、礫片・土器片が暗褐色土中から出土した。暗褐色土の中央にトレンチを入れ、断面等を観察した結果、皿状の断面を呈することがわかったので、小型の土坑の可能性があると考えて記録した。

覆　土　１層のみで、２cm程度の炭化木片が微量に混じる暗褐色土である。

底面・壁　底面は概ね平坦で、立ち上がりは緩やかである。皿状を呈する。

遺物出土状況　土器片16点・礫片６点が覆土中から出土した。

時　期　Ⅴ層で検出されたことから、縄文時代早期の遺構である。覆土出土の土器からみて、東釧路Ⅱ式期であろう。礫片や炭化木片からⅤ層礫集中１に関連する遺構と考えている。

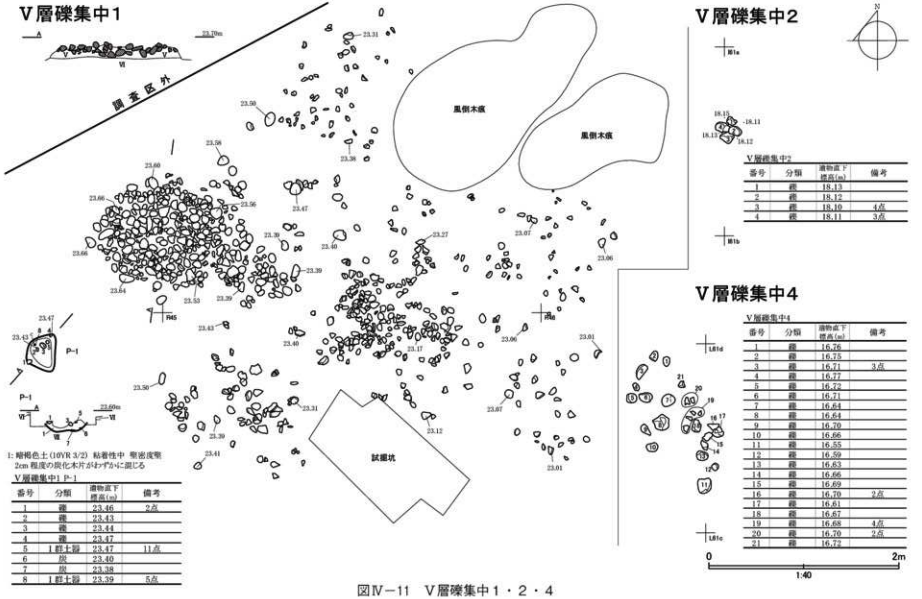
（山中）

Ⅴ層礫集中２（図Ⅳ－11、図版８－３）

位　置　Ⅰ60・61区　　**平面形態**　－

規　模　0.28×0.28m

確認・調査　調査区中央、丘陵傾斜地下Ⅰ60・61区のⅤ層中で、割れた円礫の集中を確認した。



1: 暗褐色土 (10YR 3/2) 粘着性中 聖密度聖
2cm 程度の炭化木片がわずかに混じる

V層礫集中1 P-1

番号	分類	遺物底下標高(m)	備考
1	礫	23.46	2点
2	礫	23.43	
3	礫	23.44	
4	礫	23.47	
5	I 群土器	23.47	11点
6	炭	23.40	
7	炭	23.38	
8	I 群土器	23.39	5点

V層礫集中2

番号	分類	遺物底下標高(m)	備考
1	礫	18.13	
2	礫	18.12	
3	礫	18.10	4点
4	礫	18.11	3点

V層礫集中4

番号	分類	遺物底下標高(m)	備考
1	礫	16.76	
2	礫	16.75	
3	礫	16.71	3点
4	礫	16.77	
5	礫	16.72	
6	礫	16.71	
7	礫	16.64	
8	礫	16.64	
9	礫	16.70	
10	礫	16.66	
11	礫	16.55	
12	礫	16.59	
13	礫	16.63	
14	礫	16.66	
15	礫	16.69	
16	礫	16.70	2点
17	礫	16.61	
18	礫	16.67	
19	礫	16.68	4点
20	礫	16.70	2点
21	礫	16.72	

図Ⅳ−11　V層礫集中1・2・4

遺物出土状況　礫が計９点出土した。被熱痕が認められるものもある。
時　期　出土層位や周辺から出土した遺物等から縄文時代早期後半と考えられる。

（笠原）

Ｖ層礫集中３（図Ⅳ－８、図版８－４）
位　置　Ｇ62区　　**平面形態**　－
規　模　1.27×0.66m
確認・調査　Ｇ62区のＶ層調査中、砕けたもろい礫片がややまとまって出土したので、礫集中として記録した。焼土ＶＦ－６の傍で出土しており、関連があるのかもしれない。
遺物出土状況　ＶＦ－６西側のまとまりと南西側のまとまりに分かれる。礫片の点数は105点を数える。
時　期　Ｖ層で検出されたことから、縄文時代早期のものである。周囲で出土した土器からみて、東釧路Ⅱ式もしくは同Ⅲ式期であろう。

（山中）

Ｖ層礫集中４（図Ⅳ－11、図版８－５）
位　置　Ｌ61区　　**平面形態**　－
規　模　1.60×0.84m
確認・調査　調査区南端の低位部、Ｌ61区のⅥ層上面で、環状に分布する礫のまとまりを確認した。中央部にトレンチを設定し、土層の観察も行った。その結果、焼土や炭化物等は認められない。
遺物出土状況　円礫や亜角礫が計28点した。被熱痕と考えられるものもあるが、判然としない。
時　期　出土層位や周辺から出土した遺物等から縄文時代早期後半と考えられる。

（笠原）

表Ⅳ－１　遺構一覧

掲図	図版	遺構	上端 長径	上端 短径	下端 長径	下端 短径	深さ（厚さ）	主軸方位	出土遺物点数	時期
Ⅳ－3	3－1・2	ⅢP－1	0.77	0.64	0.75	0.59	0.20	－	礫：2	擦文文化後期またはオホーツク文化期
	3－3・4	ⅢP－2	1.38	0.56	1.31	0.51	0.35	N－0°	—	擦文文化後期またはオホーツク文化期
	3－5・6	ⅢP－3	1.84	0.57	1.70	0.52	0.32	N－83°－W	礫：6	擦文文化後期またはオホーツク文化期
Ⅳ－4	3－7・8	ⅢP－4	1.52	0.56	1.44	0.48	0.22	N－67°－W	土器：2、石器：1、礫：2	擦文文化後期またはオホーツク文化期
	4－1・2	ⅢP－5	0.95	0.93	0.83	0.79	0.72	－	土器：2	縄文中期後半～後期前葉（北筒式期）
	4－3・4	ⅢP－6	0.96	0.93	0.68	0.59	0.57	－	—	不明
Ⅳ－5	4－5・6	ⅢP－7	1.08	(1.06)	0.99	0.97	0.56	－	—	不明
	4－7・8	ⅢP－8	1.48	0.70	1.36	0.60	0.15	N－76°－W	礫：38	擦文文化後期またはオホーツク文化期
	5－1	ⅢF－1	0.67	0.41	－	－	0.13	－	—	擦文文化後期またはオホーツク文化期
Ⅳ－6	5－3	Ⅲ層礫集中1	0.70	0.56	－	－	－	－	石器：1、礫：41	擦文文化後期またはオホーツク文化期
	5－2	Ⅲ層礫集中2	0.54	0.42	－	－	－	－	礫：5	擦文文化後期またはオホーツク文化期
	5－5・6	Ⅲ層礫集中3	0.78	0.54	0.50*	0.45*	－	－	土器：1、礫：51	擦文文化後期またはオホーツク文化期
	5－4	Ⅲ層礫集中4	1.89	0.63	－	－	－	－	土器：2、礫：20	擦文文化後期またはオホーツク文化期
	6－1	Ⅲ層礫集中5	1.82	1.17	－	－	－	－	土器：2、石器：4、礫：36	擦文文化後期またはオホーツク文化期
Ⅳ－8	6－2～4	VP－1	1.26	0.78	1.11	0.70	0.33	N－66.5°－W	土器：13	縄文早期（東釧路Ⅱ式期）
Ⅳ－9	6－5	VF－1	0.62	0.51	－	－	0.08	－	石器：8	縄文早期（東釧路Ⅱ式期）
	6－6	VF－2	0.60	0.55	－	－	0.04	－	石器：2	縄文早期（東釧路Ⅱ式期）
	7－1	VF－3	0.56	0.54	－	－	0.06	－	石器：11	縄文早期（東釧路Ⅱ式期）
	7－2	VF－4	(0.58)	(0.48)	－	－	0.05	－	土器：1、石器：3	縄文早期（東釧路Ⅱ式期）
Ⅳ－8	7－3	VF－5	0.36	0.21	－	－	0.12	－	—	縄文早期（東釧路Ⅱ・Ⅲ式期）
	7－4	VF－6	0.40	0.24	－	－	0.05	－	—	縄文早期（東釧路Ⅱ・Ⅲ式期）
Ⅳ－10	7－5	V層土器集中1	1.10	0.86	－	－	－	－	土器：51	縄文早期（東釧路Ⅱ式期）
	7－6	V層土器集中2	0.30	0.24	－	－	－	－	土器：78	縄文早期（東釧路Ⅱ式期）
	7－7	V層土器集中3	4.18	2.08	－	－	－	－	土器：182、石器：6、礫：5	縄文早期（東釧路Ⅱ・Ⅲ式期）
	7－8	V層土器集中4	10.55	(3.90)	－	－	－	－	土器：629、石器：10、礫：8	縄文早期（東釧路Ⅱ式期）
Ⅳ－11	8－1	V層礫集中1	5.74	5.28	1.32*	1.26*	0.16*	－	土器：6、石器：3、礫：1,493	縄文早期（東釧路Ⅱ式期）
	8－2	＊P－1	0.38	0.38	0.32	0.24	0.12	－	土器：16、礫：6、炭：2	縄文早期（東釧路Ⅱ式期）
	8－3	V層礫集中2	0.28	0.28	－	－	－	－	礫：9	縄文早期（東釧路Ⅱ・Ⅲ式期）
Ⅳ－8	8－4	V層礫集中3	1.27	0.66	－	－	－	－	礫：105	縄文早期（東釧路Ⅱ・Ⅲ式期）
Ⅳ－11	8－5	V層礫集中4	1.60	0.84	－	－	－	－	礫：28	縄文早期（東釧路Ⅱ・Ⅲ式期）

＊計測値の単位はm、石器には礫石器を含む、Ⅲ層礫集中3のP層礫はF区の計測値、V層礫集中1のP層礫は密集部の計測値、出土遺物点数に水洗フルイ選別同収の遺物は含まない

表Ⅳ－２　Ⅴ層礫集中１出土礫計測表

遺物番号	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
6	Ⅴ層	7.2	6.8	5.8	379	
9	Ⅴ層	8.6	6.4	4.8	368	
15	Ⅴ層	9.2	8.3	5.6	472	2点接合
26	Ⅴ層	7.0	6.7	3.8	253	
37	Ⅴ層	8.9	7.9	8.3	960	
72	Ⅴ層	7.8	6.4	4.5	300	
76	Ⅴ層	14.8	10.1	6.4	1,338	
115	Ⅴ層	5.8	4.2	3.0	107	
121	Ⅴ層	8.9	6.1	3.5	268	
121	Ⅴ層	9.6	5.7	3.6	291	
121	Ⅴ層	7.6	5.0	2.6	144	
123	Ⅴ層	7.3	7.1	3.5	245	
125	Ⅴ層	11.7	8.6	5.8	795	
127	Ⅴ層	11.8	8.7	6.4	791	
129	Ⅴ層	7.8	7.4	4.3	349	
129	Ⅴ層	10.9	7.8	5.4	805	
129	Ⅴ層	8.3	7.1	5.9	469	
129	Ⅴ層	6.5	5.9	4.4	245	
129	Ⅴ層	9.0	7.7	4.1	383	
129	Ⅴ層	10.0	7.7	5.6	566	
129	Ⅴ層	10.5	8.1	4.7	659	
129	Ⅴ層	9.9	7.0	4.2	349	
129	Ⅴ層	9.5	7.9	5.2	559	
129	Ⅴ層	9.0	8.2	4.2	435	
129	Ⅴ層	8.9	6.4	5.0	409	
129	Ⅴ層	6.7	6.8	4.4	264	
129	Ⅴ層	12.0	9.8	4.3	696	
129	Ⅴ層	13.4	7.2	6.3	889	
129	Ⅴ層	11.3	9.6	5.4	860	
129	Ⅴ層	10.1	8.2	6.4	745	
129	Ⅴ層	11.0	8.9	4.2	551	
129	Ⅴ層	8.1	6.5	7.2	637	
129	Ⅴ層	9.4	8.4	5.4	559	
129	Ⅴ層	9.6	5.6	4.4	363	
129	Ⅴ層	6.7	6.3	4.7	230	
129	Ⅴ層	8.9	8.7	4.9	606	
129	Ⅴ層	9.8	7.2	5.2	635	
129	Ⅴ層	9.1	6.0	4.7	310	
129	Ⅴ層	12.4	7.2	8.0	890	
129	Ⅴ層	8.4	6.5	5.3	475	
129	Ⅴ層	7.4	6.0	3.1	190	
129	Ⅴ層	7.2	5.6	3.8	238	
129	Ⅴ層	8.3	6.5	3.7	271	
129	Ⅴ層	10.6	8.5	4.1	598	
129	Ⅴ層	10.7	11.0	7.6	993	
129	Ⅴ層	7.9	7.8	6.4	522	
129	Ⅴ層	8.9	7.7	5.7	506	
129	Ⅴ層	11.1	9.0	7.0	985	
129	Ⅴ層	11.3	8.2	6.4	757	
129	Ⅴ層	8.2	7.4	4.4	406	
129	Ⅴ層	12.0	8.2	5.6	992	
129	Ⅴ層	9.9	7.9	6.1	643	
129	Ⅴ層	9.6	8.2	4.7	553	
129	Ⅴ層	11.4	6.6	6.0	864	
129	Ⅴ層	10.9	9.1	7.1	910	
129	Ⅴ層	10.9	10.5	6.1	1,013	
129	Ⅴ層	11.2	8.9	4.7	822	
129	Ⅴ層	10.1	8.2	6.2	743	
129	Ⅴ層	11.5	6.2	3.5	392	
129	Ⅴ層	12.2	6.2	3.7	439	
129	Ⅴ層	8.1	7.0	5.4	396	
129	Ⅴ層	12.5	9.1	6.1	843	
129	Ⅴ層	11.4	7.1	4.9	554	
129	Ⅴ層	9.6	6.8	5.5	498	
129	Ⅴ層	9.4	6.2	6.8	731	
129	Ⅴ層	9.8	8.6	3.4	439	
129	Ⅴ層	12.2	9.2	4.3	576	
129	Ⅴ層	8.7	5.8	4.4	317	
129	Ⅴ層	7.4	7.0	4.4	343	
129	Ⅴ層	8.7	7.2	6.3	474	
129	Ⅴ層	11.1	6.9	7.0	709	
129	Ⅴ層	10.9	6.1	5.5	645	
129	Ⅴ層	10.0	8.7	4.5	574	
129	Ⅴ層	11.3	7.4	5.9	637	
129	Ⅴ層	11.9	8.9	6.3	1,000	
129	Ⅴ層	11.2	11.4	6.2	1,245	
129	Ⅴ層	7.1	7.0	5.4	368	
129	Ⅴ層	10.1	7.6	4.4	550	
129	Ⅴ層	8.6	8.6	4.8	509	
129	Ⅴ層	10.9	6.8	4.2	554	
129	Ⅴ層	9.8	6.4	6.7	750	
129	Ⅴ層	9.4	8.9	6.2	849	
129	Ⅴ層	12.6	8.7	6.9	1,178	
129	Ⅴ層	17.3	11.0	8.8	2,209	
129	Ⅴ層	8.3	5.3	4.7	309	
129	Ⅴ層	9.3	6.3	7.0	532	
129	Ⅴ層	11.4	8.0	6.9	803	
129	Ⅴ層	13.9	10.3	8.5	1,665	
129	Ⅴ層	11.5	7.8	6.1	885	
129	Ⅴ層	9.4	8.3	4.6	448	
129	Ⅴ層	11.3	6.1	3.6	379	
129	Ⅴ層	8.1	5.6	2.8	215	
129	Ⅴ層	10.8	7.5	4.2	438	
129	Ⅴ層	7.2	6.9	4.1	254	
129	Ⅴ層	13.5	12.3	7.9	515	
129	Ⅴ層	10.8	10.0	7.1	1,070	
129	Ⅴ層	9.6	8.9	6.0	755	
129	Ⅴ層	13.1	11.5	6.4	1,477	
129	Ⅴ層	10.3	8.1	5.0	526	
129	Ⅴ層	7.6	7.0	5.3	400	
129	Ⅴ層	9.3	8.3	5.9	515	
129	Ⅴ層	9.2	8.2	7.2	673	
129	Ⅴ層	10.9	8.0	8.2	1,260	
129	Ⅴ層	7.5	7.1	2.8	221	
129	Ⅴ層	11.0	8.2	4.2	571	
129	Ⅴ層	8.1	6.8	3.2	268	
129	Ⅴ層	8.2	5.2	4.7	296	
129	Ⅴ層	11.0	11.1	6.2	1,190	
129	Ⅴ層	14.6	11.5	8.3	2,097	
129	Ⅴ層	9.7	6.4	5.4	508	
129	Ⅴ層	10.1	7.8	3.8	517	
129	Ⅴ層	11.9	10.1	4.8	904	
129	Ⅴ層	11.9	9.0	6.4	1,152	
129	Ⅴ層	9.2	6.4	3.9	343	
129	Ⅴ層	10.9	6.5	4.0	434	
129	Ⅴ層	8.1	6.7	5.4	424	
129	Ⅴ層	8.4	7.1	4.3	383	
129	Ⅴ層	8.4	6.8	4.3	349	
129	Ⅴ層	9.1	6.0	3.7	335	
129	Ⅴ層	10.0	9.9	4.4	615	
129	Ⅴ層	10.2	9.3	6.9	1,008	
129	Ⅴ層	9.9	8.1	5.0	628	
129	Ⅴ層	9.9	9.9	6.3	914	
129	Ⅴ層	8.8	7.0	4.5	450	
129	Ⅴ層	11.6	8.8	6.3	1,123	
129	Ⅴ層	9.2	8.9	5.5	677	
129	Ⅴ層	10.6	8.6	5.9	883	
129	Ⅴ層	8.5	6.3	5.3	393	
129	Ⅴ層	12.1	9.1	6.0	852	
129	Ⅴ層	12.7	9.0	6.1	1,210	
132	Ⅴ層	9.9	8.1	3.1	434	
147	Ⅴ層	7.4	5.9	3.2	1,155	
148	Ⅴ層	12.1	10.9	6.2	206	

※計測は完形の礫のみ対象とした

V章　遺　物

1　概　要

今回の調査で土器は6,348点、石器等は5,608点、鉄製品が１点出土し、合計点数は11,957点である。その内、遺構出土は土器985点、石器等1,904点で、合計点数2,889点、包含層出土は土器5,363点、石器等3,704点、鉄製品１点で、合計点数は9,068点である。層位別（遺構出土も含める）では、Ⅲ層では土器520点、石器等1,318点、鉄製品１点、Ⅴ層では土器5,736点、石器等4,253点で、Ⅴ層出土の遺物点数が全体の84％を占めている。Ⅰ層（風倒木撹等を含む）では土器92点、石器等30点、Ⅵ層から石器等７点が出土している。また、土壌の水洗フルイ選別（１㎜メッシュ）では、土器や剥片・砕片656点や炭化物、骨片を回収した。

土器は縄文時代早期・中期後半～後期前葉、続縄文時代、擦文文化期、オホーツク文化期が出土しており、その中では縄文時代早期の土器が5,916点（93.2％）と最も多く、他は少量である。包含層の土器は、摩周テフラより下位のⅤ層からは縄文時代早期後半（東釧路Ⅱ式、同Ⅲ式）、摩周テフラより上位のⅢ層等からは主に縄文時代中期～擦文文化期の土器が出土している。土器の分布は調査区中央からやや北東側に多い傾向がみられ、特に54 ～ 65ラインの間の点数が多い。

石器等は石鏃・石槍・ナイフ、スクレイパー等の剥片石器や磨製石斧、たたき石等の礫石器や礫が出土している。今回の調査で出土した定型的な石器の出土点数は、砥石が81点と最も多く、次いで彫刻刀型石器（以下、彫器）が57点、石鏃26点、スクレイパー 25点となっている。特徴的な石器として、石刃鏃、彫器等の石刃鏃石器群がⅤ層から出土している。また、Ⅴ層からⅠ群土器の破片を素材とした円盤状土製品が７点（２個体）出土している。石材は、剥片石器では黒曜石が最も多く、チャート、頁岩等が少量みられる。礫石器では砂岩が最も多く、他に安山岩、泥岩等が少量ある。石器の分布は、調査範囲全体に広がっているが、土器同様調査区中央付近からやや北東側にかけて多い傾向がみられる。Ⅴ層出土の石刃鏃等の黒曜石13点について産地推定分析を行った結果、可能性も含めて置戸産が９点と多く次いで白滝産が３点で、１点のみ上士幌産？と推定された。

鉄製品は、鍋の破片がG65区のⅢ層から１点のみ出土した。

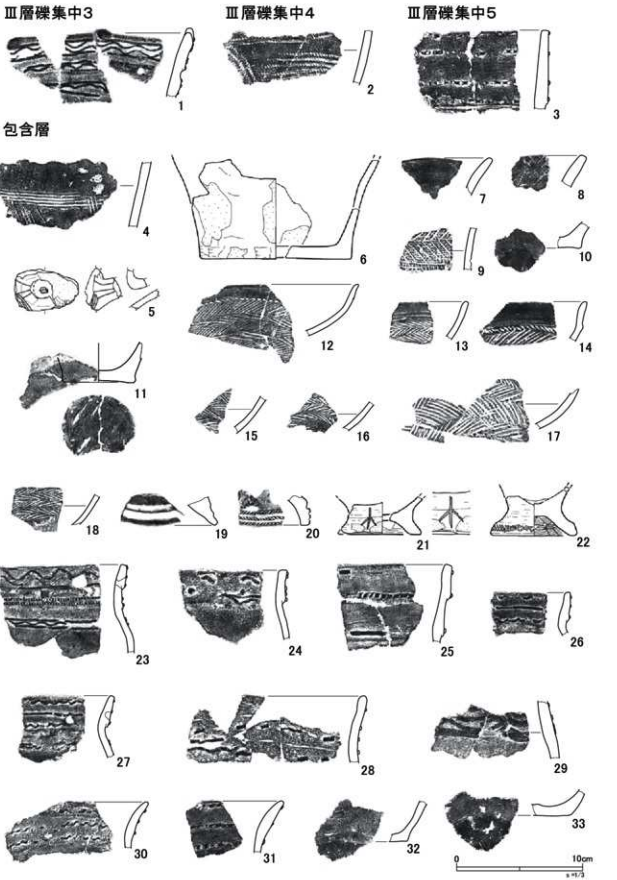
2　Ⅲ層の遺物

(1) 土　器

・遺構出土の土器（図Ⅴ－１－１～３）

Ⅲ層の遺構から出土した土器の点数は、９点と少量である。土器を出土した遺構はⅢＰ－４・５と礫集中３・４・５で、出土層位は全て覆土である。ⅢＰ－４はオホーツク式土器（Ⅻ群）胴部片、ⅢＰ－５では縄文時代早期の土器（Ⅰ群）の胴部片、礫集中３からはオホーツク式土器、礫集中４からは続縄文土器（Ⅵ群）とオホーツク式土器、礫集中５ではトビニタイ式土器（Ⅻ群）が出土している。遺構出土遺物は、礫集中３～５出土のものを掲載した。

１は礫集中３出土のⅫ群土器で、G66区Ⅲ層出土と接合している。口唇部に突起が付けられ、口縁から頸部にかけて、直線状及び波状貼付文の組み合わせ（以下直線・波状貼付文）が施される。２は礫集中４出土のⅥ群土器で、G65区Ⅲ層出土と接合している。胴部の破片で文様はＲＬ縄文が斜行、



図Ⅴ－1　Ⅲ層礫集中3～5、Ⅲ層出土の土器

横走している。3は礫集中5出土で、Ⅷ群土器の口縁部である。文様は細い横位の貼付文が4本施される。貼付文には刻みまたは押圧が連続的に施される。内外面には横位のミガキが施される。貼付文の特徴等からトビニタイ式土器と考えられる。

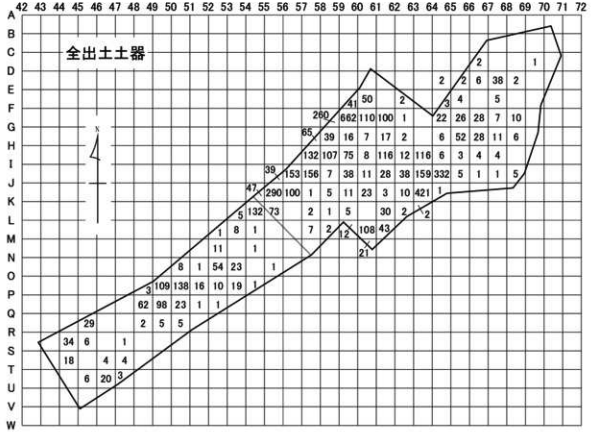
・包含層出土の土器（図Ⅴ－1－4～33）

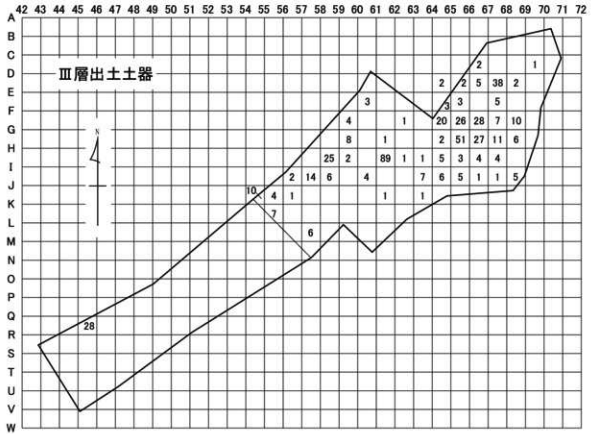
Ⅲ層出土の土器の時期は、縄文時代早期（Ⅰ群）、中期～後期（Ⅲ～Ⅳ群）、続縄文時代（Ⅵ群）、擦文文化期（Ⅶ群）、オホーツク文化期（Ⅷ群）がみられる。土器の総点数は511点で、時期別の内訳はⅧ群が206点と最も多く、他はⅢ～Ⅳ群91点、Ⅰ群88点、Ⅶ群86点、Ⅵ群38点、不明2点である。Ⅲ層出土のⅠ群土器は東釧路Ⅱ式、同Ⅲ式土器で、Ⅴ層で非常に多く出土している。Ⅲ層出土のⅠ群土器は、調査範囲が斜面に立地する事からも自然の営力等で移動した可能性がある。土器全体の分布は、Ⅲ層調査範囲の調査区中央付近から北東側にかけて出土し、その中では北西側の斜面の肩部分と斜面下の平坦面に多い。Ⅲ層出土のⅠ群土器は調査区中央付近北西側の斜面肩から上部にかけて多く出土している。Ⅲ～Ⅳ群はH～J60・61区から出土し小破片が多い。同一個体が細かく割れたものと考えられ、図示していないが土器型式では北筒Ⅱ式と考えられる。Ⅵ群土器は、調査区北東側のⅢ層調査範囲と、Ⅲ層が落ち込んで残っていたⅤ層調査範囲のQ45区から出土している。Ⅶ群土器とⅧ群土器はどちらもⅢ層調査範囲の東側が多く出土している。時期別の分布を比較するとⅢ～Ⅳ群とⅥ群土器がⅢ層調査範囲の中央付近にまとまり、Ⅶ群とⅧ群土器はⅢ層調査範囲東側に多く、分布傾向の違いがみられる。

4～6はⅥ群土器である。4・5は後北C_2D式土器である。4は深鉢の胴部で、文様はRL縄文が横走、斜行し、斜行縄文に沿って微隆起線文が施される。5は注口土器の注口部である。文様は微隆起線文が施され、一部縄文もみられる。6は深鉢の胴～底部で、内外面及び底面はナデで調整される。

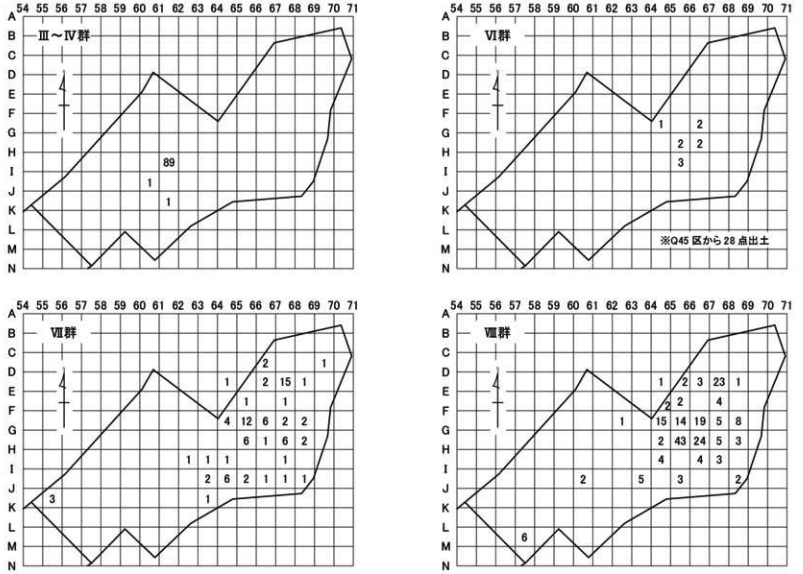
7～22はⅦ群土器で、7～11の器種は深鉢である。7・8は口縁部で内外面に横位のミガキが施される。8は沈線による斜格子状の文様がみられる。9は頸～胴部で文様帯がみられ、横位、斜位、縦位の沈線による文様が施される。10・11は底部である。10は小型で、外面及び底面は細かなミガキが施される。11は底部端がやや張り出す器形で、全体的にナデ、ミガキで調整される。12～22の器種は高坏で、12～18は内面に黒色処理が施されている。12～14は口縁部で、12・14は口縁部がやや外反する器形である。文様は上部が無文で、下部は横位に連続する斜位の沈線が施され、段ごとに向きを変えることで綾杉状の文様帯が構成される。12は文様の上端に横位の刻み列が施される。15～18は体部で、文様は沈線が綾杉状に施されるものが多い。16・18は外面にわずかにハケメがみられる。19～22は台部である。19は横位に段状の沈線がみられる。20は横位の貼付文が施され、貼付上には細かい刻みが連続して施される。21は外面に縦位と斜位の細い沈線を組み合わせた記号状の線刻がみられる。22は斜位の沈線により綾杉状を基調とした文様が施される。

23～33はⅧ群土器の深鉢である。23は口縁～胴部、24～28は口縁～頸部で、直線・波状貼付文が施される。23・24・25・27・28・30には器面に炭化物の付着がみられる。23～27は口縁部に肥厚帯がみられるものである。23は頸部の直線状貼付文に連続する細かい刻みが施され、口縁部には補修孔がみられる。24は肥厚帯に直線・波状貼付文が施されるが剥落している部分が多い。また、円形貼付文が施される。25は直線状貼付文が施され、肥厚帯下端の貼付文には連続する刻みがみられる。26は肥厚帯の上下端に小波状貼付文が、中央付近に直線状貼付文が施される。27は口縁部に1か所穿孔が施される。28は貼付文がやや太く、大部分が剥落している。29は胴部で、貼付文の幅が太く、縦断面形は長方形状である。内外面には炭化物の可能性がある黒色付着物がみられる。30・31はトビニタイ式土器である。どちらも部位は口縁部で、外反する器形である。30は小波状の貼付文が施され、貼付





図Ⅴ－２　Ⅲ層出土土器点数分布図（１）



図Ⅴ－３　Ⅲ層出土土器点数分布図（２）

文上には押圧が施される。外面下位と内面は横位のミガキで調整される。31は直線状の貼付文が施され、貼付文上には押圧ないし刻みがみられる。32・33は底部で、全体的にナデ調整が施されるが、一部ミガキで調整される。

（2）石器等

・遺構出土の石器等（図Ⅴ－4）

Ⅲ層の遺構から出土した石器等の点数は、剝片石器4点、礫石器2点、礫201点で合計207点である。石器等を出土した遺構はⅢP－1・3・4・8と礫集中1～5で、出土層位は全て覆土である。剝片石器は、二次加工・使用痕ある剝片がⅢP－4から1点、剝片が礫集中1から1点、礫集中5から2点出土した。礫石器は、礫集中5からたたき石とすり石が各1点出土した。礫は各遺構から出土しているが礫集中が多く、礫集中3から51点、礫集中1から41点、礫集中5から36点出土している。また、ⅢP－8から38点出土した。

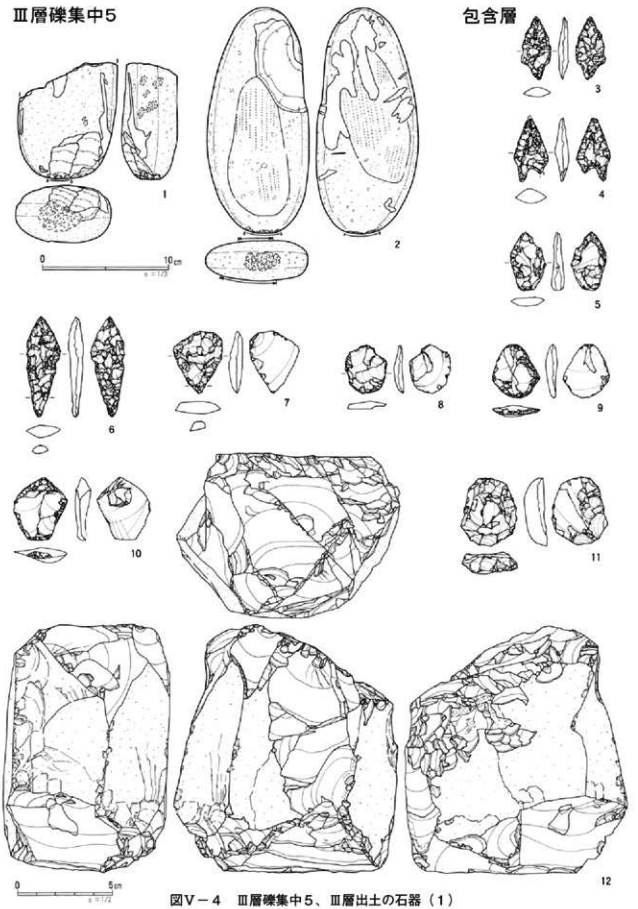
1・2は礫集中5から出土したものである。1はたたき石で、全体の約1/2を欠失する。石材は砂岩で、下端にたたき痕及び大きな剝離痕がみられる。また、右側面や裏面にも部分的にたたき痕がみられる。2はすり石で、扁平な亜円礫を素材とする。石材は砂岩で、表裏面に広いすり面がみられる。また、表面上部に大きな剝離痕、下端にはたたき痕があり、たたき石としても使用されている。

・包含層出土の石器等（図Ⅴ－4・5）

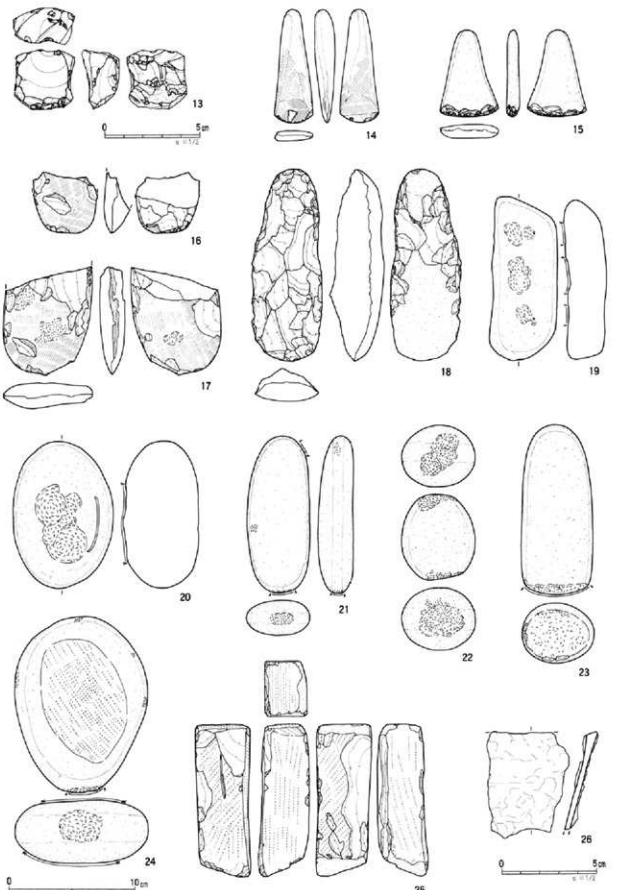
Ⅲ層から石器等は1,111点出土した。器種ごとの点数では礫が980点（88％）、剝片が69点（6％）と多く、他は少量である。剝片石器は98点で、定型的な石器では石鏃4点、石槍・ナイフ1点、両面調整石器1点、石錐1点、スクレイパー6点がある。礫石器は30点で、磨製石斧5点、たたき石10点、すり石2点、砥石3点、台石・石皿1点、加工・使用痕ある礫9点がある。礫を除いた石器等の分布は、器種ごとの大きな偏りはみられず、Ⅲ層調査範囲内で散漫にみられる。

3～5は石鏃で、石材は全て黒曜石である。3・4は有茎のもので、3は左側縁にかえしが作り出される。4は茎部が2か所あるもので、柄に挟み込むための形状と考えられる。5は無茎のもので、形状は左右非対称で、未成品と考えられる。素材は縦長剝片で、周縁部から細かい二次加工が施される。6は石槍・ナイフで、石材は黒曜石である。細長く左右非対称の形状で、両側縁中位に対向する浅い抉り部がみられる。7は石錐で、石材は黒曜石である。素材となる剝片の左側縁と下縁部に連続する急角度の二次加工が施され、尖った錐部が作り出されている。8～11はスクレイパーで、石材は全て黒曜石である。8～10は素材の下縁に刃部を作り出すものである。8は薄い横長剝片を素材とし、周縁部全体に細かい二次加工が施される。9は縦長剝片を素材とし、刃部の平面形は半円状である。10は細かい急角度の二次加工により、直線的な刃部が作り出される。11は表面に周縁部からやや粗い二次加工が連続的に施される。また、裏面右側縁にも二次加工がみられる。12・13は石核である。12は大型で、長さ13㎝、幅11.6㎝で重量は1,545ｇである。立方体に近い形状で、頁岩の角礫を素材とする。正面と上面が主な作業面で、打面と作業面を入れ替えながら不定形な剝片が剝離されている。13は黒曜石製で、打面と作業面を転移しながら剝片剝離が行われ、最終的に遺棄されている。

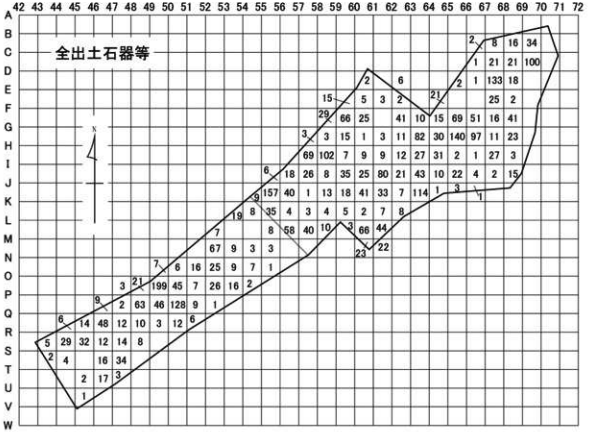
14～18は磨製石斧である。石材は14・16～18が砂岩、15が泥岩である。14・15は小型のもので、14は素材の形状を生かし、基部側はほとんど加工がみられない。下半部は表裏面共に丁寧な研磨が施される。15は未成品で、刃部付近のみ剝離が施される。16・17は基部側を大きく欠失する。どちらも刃部は、剝離や敲打で調整された後に研磨される。17は扁平な形状で、刃部の正面形は丸みを帯びている。18は未成品で、主に表面に周縁部から急角度の剝離が施され、形状が整えられる。19～23は

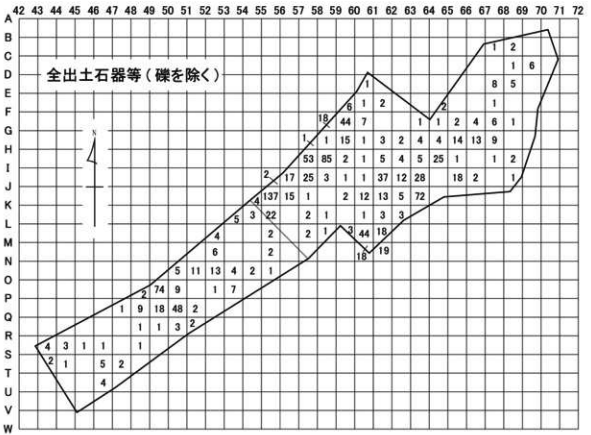


図Ⅴ－4　Ⅲ層礫集中5、Ⅲ層出土の石器（1）

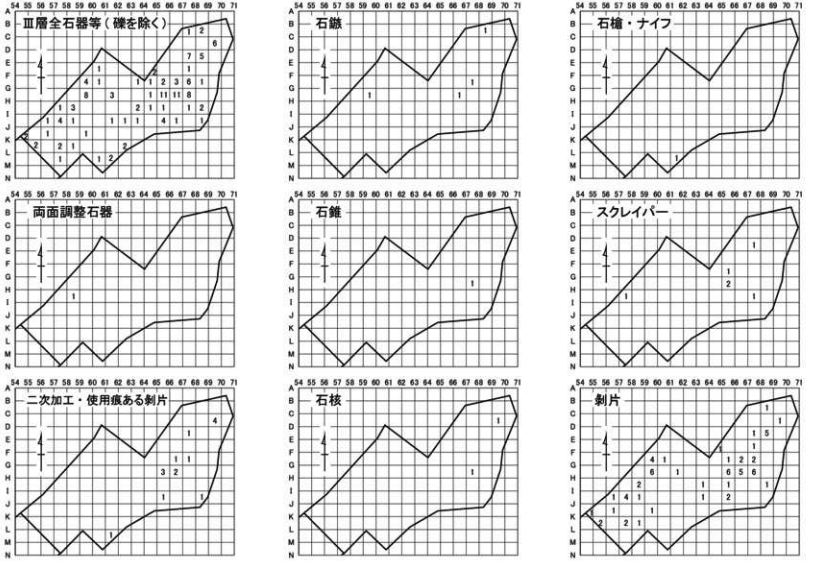


図Ⅴ－５　Ⅲ層出土の石器（２）・鉄製品

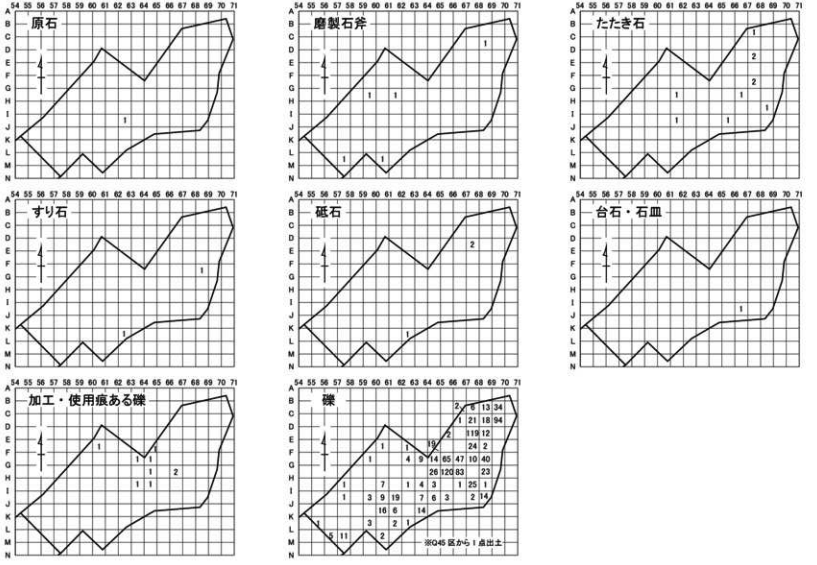




図Ⅴ－6　包含層石器等点数分布図



図Ⅴ－７　Ⅲ層出土石器点数分布図（１）



図Ⅴ－８　Ⅲ層出土石器点数分布図（２）

たたき石である。石材は19～22は砂岩、23は安山岩である。19・20は表面の平坦な部分にたたき痕がみられるものである。19のたたき痕は浅く、まとまりが4か所みられる。20は円礫素材で、たたき痕の範囲が広く、深い凹凸がある。21～23は礫の端部や側面にたたき痕がみられるものである。21は下端部と右側面上部等に浅く細かいたたき痕がみられる。22は上下端部にたたき痕があり、下端部のたたき痕はほぼ平坦である。23は下端にたたき痕がみられ、たたき痕は緩やかな曲面をなしている。24はすり石で、石材は砂岩である。やや扁平な礫の平坦面に広いすり面がある。また、下端部にはたたき痕がみられ、たたき石と複合している。25は砥石で、石材は片岩である。直方体状の形状で、下面を除く5面が砥面として利用されている。砥面は全体的に平滑である。

（3）鉄製品

・包含層出土の鉄製品（図Ⅴ－5－26）

今回の調査で、G65区のⅢ層から鉄製品として鍋の口縁部片が1点出土した。鉄製品はこの1点のみで、遺構や他の発掘区からは出土していない。アイヌ文化期のものと考えられるが、今回の調査で他にアイヌ文化期の遺構、遺物を検出していないため、詳細な時期等は不明である。なお、この鉄製品の保存処理は（公財）岩手県文化振興事業団に委託して行った。26は鉄鍋の口縁部破片である。厚みは0.4～0.6cmで、口縁部上端が最も厚く、口縁部にかけて直線的に広がる形状である。

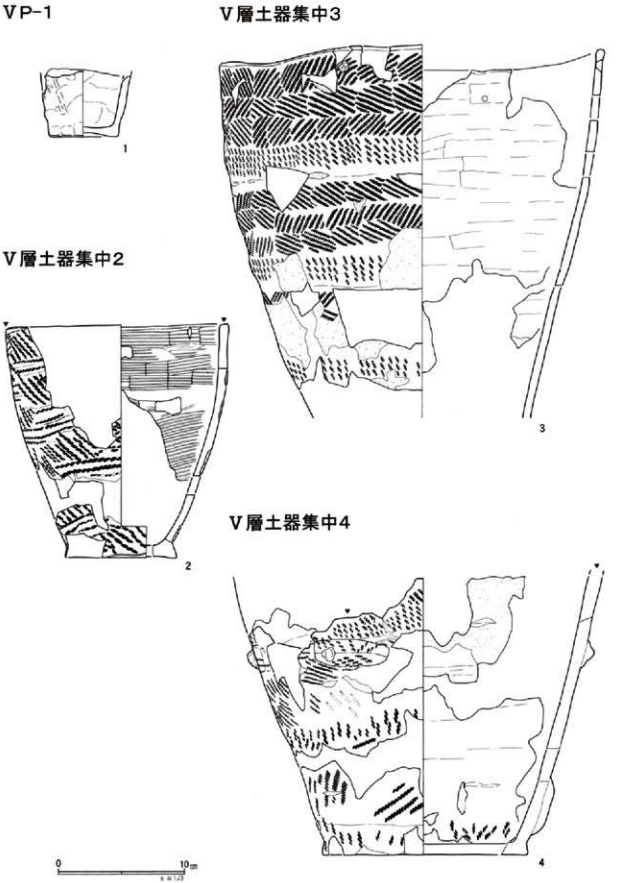
3　Ⅴ層の遺物

（1）土　器

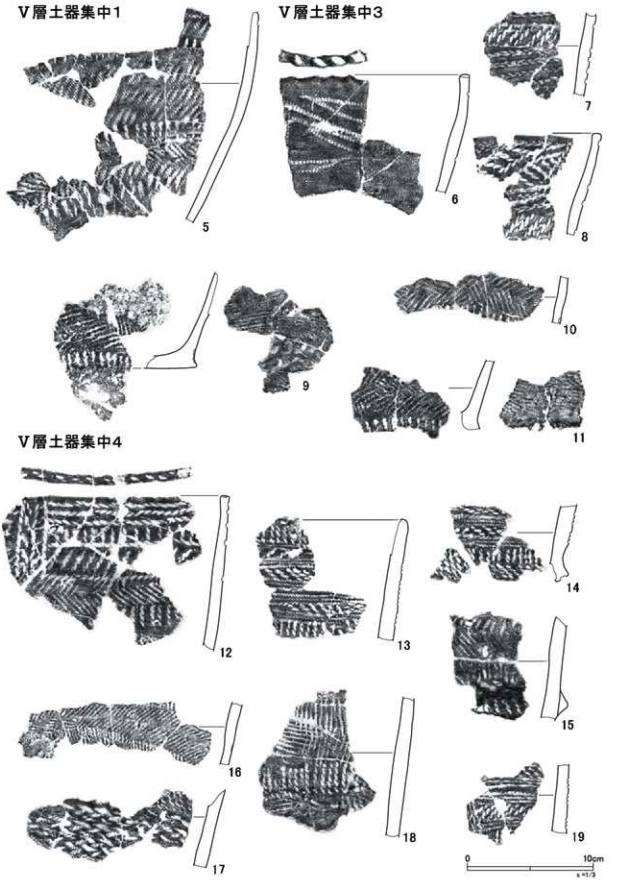
・遺構出土の土器（図Ⅴ－9・10）

Ⅴ層の遺構から出土した土器の点数は976点で、出土した遺構はⅤP－1、土器集中1～4、礫集中1である。その内土器集中1～4からが940点（96％）と多く、土器集中3・4では複数の個体が出土した。また、ⅤP－1の床面から土器が1個体（図Ⅴ－9－1）出土している。土器の時期は全て縄文時代早期後半（Ⅰ群b類）で、型式は東釧路Ⅱ式、同Ⅲ式である。

1～4は復元土器、5～19は破片土器で器種は全て深鉢である。1はⅤP－1床面出土の小型土器で、口縁部を欠くものである。全体的に製作時の成形痕や指頭圧痕が残り、底部は上げ底である。文様はごく一部にR撚糸文が施され、内外面はナデで調整される。東釧路Ⅱ式ないしⅢ式と考えられるが、特徴が乏しいため判然としない。5は土器集中1出土の東釧路Ⅲ式土器で、H63区出土のものと接合している。部位は胴部で、文様は横位の組紐圧痕文、一部羽状となるＬＲ・ＲＬ斜行縄文、短縄文が施される。2は土器集中2出土の東釧路Ⅱ式土器で、O53区Ⅴ層出土のものと接合している。底部外側がやや張り出し、口縁部にかけて胴部がやや膨らみながら広がる器形である。文様は、口縁部～胴部の外面に横位の条痕文が施された後、斜位と横位のR撚糸文が交互に施される。内面には横位～斜位の条痕文がみられる。3・6～11は土器集中3出土の東釧路Ⅱ～Ⅲ式土器である。3は東釧路Ⅲ式の復元土器で、周辺の発掘区出土のものと接合した。部位は口縁部～胴部で、胴部下位は全体的に器面が剥離している。文様は外面にＲＬ・ＬＲ縄文が羽状に施され、その下位には短縄文がみられる。内面は横位のナデが施される。また、口縁部に補修孔が2か所みられる。6～11は破片土器で6・8は口縁部、7・10は胴部である。土器型式は6・9～11が東釧路Ⅱ式、7・8が東釧路Ⅲ式である。6は口唇部に連続する押圧が加えられ、口縁部は小波状を呈する。外面には縦位、横位、斜位の縄線文による文様が施される。7・8は同一個体で横位～斜位の縄線文、組紐圧痕文、短縄文



図Ⅴ－9　Ⅴ層遺構出土の土器（1）



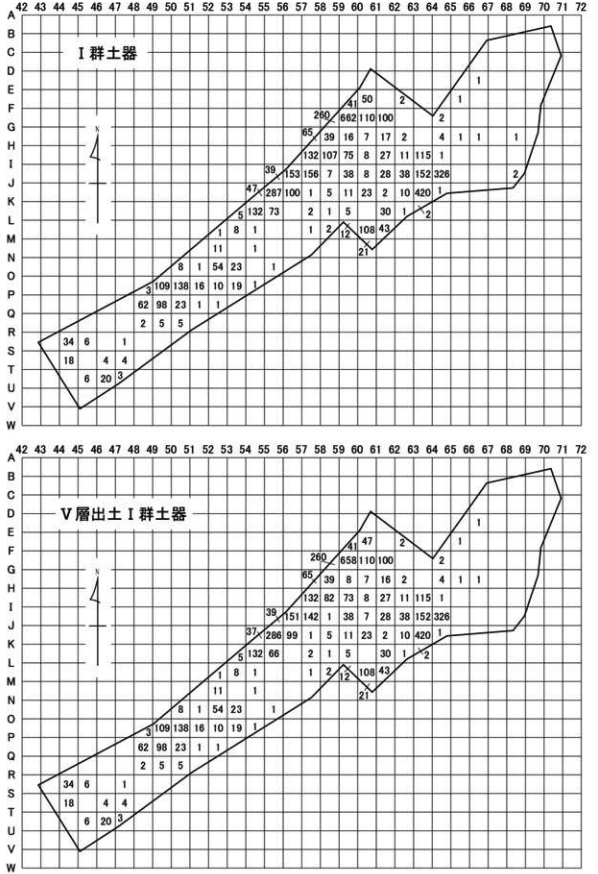
図Ⅴ－10　Ⅴ層遺構出土の土器（2）

による文様が施される。10はＬＲ・ＲＬの羽状縄文が施され、下端には横位の刺突列が加えられる。9・11は底部で同一個体である。底部外側がやや張り出す器形で、張り出す部分には短縄文が施される。また、外面にはＲＬ・ＬＲ縄文が一部羽状に施される。内面には条痕文が施される。4・12～19は土器集中４出土の東釧路Ⅲ式土器だが、16は東釧路Ⅱ式の可能性もある。４は復元土器で、土器集中４とE59区等出土のものが接合した。部位は胴部～底部で、底部のほとんどを欠失する。底部外側はやや張り出し、胴部にかけて直線的に広がる器形である。外面の文様は横走、斜行するＲＬ・ＬＲ縄文と短縄文が施される。また、短縄文は貼付文上にもみられる。内面には底部付近に短縄文が施される。また、胴部に横位、底部付近に縦位の貼付文がみられ、貼付文上にも短縄文等が施される。全体的に破片は細かく、二次焼成により部分的に褐色の色調を呈する。12～19は破片土器である。12・13は口縁部で、12は口唇部に縄の押圧による文様が、口縁部には横位、縦位の縄線文や短縄文、ＬＲ・ＲＬ斜行縄文による文様が施される。13は横位の縄線文と短縄文を交互に施文している。14～19は胴部で、文様は縄文、縄線文、短縄文が施される。14・15は横位の貼付文が部分的にみられるもので、貼付文上には短縄文等縄の押圧が施される。貼付文の断面形は三角形に近い。16はＬＲ斜行、横走縄文と短縄文が施されるもので東釧路Ⅱ式の可能性がある。17は綾絡文が施される。18はＲＬ縄文が横走、縦走して施される。19の文様は、横位の縄線文と斜位の短縄文が交互に施されている。

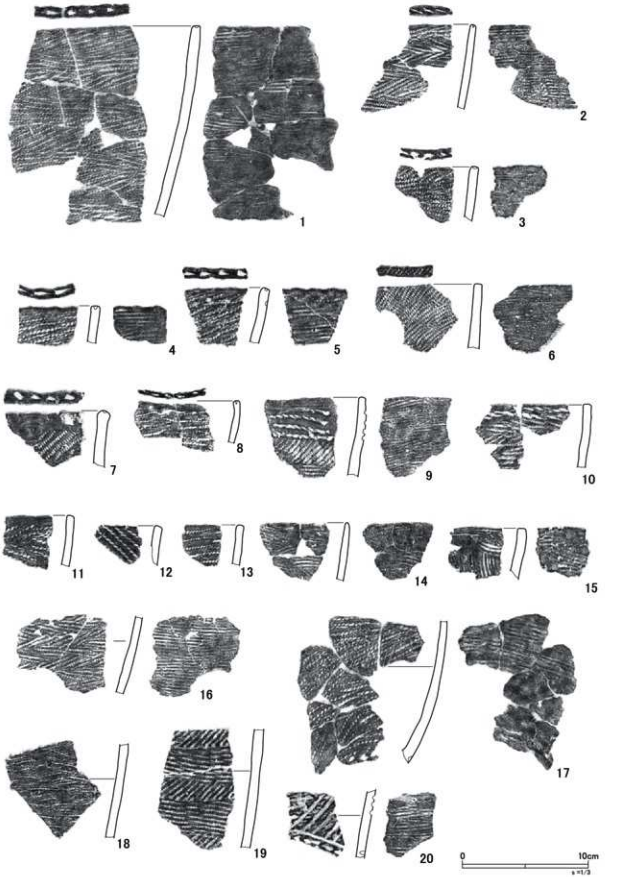
・包含層出土の土器（図Ⅴ－12・13）

Ⅴ層から土器は4,760点出土した。土器の時期は、遺構出土土器と同様に縄文時代早期後半（Ⅰ群ｂ類）で、型式名では東釧路Ⅱ式、同Ⅲ式である。一部を除き土器の細分類は行っていないが、全体的な出土量は東釧路Ⅱ式がやや多いと考えられる。土器は全体的に小破片が多く、復元土器はない。Ⅴ層の上位のⅣ層は、約7,600年前に降下したと考えられる摩周テフラ（Ma-f～j）であり、Ⅴ層出土の東釧路Ⅱ式、同Ⅲ式は摩周テフラより古い時期といえる。土器の分布は調査範囲ほぼ全体に広がるが、中でも48～54ラインと53～65ラインの２か所から多く出土している。特に、54～60ラインの調査区北西際から多く出土しているため、土器の分布範囲は調査区外の北西側に広がる可能性が高い。また、東釧路Ⅱ式土器は調査区ほぼ全体から出土しているが、東釧路Ⅲ式土器は概ね54～65ラインの間からのみ出土し、分布傾向に違いがある。

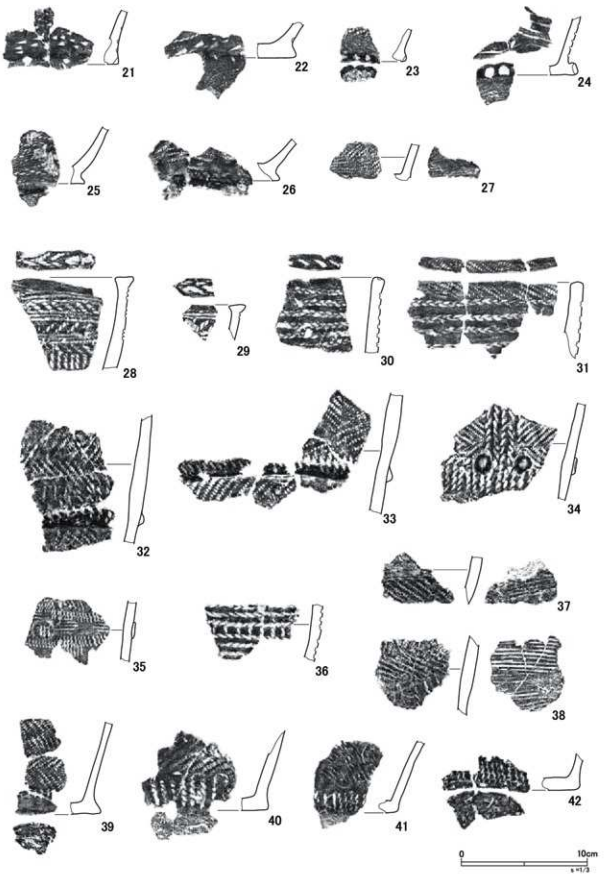
1～27は東釧路Ⅱ式土器である。1～15は口縁部で、1～8は口唇部に文様が施されるものである。1・3～5・7は斜めからの刺突文、2・8は刻み、6はＬＲ縄文が施される。1～6は内面に横位の条痕文が施され、外面の文様は横走～斜行する縄文が施されるものが多い。1はＲ撚糸文、2は横走～斜行するＬＲ縄文が施される。2は16の胴部と同一個体で、内面に炭化物が付着している。3は内面上部に浅い条痕文がみられる。4は口縁部が小波状を呈する。5は外面上位に斜めからの刺突文が施される。6・7はＬＲ斜行縄文が施される。8は横走するＬＲ縄文が施される。9・10は横位の縄線文が外面の上位に施されるものである。9は縄線文の下位にＬＲの斜行、横走する縄文が施される。内面には横位の条痕文みられる。10は縄線文の下位に横走するＬＲ縄文が施され、内面には炭化物が付着している。11～13はＲ撚糸文が施される。14・15は内外面に条痕文が施される。16～20は胴部で、16・17・20は内面に横位の条痕文が施される。16は２と同一個体である。17は地文にＲ撚糸文が施され、下端には刺突文がみられる。18は内面にごく浅い条痕文が施される。19はＬＲ斜行縄文と横走縄文が交互に施される。20は太い沈線と刺突文による文様がみられる。21～27は底部で、器形は27を除いて、底部外側が張り出す形状で、胴部にかけて広がるものが多い。21～24は底部の張り出し部に刺突文や刻みが加えられるものである。21・22はＲ撚糸文が施され、底部付近には斜めからの刺突文が加えられる。21は底部の張り出し部に刻みが施され、22は底面には縄線文がみられる。



図Ⅴ－11　Ⅴ層出土土器点数分布図



図Ⅴ－12　Ⅴ層出土の土器（1）



図Ⅴ－13　Ⅴ層出土の土器（2）

23はＬＲ斜行縄文が施され、底部張り出し部には刻みが加えられる。24は沈線による文様がみられ、底部張り出し部には押圧が加えられる。25・27はＲ撚糸文、26はＬＲ横走縄文が施される。

28～42は東釧路Ⅲ式土器で、28～31は口縁部である。28・29は口唇部が肥厚する形状で、口唇部には短縄文が施される。口縁部外面には横位の縄線文と短縄文が交互に施される。30・31は横位の組紐圧痕文が施される。口唇部は、30には短い沈線文が、31にはＲＬ縄文が加えられる。31は口縁部にＲＬ斜行縄文と横位の組紐圧痕文が施される。32～38は胴部で、32～35は貼付文が施される。32・33は横位の貼付文が施され、他にＬＲ・ＲＬ羽状縄文と短縄文がみられる。34・35は円形の貼付文が施され、34は縦位の縄線文、短縄文がみられる。35はＬＲの縦走、ＲＬ横走、斜行縄文と短縄文が施される。短縄文は貼付文上にも施される。36は横位の縄線文と短縄文が施される。37・38は内面に条痕文が施される。外面には37はＲＬ斜行縄文、38はＬＲ・ＲＬ羽状縄文と短縄文が施される。39～42は底部である。39は底部外側が張り出す器形で、ＲＬ・ＬＲ斜行縄文が一部羽状に施される。40・41はＲＬ斜行縄文と短縄文が施される。42は胴部にかけて垂直に近い角度で立ち上がり、下部には短縄文が施される。

（2）石器等

・遺構出土の石器等（図Ⅴ－14）

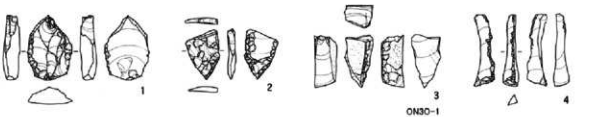
Ⅴ層の遺構から出土した石器等の点数は剝片石器36点、礫石器７点、礫1,654点の合計1,697点で、礫集中出土の礫を除くと全体的に出土点数が少ない。石器等を出土した遺構は、ＶＦ－１～４、土器集中３・４、礫集中１～４である。ＶＦ－１～４からは、石刃鏃石器群に伴う彫器及び削片が出土している。剝片石器はＶＦ－１～４から彫器４点、削片１点、石錐１点、二次加工・使用痕ある剝片が６点、剝片が12点出土した。土器集中３・４からは二次加工・使用痕ある剝片が１点、剝片が11点出土した。礫石器は、土器集中３から砥石３点と加工・使用痕ある礫１点が、礫集中１からたたき石１点、すり石２点出土した。礫は、最も多い礫集中１では1,502点出土している。

１～４はＶＦ－１から出土した剝片石器で、石材は全て黒曜石である。１～３は彫器で、１・２は交叉刃型、３は側刃型である。１は石刃素材と考えられ、右側縁上部で幅の広い削片剝離が行われる。次に、左側縁上部で削片剝離が３回行われる。２は彫刀面と器体長軸のなす角度が直角に近い。３は表面と右側面に礫面を残す。右側面には細かい平坦剝離が施され、彫刀面は折れ面を打面として左側縁に作出される。黒曜石の原産地分析では、所山と判定された。４は削片で、彫器の彫刀面作出時の剝離によるものである。細かい周縁加工が行われた素材の右側縁で削片剝離が行われている。５・６はＶＦ－３出土の剝片石器である。石材はともに黒曜石で、原産地分析では、５は白滝、６が所山？と判定された。５は石錐で、石材は茶色混じりの黒曜石である。素材の縦長剝片の左側縁に削片剝離が行われ、次に打点側に細かい二次加工を施し、錐部が作り出されている。６は彫器で、上面と左右側面で削片剝離が施され、彫刀面が作出されている。裏面には平坦な礫面を残している。７・８は礫集中１出土の礫石器である。７はたたき石で、石材は安山岩である。楕円体状の円礫の比較的平坦な表裏面にたたき痕がみられる。表面上部及び裏面のたたき痕は中央がやや深くくぼむ形状である。８はすり石で、やや扁平な円礫の平坦面にすり面がみられる。裏面のすり面の下位には浅い擦痕がみられる。

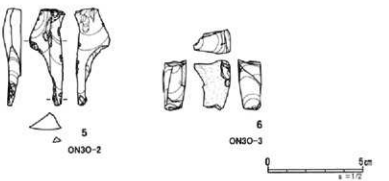
・包含層出土の石器等（図Ⅴ－19～21）

Ⅴ層から石器等は2,556点出土した。器種ごとの点数では礫が1,505点（59％）、剝片が739点（29％）で全体の88％を占める。剝片石器は937点で、定型的な石器は石鏃22点、石槍・ナイフ３点、両面調

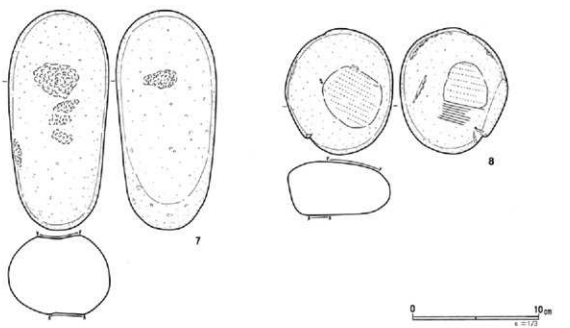
VF-1



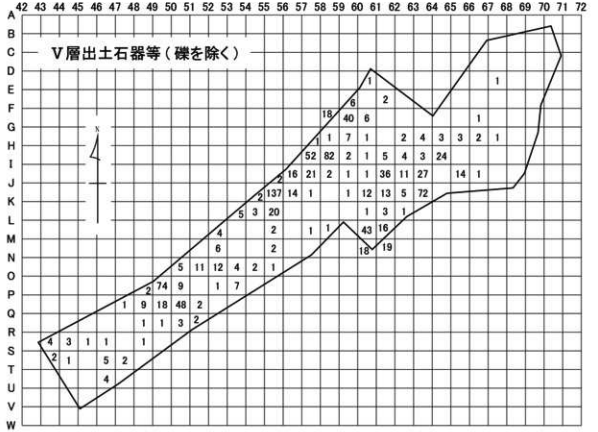
VF-3

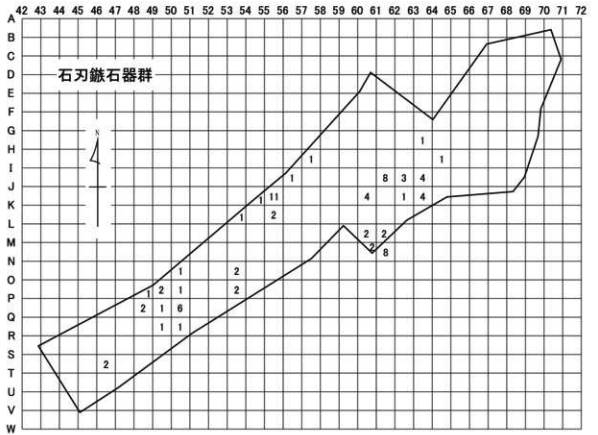


V層礫集中1

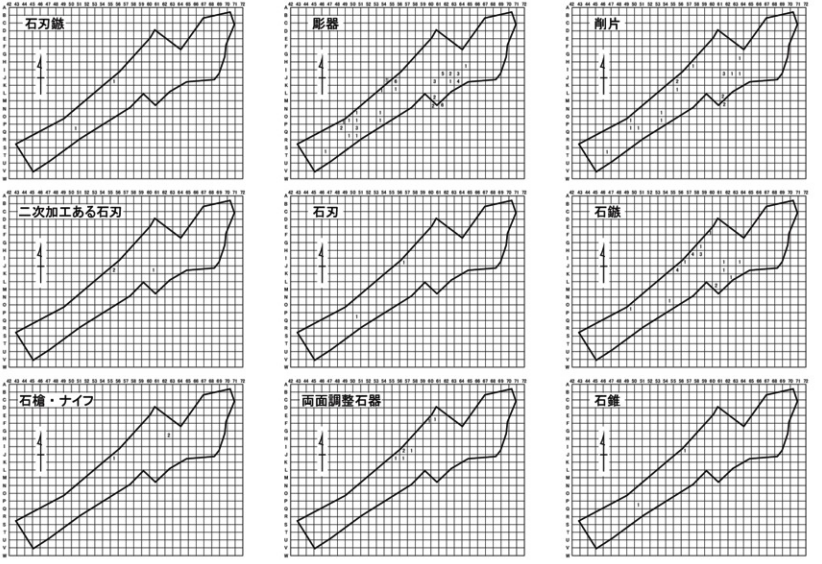


図V－14　V層遺構出土の石器

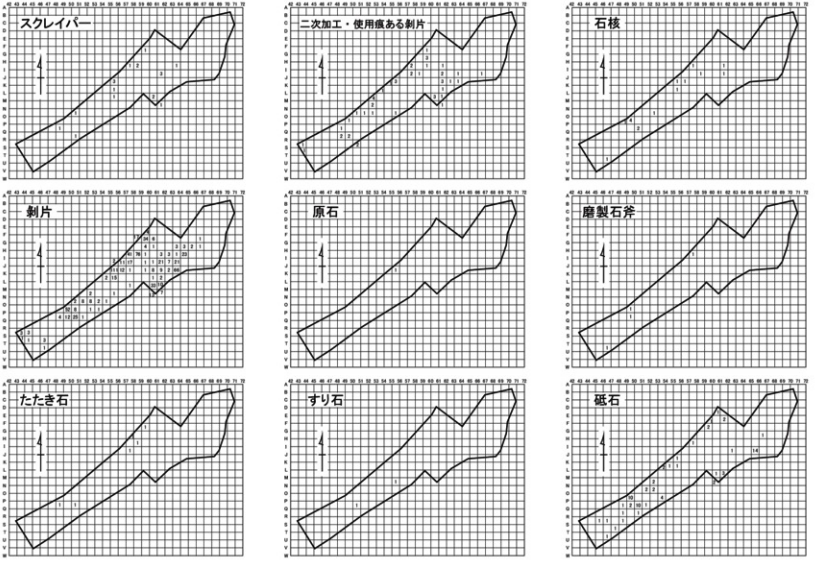




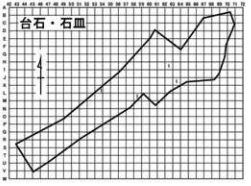
図Ⅴ－15　Ⅴ層出土石器点数分布図（1）

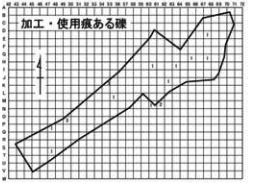


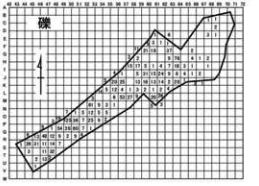
図Ⅴ－16　Ⅴ層出土石器点数分布図（２）



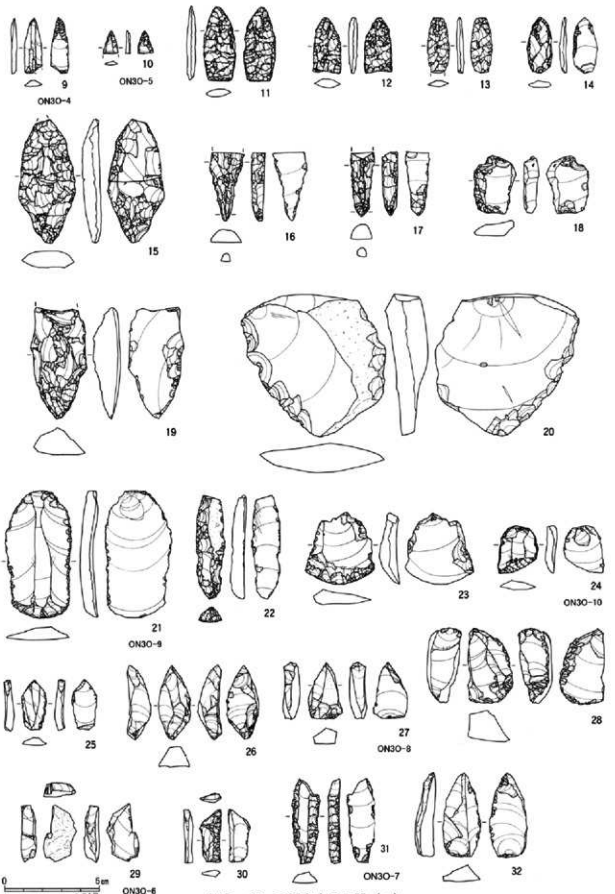
図Ⅴ－17　Ⅴ層出土石器点数分布図（3）







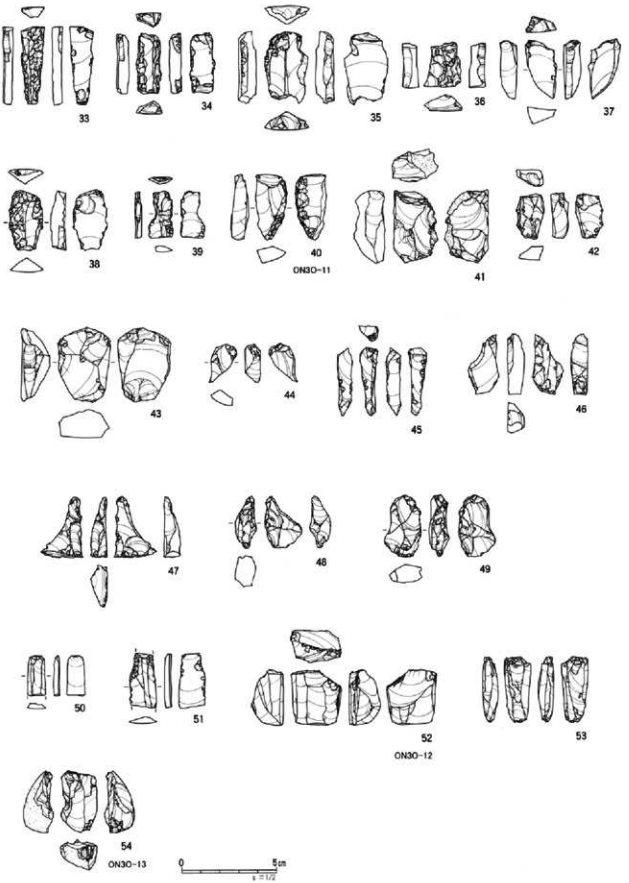
図Ⅴ－18　Ⅴ層出土石器点数分布図（4）



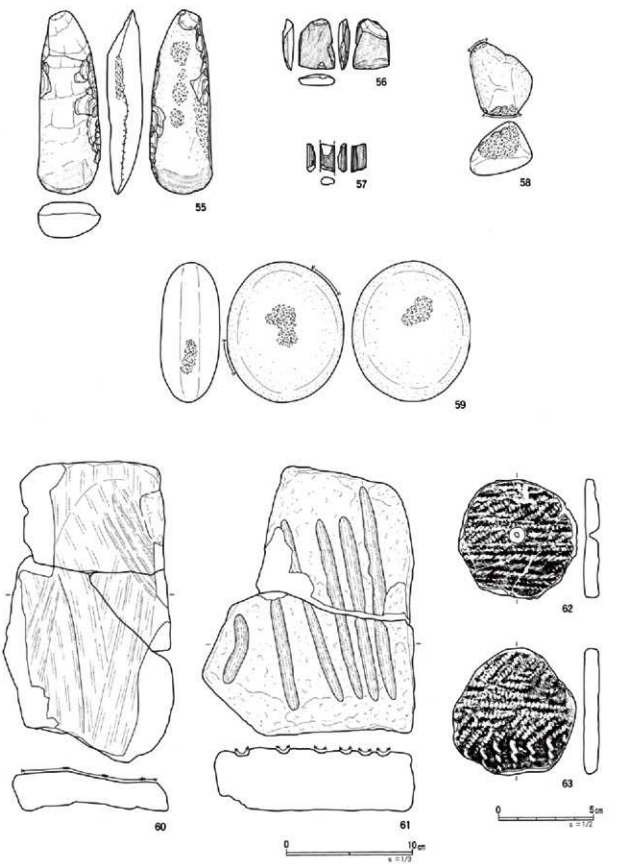
図Ⅴ－19　Ⅴ層出土の石器（1）

整石器７点、石錐２点、スクレイパー19点等がある。他に石刃鏃石器群として、石刃鏃２点、彫器51点、削片20点、二次加工ある石刃３点、石刃２点がある。礫石器は107点で、磨製石斧４点、たたき石６点、すり石２点、砥石75点、台石・石皿４点、加工・使用痕ある礫16点である。礫を除いた石器等の分布は、調査範囲全体に広がり、48 ～ 53ラインの間と55 ～ 66ラインの間の２か所にややまとまりがみられる。

９・10は石刃鏃である。石材は黒曜石で、原産地分析では共に所山と判定された。どちらも素材の石刃の打点側を先端部、末端側を基部にしている。９は基部をわずかに欠失する。二次加工は表裏面の基部と、裏面の先端側に施される。10は基部側を大きく欠失する。背面にわずかに礫面を残し、表裏面の側縁に細かい二次加工が施される。11 ～ 14は石鏃で、石材は黒曜石である。全て無茎のもので、11は基部が平らで、12は浅く内湾する形状である。13・14は柳葉ないし木葉形のものである。13は先端部と基部を欠失する。14は表面周縁部と裏面の両側縁にのみ二次加工が施される。15は石槍・ナイフで石材は黒曜石である。２点が接合したもので、先端部をわずかに欠失する。16・17は石錐で、石材は黒曜石である。共に上部を欠失する。細長い形状で、表面は周縁部から急角度な二次加工が連続的に施される。17は裏面の先端部側に平坦な二次加工が施される。18 ～ 24はスクレイパーである。石材は20が頁岩、それ以外は全て黒曜石である。21・24は原産地分析を行い、21は所山、24は白滝と判定されている。18 ～ 20は側縁に刃部が作出されるものである。18は主に表面左側縁に二次加工が施される。また右側面で削片剝離が行われているため彫器の可能性もある。19は主に表面下半部に急角度の二次加工が施され、下端部は尖る形状である。20は礫面が残る分厚い剝片を素材とし、表面両側縁と裏面右側縁に粗い二次加工が施される。21 ～ 24は素材の下端側に刃部が作り出されるいわゆる掻器である。21は幅の広い石刃を素材とするもので、石刃は打面調整が施されている。刃部は石刃の末端側に連続する二次加工により作り出される。また、両側縁にも細かい加工が施されている。22は細長い縦長剝片もしくは石刃を素材とし、礫面が残る表面右側縁上部以外には連続的な二次加工が施される。素材の打点側に細かい二次加工により急角度の刃部が作り出される。23は素材の下端側に幅の広い刃部が作出される。24は石刃素材で表面両側縁には細かな、末端側は連続的な二次加工により右肩上がりの刃部が作出される。25 ～ 44は彫器である。石材は全て黒曜石で、原産地分析の結果、27・29は所山？、31は所山、40は白滝？と判定された。25・27・29は交叉刃型のものである。25は石刃素材で素材の打点側に彫刃面を作出している。27は表面に礫面がみられるもので、素材の末端側に幅のある彫刃面が作出される。29は表面がほぼ礫面で、左側面の彫刃面は器体の長軸にほぼ並行する。26・28・30 ～ 32は斜刃型のものである。26は厚みのある剝片を素材とするもので、上部は斜刃型、下部は交叉刃型の彫刃面がみられる。また、裏面にも一部二次加工が施される。28は分厚い剝片を素材とし、素材の打点側に幅の広い彫刃面が作出される。右側面の彫刃面は複数の剝離からなる。30・31は表面両側縁に細かい二次加工が施される。30は下部をわずかに欠失する。31は石刃素材である。32は厚みのある縦長剝片を素材とし、彫刃面は腹面側に傾く。33 ～ 44は側刃型のもので、33 ～ 37・43は両側面に彫刃面が作出される。33 ～ 35は石刃素材で、33は表面に細かい二次加工が施される。34 ～ 36の右側面の削片剝離は上下から行われている。37は左側面の削片剝離が内反し、削片に器体が大きく取り込まれている。また、上面にも彫刃面がみられる。43は右側面の彫刃面が腹面側に大きく傾いている。38 ～ 42・44は一側面に彫刃面が作出されるものである。38・39は石刃素材で、38は上面にも彫刀面がみられる。39は上面に細かい打面調整を行った後に削片が剝離される。40は折れ面を打面とし、表面右側縁と裏面左側縁に細かい二次加工が施される。41は両面に粗い二次加工が施され、左側面に幅の広い彫刀面が作出される。右側面には礫面が残る。42は右側面で３回以上の削片剝離が行われている。44は彫刀面作出時に削片側に器体が大きく取り込まれている。48と剝離面接合す



図Ⅴ－20　Ⅴ層出土の石器（2）



図Ⅴ－21　Ⅴ層出土の石器（3）・土製品

るもので、接合状況を49に示している。45～48は削片である。45は側刃型の彫器の削片で、先行する削片剥離が3回以上行われている。46～48は彫器の器体を大きく取り込むものである。46の削片剥離が行われた彫器は側刃型で、石刃を素材とし、両側面で削片剥離が行われている。47は47の剥離に先行して上下から3回以上の削片剥離が行われている。48は44の彫器と剥離面接合するもので、49がその接合状況である。49の彫器の右側面で上下から削片剥離が行われ、最後に48の削片剥離が行われている。50は石刃である。黒曜石を素材とし、小型で下部を欠失する。打面は細かい二次加工が施され、頭部調整もみられる。51は二次加工ある石刃である。黒曜石製で打面儡と末端儡を欠失する。両側縁の上半部に細かい平坦剥離が連続的に施される。52～54は石核で、石材は黒曜石である。原産地分析の結果、52は所山、54は上士幌？と判定された。52・53は石刃核である。52は横断面が四角形状で、上面を打面とし、下面以外の4面を作業面として石刃を剥離している。石刃剥離後大きな剥離が施され、最終的に廃棄されている。53は上下面を打面とし、正面、裏面、両側面を作業面として石刃が剥離され、剥離され尽くした後廃棄されている。54は礫面を打面とし、正面を主な作業面として縦長剥片が剥離されている。

55～57は磨製石斧である。石材は55が砂岩、56が蛇紋岩、57が泥岩である。55は完形で主に両側縁に剥離、敲打が施される。刃部は両面共に丁寧な研磨が施される。56は長さが4cmで、刃部を含め全面に丁寧な研磨が施される。右側面には擦り切り痕がみられる。57は幅が1cmと小型で、上下を欠失する。裏面には擦り切り痕がみられる。58・59はたたき石である。58は上下面に平坦なたたき痕がみられる。石材はチャートである。59は表裏の平坦面と側面にたたき痕がみられる。たたき痕は浅く、小範囲である。石材は砂岩である。60・61は砥石で、石材は共に砂岩である。60は周囲及び裏面を欠失するもので、砥面の幅は広く、複数の稜があり、一部溝状のものもみられる。61はⅤ層土器集中4の周辺から出土したものである。砥面が溝状のものでいわゆる有溝砥石である。溝は深く、平面形は直線状であるが、一部湾曲するものもある。

62・63は円盤状土製品である。共に東釧路Ⅲ式土器の胴部片を素材とし、側面は部分的に擦られている。62は平面がほぼ円形で中央付近に孔がみられる。63は平面が不整の円形である。

4　微細遺物

焼土等の調査において、細かい炭化物や微細な剥片・砕片、骨片等が検出された場合、これらの微細遺物は土壌ごとビニール袋（36×50cm）に入れ、1㎜メッシュのフルイを使用して水洗選別を行い回収した。土壌ごと取り上げたのは、Ⅲ層の遺構では、土坑2基（ⅢＰ－1・7）、焼土1か所（ⅢＦ－1）、礫集中1か所（Ⅲ層礫集中3）、Ⅴ層の遺構では、焼土4か所（ⅤＦ－1～4）である。他に、Ⅴ層ではJ56区において少量の剥片・砕片が出土したため、遺構名は付さずに土壌ごと取り上げ水洗選別を行った（整理№22）。また、Ⅴ層の土坑1基（ⅤＰ－1）からは水洗選別ではなく、放射性炭素年代測定用のサンプルとして土壌を採取し、分析を行った（試料名ＯＮ3－1）。

全体でビニール袋20袋分の水洗選別を行い、その結果、土器がⅠ群等19点（8.68ｇ）、剥片・砕片が637点（17.83ｇ）、炭化物2.30ｇ、骨片23.64ｇを検出した。ＶＦ－1・3の土壌から検出した炭化物については、放射性炭素年代測定の試料として分析を行った（試料名ＯＮ3－2、ＯＮ3－3）。分析結果についてはⅥ章2節に掲載している。

（広田）

表Ⅴ－1　全遺物集計

種別	分類	遺構	包含層	合計
土器	Ⅰ群	978	4,938	5,916
	Ⅲ～Ⅴ群		91	91
	Ⅵ群	1	39	40
	Ⅶ群		87	87
	Ⅷ群	6	206	212
	不明		2	2
土器合計		985	5,363	6,348
石器等	石刃鏃		2	2
	削器	4	53	57
	剥片	1	20	21
	二次加工ある石刃		3	3
	石刃		2	2
	石鏃		26	26
	石槍・ナイフ		4	4
	両面調整石器		8	8
	石錐	1	3	4
	スクレイパー		25	25
	二次加工・使用痕のある剥片	8	68	76
	石核		18	18
	剥片	26	832	858
	原石		2	2
	磨製石斧		10	10
	たたき石	2	16	18
	すり石	3	4	7
	砥石	3	78	81
	台石・石皿		5	5
	加工・使用痕のある礫	1	25	26
	礫	1,855	2,493	4,348
	土製品		7	7
石器等合計		1,904	3,704	5,608
鉄製品	鍋		1	
総計		2,889	9,068	11,957

表Ⅴ－2　遺構出土土器集計

		層位	Ⅲ層								Ⅴ層													全遺構合計
		遺構名	ⅢP-4			ⅢP-5	礫集中3	礫集中4	礫集中5	遺構合計	VP-1	VF-4	土器集中1	土器集中2	土器集中3	土器集中4	礫集中1					遺構合計	
分類	部位	出土層位 / 残存状態	覆土	覆土1	合計	覆土4	Ⅲ層	Ⅲ層	Ⅲ層		床面	Ⅴ層	Ⅴ層	Ⅴ層	Ⅴ層	Ⅴ層	Ⅴ層	P-1覆土	P-1覆土1	P-1合計	合計		
Ⅰ群	口縁部	良好												5	21	8	1				1	35	35
		剥離													2	3						5	5
		小破片													1							1	1
		合計												5	24	11	1				1	41	41
	胴部	良好				2				2			51	30	122	203	4				4	410	412
		剥離												19	9	86	1				1	115	115
		磨耗										1				30						31	31
		小破片												15	20	283		5	11	16	16	334	334
		合計				2				2		1	51	64	151	602	5	5	11	16	21	890	892
	底部	良好												4	5	7						16	16
		剥離												2	2	8						12	12
		小破片												3		1						4	4
		合計												9	7	16						32	32
	胴～底部	良好									13											13	13
	Ⅰ群合計					2				2	13	1	51	78	182	629	6	5	11	16	22	976	978
Ⅵ群	胴部	良好						1		1													1
	Ⅵ群合計							1		1													1
Ⅷ群	口縁部	良好					1		2	3													3
	胴部	良好		1	1			1		2													2
		小破片	1		1					1													1
		合計	1	1	2			1		3													3
	Ⅷ群合計		1	1	2		1	1	2	6													5
全土器	総計		1	1	2	2	1	2	2	9	13	1	51	78	182	629	6	5	11	16	22	976	985

表Ⅴ－3　遺構出土石器等集計

		層位	Ⅲ層													
		遺構名	ⅢP-1	ⅢP-3			ⅢP-4			ⅢP-8	礫集中1	礫集中2	礫集中3	礫集中4	礫集中5	Ⅲ層合計
分類	器種	出土層位 / 残存状態	覆土	覆土	覆土1	合計	覆土	覆土2	合計	覆土	覆土	Ⅲ層	覆土	覆土	覆土	
石刃鏃石器群	削器	完形														
	剥片	完形														
剥片石器	石錐	完形														
	二次加工・使用痕のある剥片	合計					1		1							1
	剥片	合計									1				2	3
礫石器	たたき石	完形													1	1
	すり石	完形													1	1
		半形														
		合計													1	1
	砥石	片														
	加工・使用痕のある礫	合計														
その他	礫	完形			1	1				31	1	3			1	37
		片	2	3	2	5	1	1	2	7	40	2	51	20	35	164
		合計	2	3	3	6	1	1	2	38	41	5	51	20	36	201
石器等　総計			2	3	3	6	2	1	3	38	42	5	51	20	40	207

		層位	Ⅴ層																			遺構合計
		遺構名	VF-1			VF-2	VF-3	VF-4			土器集中3	土器集中4	礫集中1					礫集中2	礫集中3	礫集中4	Ⅴ層合計	
分類	器種	出土層位 / 残存状態	Ⅴ層	焼土	合計	焼土	Ⅴ層	Ⅴ層	焼土	合計	Ⅴ層	Ⅴ層	Ⅴ層	P-1覆土	P-1覆土1	P-1合計	合計	Ⅴ層	Ⅴ層	Ⅴ層		
石刃鏃石器群	削器	完形	3		3		1														4	4
	剥片	完形		1	1																1	1
剥片石器	石錐	完形					1														1	1
	二次加工・使用痕のある剥片	合計	2	1	3	1	2					1									7	8
	剥片	合計	1		1	1	7	2	1	3	2	9									23	26
礫石器	たたき石	完形											1				1				1	2
	すり石	完形											1				1				1	2
		半形											1				1				1	1
		合計											2				2				2	3
	砥石	片									3										3	3
	加工・使用痕のある礫	合計									1										1	1
その他	礫	完形									1	2	138				138			5	146	183
		片									4	6	1355		6	6	1361	9	105	23	1508	1672
		合計									5	8	1493		6	6	1499	9	105	28	1654	1855
石器等　総計			6	2	8	2	11	2	1	3	11	18	1496		6	6	1502	9	105	28	1697	1904

表Ⅴ－4　包含層出土土器集計

分類	部位	残存状態	層位			包含層合計
			Ⅰ層他	Ⅱ層	Ⅴ層	
Ⅰ群	口縁部	良好	2	2	132	136
		剥離		1	29	30
		磨耗			2	2
		小破片	1		21	22
		合計	3	3	184	190
	胴部	良好	29	34	1,600	1,663
		剥離	16	15	850	881
		磨耗	1	1	56	58
		小破片	35	30	1,985	2,050
		合計	81	80	4,491	4,652
	底部	良好	3	1	57	61
		剥離	3	2	13	18
		小破片		2	15	17
		合計	6	5	85	96
	Ⅰ群合計		90	88	4,760	4,938
Ⅱ～Ⅳ群	胴部	良好		2		2
		剥離		14		14
		小破片		74		74
		合計		90		90
	底部	剥離		1		1
	Ⅱ～Ⅳ群合計			91		91
Ⅵ群	胴部	良好	1	28		29
		小破片		4		4
		合計	1	32		33
	底部	良好		6		6
	Ⅵ群合計		1	38		39
Ⅶ群	口縁部	良好		12		12
		小破片		2		2
		合計		14		14
	胴部	良好	1	51		52
		剥離		1		1
		小破片		10		10
		合計	1	62		63
	底部	良好		10		10
	Ⅶ群合計		1	86		87
Ⅷ群	口縁部	良好		23		23
		小破片		1		1
		合計		24		24
	胴部	良好		125		125
		剥離		5		5
		小破片		38		38
		合計		168		168
	底部	良好		11		11
		剥離		1		1
		小破片		2		2
		合計		14		14
	Ⅷ群合計			206		206
不明	胴部	小破片		2		2
	不明合計			2		2
全土器	総計		92	511	4,760	5,363

表Ⅴ－5　包含層出土石器等集計

分類	器種	残存状態	層位				包含層合計
			Ⅰ層他	Ⅱ層	Ⅴ層	Ⅵ層	
石刃鏃石器群	石刃鏃	準定形			1		1
		片			1		1
		合計			2		2
	彫器	完形	1	1	39		41
		準定形			3		3
		半形			8		8
		片			1		1
		合計	1	1	51		53
	削片	完形			17		17
		準定形			2		2
		半形			1		1
		合計			20		20
	二次加工ある石刃	片			3		3
	石刃	半形			1		1
		片			1		1
		合計			2		2
剥片石器	石鏃	完形		2	4		6
		準定形		1	4		5
		半形		1	12		13
		片			2		2
		合計		4	22		26
	石錐・ナイフ	完形		1			1
		半形			3		3
		合計		1	3		4
	両面調整石器	完形			2		2
		半形		1	2		3
		片			3		3
		合計		1	7		8
	石錐	完形		1			1
		準定形			1		1
		半形			1		1
		合計		1	2		3
	スクレイパー	完形		4	9		13
		半形			3		3
		片		1	5		6
		準定形		1	2		3
		合計		6	19		25
	二次加工・使用痕ある剥片	合計	3	15	50		68
	石核	合計		2	16		18
	剥片	合計	24	69	739		832
	原石	合計		1	1		2
礫石器	磨製石斧	完形		3	3		6
		半形		1			1
		片		1	1	1	3
		合計		5	4	1	10
	たたき石	完形		8	5		13
		半形			1		1
		片		2			2
		合計		10	6		16
	すり石	完形		2			2
		準定形			1		1
		片			1		1
		合計		2	2		4
	凹石	完形		1	1		2
		片		2	74		76
		合計		3	75		78
	台石・石皿	片		1	4		5
		合計		1	4		5
	加工・使用痕ある礫	合計		9	16		25
その他	礫	完形	1	136	382	3	522
		片	1	842	1,123	3	1,969
		不明		2			2
		合計	2	980	1,505	6	2,493
	土製品	完形			7		7
		合計			7		7
石器等　総計			30	1,111	2,556	7	3,704

表Ⅴ－6　Ⅲ層掲載土器一覧

図	掲載番号	図版	出土地点	層位	遺物番号	破片点数	合計点数	破片部位	文様・調整等	器種	分類	備考
Ⅴ-1	1	10	礫集中3 G66区	Ⅲ層 Ⅲ層	— —	1 2	3	口縁～頸部	口唇部：突起、外面：直線・波状貼付文、内面：横ナデ、ミガキ	深鉢	Ⅷ群	
Ⅴ-1	2	10	礫集中4 G65区	Ⅲ層 Ⅲ層	14 —	1 1	2	胴部	RL横走・斜行縄文、内面：炭化物付着	深鉢	Ⅵ群	
Ⅴ-1	3	10	礫集中5	Ⅲ層	20	2	2	口縁部	外面：直線状貼付文、刻み・押圧、横ミガキ、内面：横ミガキ	深鉢	Ⅷ群	トビニタイ式
Ⅴ-1	4	10	H65区	Ⅲ層	—	1	1	胴部	外面：RL横走・斜行縄文、微隆起線文、内面：ナデ	深鉢	Ⅵ群	後北C_2D式
Ⅴ-1	5	10	F64区 G65区	Ⅲ層 Ⅲ層	— —	1 1	2	注口部	外面：RL縄文、微隆起線文	注口土器	Ⅵ群	注口部、後北C_2D式
Ⅴ-1	6	9	Q45区	Ⅲ層	—	12	12	胴～底部	外面：ナデ、底面：ナデ、内面：ナデ	深鉢	Ⅵ群	器高（7.8）cm、底径11.9cm
Ⅴ-1	7	10	F65区	Ⅲ層	—	1	1	口縁部	内外面：横位ミガキ	深鉢	Ⅶ群	
Ⅴ-1	8	10	F64区	Ⅲ層	—	1	1	口縁部	外面：斜位沈線（斜格子状）、横ミガキ、内面：横ミガキ	深鉢	Ⅶ群	
Ⅴ-1	9	10	D67区	Ⅲ層	—	1	1	頸～胴部	外面：横位・斜位・縦位沈線、内面：横ミガキ	深鉢	Ⅶ群	
Ⅴ-1	10	10	I68区	Ⅲ層	—	1	1	底部	外面：縦位ミガキ、底面：ミガキ、内面：ナデ	深鉢	Ⅶ群	やや上げ底
Ⅴ-1	11	10	G67区 I67区	Ⅲ層 Ⅲ層	— —	1 1	2	底部	外面：ナデ、ミガキ、底面：ナデ、ミガキ、内面：ナデ、ミガキ	深鉢	Ⅶ群	
Ⅴ-1	12	10	D67区	Ⅲ層	—	2	2	口縁部	外面：刻み、斜位沈線（綾杉状）、ナデ、内面：ミガキ	高坏	Ⅶ群	内面黒色
Ⅴ-1	13	10	D66区	Ⅲ層	—	1	1	口縁部	外面：斜位沈線（綾杉状）、横ミガキ、内面：横ミガキ	高坏	Ⅶ群	内面黒色
Ⅴ-1	14	10	G65区	Ⅲ層	—	1	1	口縁部	外面：斜位沈線（綾杉状）、横ナデ、ミガキ、内面：ミガキ	高坏	Ⅶ群	内面黒色
Ⅴ-1	15	10	C69区	Ⅲ層	—	1	1	体部	外面：斜位沈線（綾杉状）、内面：ミガキ	高坏	Ⅶ群	内面黒色
Ⅴ-1	16	10	E67区	Ⅲ層	—	1	1	体部	外面：斜位沈線（綾杉状）、ハケメ、内面：ミガキ	高坏	Ⅶ群	内面黒色
Ⅴ-1	17	10	G65区	Ⅲ層	—	3	3	体部	外面：斜位沈線（一部綾杉状）、内面：ミガキ	高坏	Ⅶ群	内面黒色
Ⅴ-1	18	10	G67区	Ⅲ層	—	1	1	体部	外面：斜位沈線（綾杉状）、ハケメ、内面：ミガキ	高坏	Ⅶ群	内面黒色
Ⅴ-1	19	10	I65区	Ⅲ層	—	1	1	台部	外面：横位段状の沈線、内面：横ナデ	高坏	Ⅶ群	
Ⅴ-1	20	10	D67区	Ⅲ層	—	1	1	台部	外面：貼付文、刻み、内面：ナデ	高坏	Ⅶ群	
Ⅴ-1	21	9	F65区 G66区	Ⅲ層 Ⅲ層	— —	1 1	2	台部	外面：縦刻、ナデ、ミガキ、内面：ナデ	高坏	Ⅶ群	器高（2.9）cm、底径6.4cm 矢印状の縦刻あり
Ⅴ-1	22	9	C66区	Ⅲ層	—	2	2	台部	外面：斜位沈線（綾杉状）、横ナデ、内面：ハケメ、ナデ	高坏	Ⅶ群	器高（3.7）cm、底径6.7cm
Ⅴ-1	23	10	G65区 H64区	Ⅲ層 Ⅲ層	— —	2 1	3	口縁～胴部	外面：肥厚帯、直線・波状貼付文（一部刻み）、下位ミガキ 内面：横ナデ、ミガキ	深鉢	Ⅷ群	補修孔あり、内外面炭化物付着
Ⅴ-1	24	10	D67区	Ⅲ層	—	1	1	口縁～頸部	外面：肥厚帯、直線・波状貼付文、円形貼付文、内面：横ナデ	深鉢	Ⅷ群	貼付文剥落多い、内外面炭化物付着
Ⅴ-1	25	10	F68区	Ⅲ層	—	3		口縁～頸部	外面：肥厚帯、段、直線状貼付文（一部刻み）、横ミガキ、内面：ナデ	深鉢	Ⅷ群	内面炭化物付着
Ⅴ-1	26	10	G66区	Ⅲ層	—	1	1	口縁～頸部	外面：肥厚帯、直線・波状貼付文、内面：ナデ	深鉢	Ⅷ群	
Ⅴ-1	27	10	F66区	Ⅲ層	—	2	2	口縁～頸部	外面：肥厚帯、直線・波状貼付文、内面：横ナデ	深鉢	Ⅷ群	補修孔？あり、内外面炭化物付着
Ⅴ-1	28	10	F65区 F66区 G66区	Ⅲ層 Ⅲ層 Ⅲ層	— — —	2 1 1	4	口縁～頸部	外面：肥厚帯、直線・波状貼付文、内面：横ミガキ	深鉢	Ⅷ群	貼付文剥落多い、外面炭化物付着
Ⅴ-1	29	10	G65区	Ⅲ層	—	3	3	胴部	外面：直線・波状貼付文、内面：横ナデ	深鉢	Ⅷ群	内外面炭化物？付着
Ⅴ-1	30	10	D67区	Ⅲ層	—	2	2	口縁部	外面：小波状貼付文（押圧）、下位横ミガキ、内面：ミガキ	深鉢	Ⅷ群	トビニタイ式、内面炭化物付着
Ⅴ-1	31	10	G64区	Ⅲ層	—	1	1	口縁部	外面：直線状貼付文（押圧、刻み）、横ミガキ、内面：横ナデ	深鉢	Ⅷ群	トビニタイ式
Ⅴ-1	32	10	F65区	Ⅲ層	—	1	1	底部	外面：ナデ、一部ミガキ、内面：ナデ、底面：ナデ	深鉢	Ⅷ群	
Ⅴ-1	33	10	F68区	Ⅲ層	—	1	1	底部	外面：ナデ、内面：ミガキ、底面：ナデ	深鉢	Ⅷ群	

表Ⅴ－7　Ⅲ層掲載石器一覧

掲載			出土地点	層位	遺物番号	器種	計測値（cm）			重量（g）	石材	残存状態	備考
図	番号	図版					長さ	幅	厚さ				
Ⅴ-4	1	11	礫集中5	Ⅲ層	18	たたき石	(9.1)	7.6	4.5	(364)	砂岩	半形	
Ⅴ-4	2	11	礫集中5	Ⅲ層	5	すり石	18.0	8.0	3.2	603	砂岩	完形	
Ⅴ-4	3	11	B68区	Ⅲ層	—	石鏃	3.4	1.5	0.5	1.8	黒曜石	完形	
Ⅴ-4	4	11	F67区	Ⅲ層	—	石鏃	3.4	1.8	0.7	3.0	黒曜石	準完形	
Ⅴ-4	5	11	G66区	Ⅲ層	—	石鏃	3.1	1.8	0.7	3.0	黒曜石	完形	
Ⅴ-4	6	11	L61区	Ⅲ層	—	石槍・ナイフ	5.3	1.7	0.7	4.8	黒曜石	完形	
Ⅴ-4	7	11	G67区	Ⅲ層	—	石錐	3.3	2.6	0.7	5.6	黒曜石	完形	
Ⅴ-4	8	11	H67区	Ⅲ層	—	スクレイパー	2.5	2.2	0.5	2.4	黒曜石	完形	
Ⅴ-4	9	11	G65区	Ⅲ層	—	スクレイパー	2.8	2.4	0.6	3.5	黒曜石	完形	
Ⅴ-4	10	11	G65区	Ⅲ層	—	スクレイパー	3.3	2.8	0.8	5.0	黒曜石	完形	
Ⅴ-4	11	11	F65区	Ⅲ層	—	スクレイパー	3.6	2.8	1.1	11.7	黒曜石	完形	
Ⅴ-4	12	11	C69区	Ⅲ層	—	石核	13.0	11.6	8.6	1545	頁岩	—	
Ⅴ-5	13	11	G67区	Ⅲ層	—	石核	3.2	3.1	1.9	19.8	黒曜石	—	
Ⅴ-5	14	12	G59区	Ⅲ層	—	磨製石斧	9.0	3.0	1.6	44.3	砂岩	完形	
Ⅴ-5	15	12	C68区	Ⅲ層	—	磨製石斧	6.9	4.6	1.0	34.1	泥岩	完形	
Ⅴ-5	16	12	L57区	Ⅲ層	—	磨製石斧	(4.4)	(5.1)	(2.1)	(47.0)	砂岩	片	
Ⅴ-5	17	12	G61区	Ⅲ層	—	磨製石斧	(7.7)	(6.9)	(2.0)	(151)	砂岩	半形	
Ⅴ-5	18	12	L60区	Ⅲ層	—	磨製石斧	15.1	5.5	4.1	400	砂岩	完形	
Ⅴ-5	19	12	G66区	Ⅲ層	—	たたき石	12.9	5.1	3.2	388	砂岩	完形	
Ⅴ-5	20	12	I61区	Ⅲ層	—	たたき石	11.6	7.9	6.0	717	砂岩	完形	
Ⅴ-5	21	12	F67区	Ⅲ層	—	たたき石	13.1	4.9	2.8	266	砂岩	完形	
Ⅴ-5	22	12	F67区	Ⅲ層	—	たたき石	6.7	5.8	4.7	278	砂岩	完形	
Ⅴ-5	23	12	I65区	Ⅲ層	—	たたき石	13.6	5.7	4.7	590	安山岩	完形	
Ⅴ-5	24	12	F68区	Ⅲ層	—	すり石	13.9	10.5	5.0	985	砂岩	完形	
Ⅴ-5	25	12	K62区	Ⅲ層	—	砥石	11.8	3.8	4.3	325	片岩	完形	

表Ⅴ－８　Ⅴ層掲載土器一覧

図	掲載番号	図版	出土地点	層位	遺物番号	破片点数	合計点数	破片部位	文様・調整等	器種	分類	備考
Ⅴ-9	1	9	ＶＰ-1	床面	—	13	—	胴部～底部	外面：一部R撚糸文、内面：ナデ	深鉢	Ⅰ群（東釧路Ⅱないし Ⅲ式）	底径5.2cm、器高(11) cm、外面炭化物付着
Ⅴ-9	2	9	土器集中2 O53区	Ⅴ層 Ⅴ層	— —	43 2	45	口縁部～底部	外面：横、斜位R撚糸文、口縁～胴部横位条痕文、 内面：横～斜位条痕文	深鉢	Ⅰ群b類（東釧路Ⅱ式）	口径7.6cm、底径2cm、器高(10.5) cm 内外面炭化物少量付着
Ⅴ-9	3	9	土器集中3 H57区 I57区 I58区 J62区	Ⅴ層 Ⅴ層 Ⅲ・Ⅴ層 Ⅲ層 Ⅴ層	1,5,10,11,13～19,21～26 — — — —	82 7 3 3 2	97	口縁部～胴部	外面：LR・RL羽状縄文、短縄文、内面：横ナデ	深鉢	Ⅰ群b類（東釧路Ⅲ式）	口径30.2cm、器高(27.3) cm、小波状口縁、内外面炭化物少量付着、補修孔2か所あり
Ⅴ-9	4	9	土器集中4 E59区 —	Ⅴ層 Ⅴ層 Ⅰ層	1 — —	69 1 1	71	胴部～底部	外面：横位貼付文、RL・LR横～斜位縄文、短縄文、内面：ナデ	深鉢	Ⅰ群b類（東釧路Ⅲ式）	底径16.2cm、器高(22.0) cm 二次焼成による褪色化
Ⅴ-10	5	13	土器集中1 H63区	Ⅴ層 Ⅴ層	— —	19 1	20	胴部	外面：組紐圧痕文、LR・RL斜行縄文（一部羽状）、短縄文、内面：ナデ	深鉢	Ⅰ群b類（東釧路Ⅲ式）	
Ⅴ-10	6	13	土器集中3 H57区	Ⅴ層 Ⅴ層	2 —	4 2	6	口縁部	口唇部：押圧、外面：縦位・横位・斜位綾絡文、内面：横ナデ	深鉢	Ⅰ群b類（東釧路Ⅱ式）	小波状口縁
Ⅴ-10	7	13	土器集中3	Ⅴ層	12	3	3	胴部	外面：横位組紐圧痕文、短縄文、内面：ナデ	深鉢	Ⅰ群b類（東釧路Ⅲ式）	繊維痕少量あり、8と同一個体
Ⅴ-10	8	13	土器集中3	Ⅴ層	12	6	6	口縁部	外面：横～斜位綾絡文、組紐圧痕文、短縄文、内面：ナデ	深鉢	Ⅰ群b類（東釧路Ⅲ式）	繊維痕少量あり、7と同一個体
Ⅴ-10	9	13	土器集中3	Ⅴ層	26	4	4	胴部～底部	外面：LR・RL斜行縄文、短縄文、内面：条痕文、ナデ、底面：ナデ	深鉢	Ⅰ群b類（東釧路Ⅱ式）	11と同一個体
Ⅴ-10	10	13	土器集中3	Ⅴ層 Ⅴ層	1 5	2 1	3	胴部	外面：LR・RL羽状縄文、横位刺突列、内面：ナデ	深鉢	Ⅰ群b類（東釧路Ⅱ式）	
Ⅴ-10	11	13	土器集中3 土器集中3	Ⅴ層 Ⅴ層	24 26	1 1	2	底部	外面：RL・LR羽状縄文、短縄文、内面：横位条痕文	深鉢	Ⅰ群b類（東釧路Ⅱ式）	9と同一個体
Ⅴ-10	12	13	土器集中4 F59区	Ⅴ層 Ⅴ層	— —	1 11	12	口縁部	口唇部：縄押圧、外面：横位綾絡文、LR・RL斜行縄文、短縄文、 内面：ナデ	深鉢	Ⅰ群b類（東釧路Ⅲ式）	
Ⅴ-10	13	13	土器集中4	Ⅴ層	1	4	4	口縁部	外面：短縄文、綾絡文、内面：ナデ	深鉢	Ⅰ群b類（東釧路Ⅲ式）	
Ⅴ-10	14	13	土器集中4	Ⅴ層	1	3	3	胴部	外面：横位貼付文、横位綾絡文、短縄文、内面：ナデ	深鉢	Ⅰ群b類（東釧路Ⅲ式）	
Ⅴ-10	15	13	土器集中4	Ⅴ層	—	2	2	胴部	外面：横位貼付文、RL斜行、LR縦走縄文、短縄文	深鉢	Ⅰ群b類（東釧路Ⅲ式）	内外面摩耗
Ⅴ-10	16	13	土器集中4 I57区	Ⅴ層 Ⅴ層	— —	2 2	4	胴部	外面：LR斜行・横走縄文、短縄文、内面：条痕文、ナデ	深鉢	Ⅰ群b類（東釧路Ⅱ～Ⅲ式）	
Ⅴ-10	17	13	土器集中4	Ⅴ層	—	4	4	胴部	外面：綾絡文、短縄文、内面：ナデ	深鉢	Ⅰ群b類（東釧路Ⅲ式）	
Ⅴ-10	18	13	土器集中4	Ⅴ層	—	6	6	胴部	外面：RL縦走・横走縄文、短縄文、内面：ナデ	深鉢	Ⅰ群b類（東釧路Ⅲ式）	外面摩耗
Ⅴ-10	19	13	土器集中4	Ⅴ層	1	2	2	胴部	外面：横位綾絡文、短縄文、内面：ナデ	深鉢	Ⅰ群b類（東釧路Ⅲ式）	
Ⅴ-12	1	14	J54区 K54区	Ⅴ層 Ⅴ層	— —	4 5	9	口縁部～胴部	口唇部：刺突文、外面：R撚糸文、内面：横位条痕文	深鉢	Ⅰ群b類（東釧路Ⅱ式）	内外面やや摩耗
Ⅴ-12	2	14	O49区 P49区	Ⅴ層 Ⅴ層	— —	1 1	2	口縁部	口唇部：刻み、外面：LR横走～斜行縄文、内面：横位条痕文	深鉢	Ⅰ群b類（東釧路Ⅱ式）	16と同一個体、内面黒色付着物あり
Ⅴ-12	3	14	O53区	Ⅴ層	—	1	1	口縁部	口唇部：刺突文、外面横位LR縄文、内面：横位条痕文、ナデ	深鉢	Ⅰ群b類（東釧路Ⅱ式）	
Ⅴ-12	4	14	K54区	Ⅴ層	—	1	1	口縁部	小波状口縁、口唇部：刺突文、外面：LR横走縄文、内面：横位条痕文	深鉢	Ⅰ群b類（東釧路Ⅱ式）	小波状口縁
Ⅴ-12	5	14	K55区	Ⅲ層	—	2	2	口縁部	口唇部：刺突文、外面：横位刺突文、LR斜行縄文、内面：横位条痕文	深鉢	Ⅰ群b類（東釧路Ⅱ式）	
Ⅴ-12	6	14	J63区	Ⅴ層	—	1	1	口縁部	口唇部：LR縄文、外面：LR斜行縄文、内面：横位条痕文	深鉢	Ⅰ群b類（東釧路Ⅱ式）	内面やや摩耗
Ⅴ-12	7	14	F58区	Ⅴ層	—	1	1	口縁部	口唇部：刺突文、外面：LR斜行縄文、内面：ナデ	深鉢	Ⅰ群b類（東釧路Ⅱ式）	
Ⅴ-12	8	14	I56区 I56区	Ⅴ層 Ⅲ層	— —	1 1	2	口縁部	口唇部：刻み、外面LR横走縄文、内面：ナデ	深鉢	Ⅰ群b類（東釧路Ⅱ式）	
Ⅴ-12	9	14	L60区	Ⅴ層	—	1	1	口縁部	外面：横位綾絡文、LR横走・斜行縄文、内面：横位条痕文	深鉢	Ⅰ群b類（東釧路Ⅱ式）	内面黒色付着物あり
Ⅴ-12	10	14	O50区	Ⅴ層	—	3	3	口縁部	外面：横位綾絡文、LR横走縄文、内面：ナデ	深鉢	Ⅰ群b類（東釧路Ⅱ式）	内面黒色付着物あり
Ⅴ-12	11	14	K54区	Ⅴ層	—	1	1	口縁部	外面：R撚糸文、内面：ナデ	深鉢	Ⅰ群b類（東釧路Ⅱ式）	
Ⅴ-12	12	14	J55区	Ⅴ層	—	1	1	口縁部	外面：R撚糸文、内面：ナデ	深鉢	Ⅰ群b類（東釧路Ⅱ式）	
Ⅴ-12	13	14	K54区	Ⅴ層	—	1	1	口縁部	外面：R撚糸文、内面：ナデ	深鉢	Ⅰ群b類（東釧路Ⅱ式）	
Ⅴ-12	14	14	J54区	Ⅴ層	—	3	3	口縁部	外面：横位条痕文、内面：横位条痕文	深鉢	Ⅰ群b類（東釧路Ⅱ式）	
Ⅴ-12	15	14	R44区	Ⅴ層	—	2	2	口縁部	外面：縦位・横位条痕文、内面：横位条痕文	深鉢	Ⅰ群b類（東釧路Ⅱ式？）	綱文式？
Ⅴ-12	16	14	Q50区	Ⅴ層	—	5	5	胴部	外面：LR斜行縄文、内面：横位条痕文	深鉢	Ⅰ群b類（東釧路Ⅱ式）	2と同一個体
Ⅴ-12	17	14	J54区 K54区	Ⅴ層 Ⅴ層	— —	1 7	8	胴部	外面：LR撚糸文、横位刺突文、内面：横位条痕文、ナデ	深鉢	Ⅰ群b類（東釧路Ⅱ式）	内外面やや摩耗
Ⅴ-12	18	14	I55区	Ⅴ層	—	1	1	胴部	外面：LR横走縄文、内面：横位条痕文	深鉢	Ⅰ群b類（東釧路Ⅱ式）	条痕文浅い
Ⅴ-12	19	14	H61区	Ⅴ層	—	2	2	胴部	外面：LR横走・斜行縄文、内面：ナデ	深鉢	Ⅰ群b類（東釧路Ⅱ式？）	
Ⅴ-12	20	14	O50区	Ⅴ層	—	1	1	胴部	外面：斜位沈線、刺突文、内面：横位条痕文	深鉢	Ⅰ群b類（東釧路Ⅱ式？）	
Ⅴ-13	21	14	J54区 J55区	Ⅴ層 Ⅴ層	— —	1 2	3	胴部～底部	外面：R撚糸文、横位刺突文、刻み、内面：ナデ、底面：ナデ	深鉢	Ⅰ群b類（東釧路Ⅱ式）	内面大きく剥離
Ⅴ-13	22	14	K54区	Ⅴ層	—	1	1	底部	外面：R撚糸文、横位刺突文、内面：ナデ、底面：綾絡文	深鉢	Ⅰ群b類（東釧路Ⅱ式）	
Ⅴ-13	23	14	O48区	Ⅴ層	—	1	1	底部	外面：LR斜行縄文、刻み、内面：不明、底面：ナデ	深鉢	Ⅰ群b類（東釧路Ⅱ式）	内面剥離
Ⅴ-13	24	15	I56区	Ⅴ層	—	2	2	底部	外面：斜位・横位沈線、横位刺突文、内面：ナデ、底面：ナデ	深鉢	Ⅰ群b類（東釧路Ⅱ式？）	
Ⅴ-13	25	15	K54区	Ⅴ層	—	1	1	底部	外面：R撚糸文、内面：ナデ、底面：ナデ	深鉢	Ⅰ群b類（東釧路Ⅱ式）	
Ⅴ-13	26	15	N52区	Ⅴ層	—	2	2	底部	外面：LR横走縄文、内面：ナデ、底面：ナデ	深鉢	Ⅰ群b類（東釧路Ⅱ式）	
Ⅴ-13	27	15	L61区	Ⅴ層	—	1	1	底部	外面：R撚糸文、内面：ナデ、底面：不明	深鉢	Ⅰ群b類（東釧路Ⅱ式）	
Ⅴ-13	28	15	E59区	Ⅴ層	—	1	1	口縁部	口唇部：短縄文、外面：横位綾絡文、短縄文、内面：ナデ	深鉢	Ⅰ群b類（東釧路Ⅲ式）	口唇部肥厚、外面やや摩耗
Ⅴ-13	29	15	グリッドなし	Ⅴ層	—	1	1	口縁部	口唇部：短縄文、外面：横位綾絡文、短縄文、内面：ナデ	深鉢	Ⅰ群b類（東釧路Ⅲ式）	口唇部肥厚
Ⅴ-13	30	15	F58区	Ⅴ層	—	1	1	口縁部	口唇部：沈線、外面：組紐圧痕文	深鉢	Ⅰ群b類（東釧路Ⅲ式）	内面黒色付着物あり
Ⅴ-13	31	15	F59区	Ⅴ層	—	3	3	口縁部	口唇部：RL縄文、外面：RL斜行縄文、横位組紐圧痕文、内面：ナデ	深鉢	Ⅰ群b類（東釧路Ⅲ式）	
Ⅴ-13	32	15	J55区	Ⅴ層	—	6	6	胴部	外面：貼付文、短縄文、LR・RL羽状縄文、内面：ナデ	深鉢	Ⅰ群b類（東釧路Ⅲ式）	外面やや摩耗
Ⅴ-13	33	15	F58区 F59区	Ⅴ層 Ⅴ層	— —	2 2	4	胴部	外面：貼付文、短縄文、LR・RL斜行縄文、内面：ナデ	深鉢	Ⅰ群b類（東釧路Ⅲ式）	
Ⅴ-13	34	15	F58区	Ⅴ層	—	2	2	胴部	外面：縦位綾絡文、円形貼付文、短縄文、LR・RL羽状縄文、内面：ナデ	深鉢	Ⅰ群b類（東釧路Ⅲ式）	
Ⅴ-13	35	15	I57区	Ⅴ層	—	2	2	胴部	外面：円形貼付文、LR縦走縄文、RL横走・斜行縄文、短縄文、内面：ナデ	深鉢	Ⅰ群b類（東釧路Ⅲ式）	
Ⅴ-13	36	15	F59区	Ⅴ層	—	2	2	胴部	外面：横位綾絡文、短縄文、内面：ナデ	深鉢	Ⅰ群b類（東釧路Ⅲ式）	
Ⅴ-13	37	15	F59区	Ⅴ層	—	1	1	胴部	外面：RL斜行縄文、内面：横位条痕文	深鉢	Ⅰ群b類（東釧路Ⅲ式？）	
Ⅴ-13	38	15	F59区	Ⅴ層	—	3	3	胴部	外面：LR・RL羽状縄文、短縄文、内面：横位条痕文	深鉢	Ⅰ群b類（東釧路Ⅲ式）	
Ⅴ-13	39	15	F58区	Ⅴ層	—	3	3	胴部～底部	外面：RL・LR斜行縄文、短縄文、内面：ナデ	深鉢	Ⅰ群b類（東釧路Ⅲ式）	
Ⅴ-13	40	15	I56区	Ⅴ層	—	2	2	胴部～底部	外面：RL斜行縄文、短縄文、内面：ナデ、底面：ナデ	深鉢	Ⅰ群b類（東釧路Ⅲ式）	
Ⅴ-13	41	15	F59区	Ⅴ層	—	1	1	胴部～底部	外面：RL斜行縄文、短縄文、内面：ナデ、底面：ナデ	深鉢	Ⅰ群b類（東釧路Ⅱ～Ⅲ式）	
Ⅴ-13	42	15	F59区 グリッドなし	Ⅴ層 Ⅴ層	— —	1 1	2	底部	外面：短縄文、内面：ナデ、底面：ナデ	深鉢	Ⅰ群b類（東釧路Ⅲ式）	

表Ⅴ－９　Ⅴ層掲載石器等一覧

掲載			出土地点	層位	遺物番号	器種	計測値（cm）			重量（g）	石材	残存状態	備考
図	番号	図版					長さ	幅	厚さ				
Ⅴ-14	1	16	ＶＦ－１	Ⅴ層	7	彫器	3.4	2.3	0.9	6.9	黒曜石	完形	
Ⅴ-14	2	16	ＶＦ－１	Ⅴ層	4	彫器	2.6	1.8	0.4	1.5	黒曜石	完形	
Ⅴ-14	3	16	ＶＦ－１	Ⅴ層	3	彫器	2.7	1.4	1.2	5.5	黒曜石	完形	所山（ON3O-1）
Ⅴ-14	4	16	ＶＦ－１	焼土	1	削片	3.8	0.8	1.0	1.6	黒曜石	完形	
Ⅴ-14	5	16	ＶＦ－３	Ⅴ層	2	石鏃	5.1	1.8	0.9	4.3	黒曜石	完形	白滝1（ON3O-2）
Ⅴ-14	6	16	ＶＦ－３	Ⅴ層	8	彫器	2.6	1.9	1.2	4.8	黒曜石	完形	所山？（ON3O-3）
Ⅴ-14	7	16	礫集中1	Ⅴ層	129	たたき石	17.4	7.9	6.2	1362.0	安山岩	完形	
Ⅴ-14	8	16	礫集中1	Ⅴ層	133	すり石	9.9	8.4	4.2	550	砂岩	完形	
Ⅴ-19	9	16	Ｐ50区	Ⅴ層	—	石刃鎌	2.9	0.9	0.3	(0.7)	黒曜石	準完形	所山（ON3O-4）
Ⅴ-19	10	16	Ｊ55区	Ⅴ層	—	石刃鎌	(1.2)	(0.8)	(0.2)	(0.2)	黒曜石	片	所山（ON3O-5）
Ⅴ-19	11	16	Ｇ58区	Ⅴ層	—	石鏃	3.9	1.6	0.4	2.7	黒曜石	完形	
Ⅴ-19	12	16	Ｉ61区	Ⅴ層	—	石鏃	2.8	1.4	0.4	1.9	黒曜石	完形	
Ⅴ-19	13	16	Ｈ58区	Ⅴ層	—	石鏃	2.9	1.1	0.3	1.0	黒曜石	完形	
Ⅴ-19	14	16	Ｈ57区	Ⅴ層	—	石鏃	3.0	1.3	0.4	1.2	黒曜石	完形	
Ⅴ-19	15	16	Ｇ62区	Ⅴ層	—	石槍・ナイフ	6.6	3.0	0.8	16.6	黒曜石	完形	2点接合
Ⅴ-19	16	16	Ｐ50区	Ⅴ層	—	石鏃	(3.6)	(1.7)	(0.7)	(3.5)	黒曜石	準完形	
Ⅴ-19	17	16	Ｉ56区	Ⅴ層	—	石鏃	(3.4)	(1.3)	(0.8)	(3.5)	黒曜石	半形	
Ⅴ-19	18	16	Ｉ61区	Ⅴ層	—	スクレイパー	3.0	2.2	0.7	4.6	黒曜石	完形	縞状剥離あり
Ⅴ-19	19	16	Ｈ58区	Ⅴ層	—	スクレイパー	(5.7)	(2.9)	(1.4)	(20.3)	黒曜石	準完形	
Ⅴ-19	20	16	Ｍ61区	Ⅴ層	—	スクレイパー	7.5	7.3	2.0	96.9	頁岩	完形	
Ⅴ-19	21	16	Ｌ55区	Ⅴ層	—	スクレイパー	6.7	3.5	0.8	17.1	黒曜石	完形	所山（ON3O-9）
Ⅴ-19	22	16	Ｋ55区	Ⅴ層	—	スクレイパー	5.4	1.5	0.7	5.6	黒曜石	完形	
Ⅴ-19	23	16	Ｊ55区	Ⅴ層	—	スクレイパー	3.8	3.6	0.9	8.9	黒曜石	完形	
Ⅴ-19	24	16	Ｐ48区	Ⅴ層	—	スクレイパー	2.4	2.0	0.5	2.7	黒曜石	完形	白滝1（ON3O-10）
Ⅴ-19	25	16	Ｊ55区	Ⅴ層	—	彫器	2.6	1.3	0.4	1.4	黒曜石	完形	
Ⅴ-19	26	16	Ｍ60区	Ⅴ層	—	彫器	3.9	1.7	1.1	6.3	黒曜石	完形	
Ⅴ-19	27	16	Ｉ63区	Ⅴ層	—	彫器	2.9	1.8	0.9	4.1	黒曜石	完形	所山？（ON3O-8）
Ⅴ-19	28	16	Ｉ62区	Ⅴ層	—	彫器	3.9	2.3	1.7	15.5	黒曜石	完形	
Ⅴ-19	29	16	Ｌ55区	Ⅴ層	—	彫器	3.0	1.7	0.8	3.5	黒曜石	完形	所山？（ON3O-6）
Ⅴ-19	30	16	Ｊ55区	Ⅴ層	—	彫器	2.8	1.1	0.5	1.3	黒曜石	完形	
Ⅴ-19	31	16	Ｐ50区	Ⅴ層	—	彫器	4.4	1.5	0.6	4.2	黒曜石	完形	所山（ON3O-7）
Ⅴ-19	32	16	Ｉ61区	Ⅴ層	1	彫器	4.4	2.0	1.0	7.1	黒曜石	完形	
Ⅴ-20	33	16	Ｉ61区	Ⅴ層	—	彫器	4.1	1.2	0.5	3.1	黒曜石	完形	
Ⅴ-20	34	16	Ｊ60区	Ⅴ層	—	彫器	3.2	1.3	0.7	3.3	黒曜石	完形	被熱
Ⅴ-20	35	16	Ｉ61区	Ⅴ層	—	彫器	3.8	2.3	1.0	8.4	黒曜石	完形	
Ⅴ-20	36	16	Ｈ64区	Ⅴ層	—	彫器	2.3	2.0	0.8	4.2	黒曜石	完形	
Ⅴ-20	37	16	Ｉ62区	Ⅴ層	—	彫器	3.0	1.6	0.9	3.8	黒曜石	完形	
Ⅴ-20	38	16	Ｑ49区	Ⅴ層	—	彫器	3.2	1.8	0.8	4.2	黒曜石	準完形	
Ⅴ-20	39	16	Ｌ60区	Ⅴ層	—	彫器	2.5	1.2	0.3	1.0	黒曜石	準完形	
Ⅴ-20	40	16	Ｊ55区	Ⅴ層	—	彫器	3.5	1.6	0.9	5.0	黒曜石	完形	白滝2？（ON3O-11）
Ⅴ-20	41	16	Ｋ53区	Ⅴ層	—	彫器	3.8	2.3	1.6	14.1	黒曜石	完形	
Ⅴ-20	42	16	Ｐ50区	Ⅴ層	—	彫器	2.4	1.4	0.8	3.0	黒曜石	完形	
Ⅴ-20	43	16	Ｏ48区	Ⅴ層	—	彫器	3.9	2.8	1.5	15.5	黒曜石	完形	
Ⅴ-20	44	16	Ｊ60区	Ⅴ層	—	彫器	2.5	1.4	0.9	1.8	黒曜石	完形	№48と接合
Ⅴ-20	45	16	Ｉ63区	Ⅴ層	—	削片	3.5	0.9	0.8	1.9	黒曜石	完形	
Ⅴ-20	46	16	Ｉ61区	Ⅴ層	—	削片	3.2	1.6	0.9	3.9	黒曜石	完形	
Ⅴ-20	47	16	Ｉ61区	Ⅴ層	—	削片	3.2	0.9	2.2	3.0	黒曜石	完形	
Ⅴ-20	48	16	Ｉ62区	Ⅴ層	—	削片	2.7	1.2	2.0	3.7	黒曜石	完形	№44と接合
Ⅴ-20	49	16	Ｉ62区 Ｊ60区	Ⅴ層	—	接合資料（彫器,削片）	3.3	2.0	1.2	5.5	黒曜石	完形	2点接合（№44,48）
Ⅴ-20	50	17	Ｐ50区	Ⅴ層	—	石刃	(2.1)	(1.0)	(0.3)	0.7	黒曜石	半形	
Ⅴ-20	51	17	Ｊ55区	Ⅴ層	—	二次加工ある石刃	(2.8)	(1.4)	(0.3)	1.5	黒曜石	片	
Ⅴ-20	52	17	Ｊ56区	Ⅴ層	—	石核	2.9	2.6	1.7	13.1	黒曜石	—	所山（ON3O-12）
Ⅴ-20	53	17	Ｉ58区	Ⅴ層	—	石核	3.4	1.4	0.8	3.7	黒曜石	—	
Ⅴ-20	54	17	Ｈ57区	Ⅴ層	—	石核	3.1	1.8	1.6	9.3	黒曜石	—	上士幌？（ON3O-13）
Ⅴ-21	55	17	Ｔ46区	Ⅴ層	—	磨製石斧	14.5	5.0	2.7	250.0	砂岩	完形	
Ⅴ-21	56	17	Ｏ49区	Ⅴ層	—	磨製石斧	4.0	2.8	0.9	13.1	蛇紋岩	完形	
Ⅴ-21	57	17	Ｐ49区	Ⅴ層	—	磨製石斧	(2.2)	(1.0)	(0.6)	2.3	流紋岩	片	
Ⅴ-21	58	17	Ｐ50区	Ⅴ層	—	たたき石	5.9	4.9	3.6	120.0	チャート	完形	
Ⅴ-21	59	17	Ｆ59区	Ⅴ層	—	たたき石	11.0	9.3	4.7	715.0	砂岩	完形	
Ⅴ-21	60	17	Ｌ61区	Ⅴ層	—	砥石	23.8	13.5	4.9	1179	砂岩	半形	3点接合
Ⅴ-21	61	17	Ｄ60区 Ｅ59区	Ⅴ層	—	砥石	21.5	16.8	5.1	2800	砂岩	完形	2点接合、有溝
Ⅴ-21	62	17	Ｆ60区	Ⅴ層	—	円盤状土製品	6.2	6.3	0.8	37.3	—	完形	6点接合
Ⅴ-21	63	17	Ｆ62区	Ⅴ層	—	円盤状土製品	6.7	6.5	0.8	42.5	—	完形	

表Ⅴ－10　掲載鉄製品一覧

掲載			出土地点	層位	遺物番号	器種	計測値（cm）			重量（g）	残存状態	備考
図	番号	図版					長さ	幅	厚さ			
Ⅴ-5	26	12	G65区	Ⅲ層	—	鏃	5.2	4.2	0.6	40.6	片	保存処理済

表Ⅴ－11　水洗選別成果一覧

層位	整理番号	採取地点	層位	袋数	土器			剥片・砕片			炭化物	骨片	備考
					分類	点数	重量（g）	石材	点数	重量（g）	重量（g）	重量（g）	
Ⅲ層	5	ⅢP－1	覆土	1	—	—	—	黒曜石	1	0.44	0.66	13.44	G67区 骨片あり
	23	ⅢP－7	覆土下位	1	不明	3	0.13	—	—	—	0.12	—	床から5cm上覆土
	1-2	ⅢF－1	焼土	2	—	—	—	黒曜石	3	0.10	0.55	3.76	D66区
	13	Ⅲ層礫集中3	—	1	—	—	—	—	—	—	0.58	6.44	骨片？
	3	灰集中	Ⅲ	1	—	—	—	—	—	—	0.06	—	D66区、自然堆積
Ⅴ層	6～9,18,20	ⅤF－1	焼土直上	6	—	—	—	黒曜石	390	13.07	0.16	—	C14分析　ON3-2
								チャート	1	0.03			
	11,12,19	ⅤF－2	焼土直上	3	—	—	—	黒曜石	88	0.94	0.04	—	
	14,15,21	ⅤF－3	焼土直上	3	—	—	—	黒曜石	95	0.97	0.06	—	C14分析　ON3-3
	17	ⅤF－4	焼土直上	1	—	—	—	黒曜石	4	0.04	0.03	—	
	22	J56区	Ⅴ層	1	Ⅰ群	16	8.55	黒曜石	54	2.21	0.04	—	包含層の剥片・砕片のまとまり
								頁岩	1	0.03			
合計				20	—	19	8.68	—	637	17.83	2.30	23.64	—

※4,10,16は欠番

Ⅵ章　自然科学的分析

1　温根沼３遺跡における放射性炭素年代測定（AMS測定）

（株）加速器分析研究所

1　測定対象試料

温根沼３遺跡は、北海道根室市温根沼284-7に所在し、標高23m前後の海岸段丘上に立地する。測定対象試料は、土坑墓ＶＰ－１の坑底直上に堆積した腐植土層から採取された土壌、Ｖ層中の焼土（ＶＦ－１、ＶＦ－３）から出土した木炭の合計３点である（表１）。

Ｖ層は摩周テフラｆ～ｊ（約7600～7700年前）の下位に堆積した黒色土層である。土坑墓ＶＰ－１はこの層で検出された。覆土は主にＶ層（縄文時代早期遺物包含層）とⅥ層（漸移層）＋Ⅶ層（ローム層）の混じる層の互層で構成される。坑底西隅から東釧路Ⅱ式の可能性のある土器が出土している。

2　測定の意義

試料が出土した土壙墓と焼土の年代を明らかにする。

3　化学処理工程

（１）木炭の化学処理

１）メス・ピンセットを使い、土等の付着物を取り除く。

２）酸－アルカリ－酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1mol/ℓ（1M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と表１に記載する。

３）試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO_2）を発生させる。

４）真空ラインで二酸化炭素を精製する。

５）精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。

６）グラファイトを内径１㎜のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

（２）土壌の化学処理

１）メス・ピンセット、ふるいを使い、石や根などの混入物を取り除く。

２）酸処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。処理には1mol/ℓ（1M）の塩酸（HCl）を用い、表１に「HCl」と記載する。

以下、（１）３）以降と同じ。

4　測定方法

加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し、^{14}Cの計数、^{13}C濃度（^{13}C/^{12}C）、

^{14}C濃度（$^{14}C/^{12}C$）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx Ⅱ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5　算出方法

（1）$\delta^{13}C$は、試料炭素の^{13}C濃度（$^{13}C/^{12}C$）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表1）。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

（2）^{14}C年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中^{14}C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。^{14}C年代は$\delta^{13}C$によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。^{14}C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、^{14}C年代の誤差（±1σ）は、試料の^{14}C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

（3）pMC（percent Modern Carbon）は、標準現代炭素に対する試料炭素の^{14}C濃度の割合である。pMCが小さい（^{14}Cが少ない）ほど古い年代を示し、pMCが100以上（^{14}Cの量が標準現代炭素と同等以上）の場合Modernとする。この値も$\delta^{13}C$によって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。

（4）暦年較正年代とは、年代が既知の試料の^{14}C濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の^{14}C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、^{14}C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差（1σ＝68.2%）あるいは2標準偏差（2σ＝95.4%）で表示される。グラフの縦軸が^{14}C年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、$\delta^{13}C$補正を行い、下1桁を丸めない^{14}C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13データベース（Reimer et al. 2013）を用い、OxCalv4.2較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。暦年較正年代は、^{14}C年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

6　測定結果

測定結果を表1、2に示す。

試料の^{14}C年代は、ON3-1が6980±30yrBP、ON3-2が6940±30yrBP、ON3-3が7150±30yrBPである。暦年較正年代（1σ）は、3点の間で若干年代差があるが、おおむね8000～7700cal BP頃となっており、縄文時代早期後葉から末葉頃に相当する。土坑墓ＶＰ－１からは東釧路Ⅱ式の可能性のある土器が出土しており、試料ON3-1の年代値はその時期の事例に近い（小林編2008）。テフラとの上下関係にも矛盾しない結果となっている。

試料の炭素含有率を確認すると、土壌ON3-1は２％で、土壌として特に低くない値である。木炭ON3-2、ON3-3は、いずれも60%を超える十分な値である。

文献

Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), 337-360

小林達雄編 2008 総覧縄文土器，総覧縄文土器刊行委員会，アム・プロモーション

Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 55(4), 1869-1887

Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, Radiocarbon 19(3), 355-363

表1　放射性炭素年代測定結果（$\delta^{13}C$補正値）

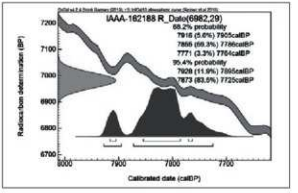
測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}C$（‰）（AMS）	$\delta^{13}C$補正あり	
						Libby Age（yrBP）	pMC（%）
IAAA-162188	ON3-1	ＶＰ－１　覆土坑底直上	土壌	HCl	−24.51±0.51	6,980±30	41.93±0.15
IAAA-162189	ON3-2	ＶＦ－１　Ｖ層	木炭	AAA	−28.35±0.31	6,940±30	42.16±0.17
IAAA-162190	ON3-3	ＶＦ－３　Ｖ層	木炭	AAA	−28.19±0.28	7,150±30	41.07±0.16

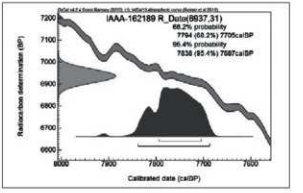
［#8386］

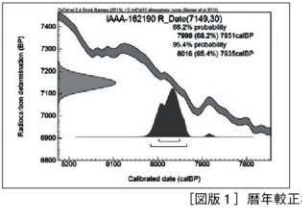
表2　放射性炭素年代測定結果（$\delta^{13}C$未補正値、暦年較正用^{14}C年代、較正年代）

測定番号	$\delta^{13}C$補正なし		暦年較正用（yrBP）	1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
	Age（yrBP）	pMC（%）			
IAAA-162188	6,970±30	41.97±0.15	6,982±29	7916calBP - 7905calBP（5.6%） 7855calBP - 7786calBP（59.3%） 7771calBP - 7764calBP（3.3%）	7928calBP - 7895calBP（11.9%） 7873calBP - 7725calBP（83.5%）
IAAA-162189	6,990±30	41.87±0.16	6,937±31	7794calBP - 7705calBP（68.2%）	7838calBP - 7687calBP（95.4%）
IAAA-162190	7,200±30	40.80±0.15	7,149±30	7998calBP - 7951calBP（68.2%）	8016calBP - 7935calBP（95.4%）

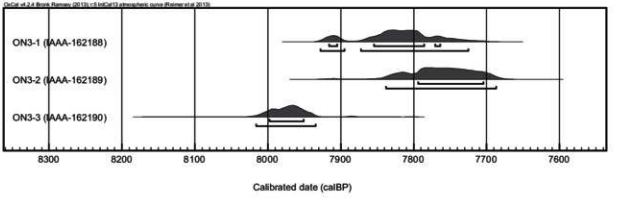
［参考値］







［図版１］暦年較正年代グラフ（参考）



［図版２］暦年較正年代グラフ（マルチプロット図、参考）

2　温根沼３遺跡出土黒曜石製石器の産地推定

（株）パレオ・ラボ（竹原弘展）

1．はじめに

根室市に所在する温根沼３遺跡から出土した縄文時代の黒曜石製石器について、エネルギー分散型蛍光X線分析装置による元素分析を行い、産地を推定した。

2．試料と方法

分析対象は、黒曜石製石器13点である（表１）。時期は、縄文時代早期後半（東釧路Ⅱ～Ⅲ式期）とみられている。試料は、測定前にメラミンフォーム製スポンジを用いて、測定面の表面の洗浄を行った。

表１　分析対象となる黒曜石製石器の一覧

番号	出土地区	採取層位	層位	遺物番号	取上日	重量（g）	器種	時期
ON3O-1	ＶＦ－１	焼土	Ⅴ	3	2016年6月21日	5.5	彫器	縄文早期後半
ON3O-2	ＶＦ－２	焼土	Ⅴ	2	2016年6月24日	4.3	石錐	
ON3O-3	ＶＦ－３	焼土	Ⅴ	8	2016年6月24日	4.8	彫器	
ON3O-4	Ｐ50区	包含層	Ⅴ		2016年7月4日	0.7	石刃鏃	
ON3O-5	Ｊ55区	包含層	Ⅴ		2016年7月7日	0.2	石刃鏃	
ON3O-6	Ｊ55区	包含層	Ⅴ		2016年6月23日	3.5	彫器	
ON3O-7	Ｐ50区	包含層	Ⅴ		2016年7月7日	4.2	彫器	
ON3O-8	Ｉ63区	包含層	Ⅴ		2016年6月23日	4.1	彫器	
ON3O-9	Ｌ55区	包含層	Ⅴ		2016年7月8日	17.1	スクレイパー	
ON3O-10	Ｐ48区	包含層	Ⅴ		2016年5月23日	2.7	スクレイパー	
ON3O-11	Ｊ55区	包含層	Ⅴ		2016年7月4日	5.0	彫器	
ON3O-12	Ｊ56区	包含層	Ⅴ		2016年6月30日	13.1	石核	
ON3O-13	Ｈ57区	包含層	Ⅴ		2016年7月4日	9.3	石核	

分析装置は、エスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製のエネルギー分散型蛍光X線分析計SEA1200VXを使用した。装置の仕様は、X線管ターゲットはロジウム（Rh）、X線検出器はSDD検出器である。測定条件は、測定時間100sec、照射径８㎜、電圧50kV、電流1000μA、試料室内雰囲気は真空に設定し、一次フィルタにPb測定用を用いた。

黒曜石の産地推定には、蛍光X線分析によるX線強度を用いた黒曜石産地推定法である判別図法を用いた（望月，1999など）。本方法では、まず各試料を蛍光X線分析装置で測定し、その測定結果のうち、カリウム（K）、マンガン（Mn）、鉄（Fe）、ルビジウム（Rb）、ストロンチウム（Sr）、イットリウム（Y）、ジルコニウム（Zr）の合計７元素のX線強度（cps：count per second）について、以下に示す指標値を計算する。

1）Rb分率＝Rb強度×100/（Rb強度＋Sr強度＋Y強度＋Zr強度）

2）Sr分率＝Sr強度×100/（Rb強度＋Sr強度＋Y強度＋Zr強度）

図１　黒曜石産地分布図（東日本）

3）Mn強度×100/Fe強度

4）log（Fe強度/K強度）

そして、これらの指標値を用いた２つの判別図（横軸Rb分率－縦軸Mn強度×100/Fe強度の判別図と横軸Sr分率－縦軸log（Fe強度/K強度）の判別図）を作成し、各地の原石データと遺跡出土遺物のデータを照合して、産地を推定する。この方法は、できる限り蛍光X線のエネルギー差が小さい元素同士を組み合わせて指標値を算出するため、形状、厚み等の影響を比較的受けにくく、原則として非破壊分析が望ましい考古遺物の測定に対して非常に有効な方法であるといえる。ただし、風化試料の場合、log（Fe強度/K強度）の値が減少する（望月, 1999）。試料の測定面にはなるべく平滑な面を選んだ。

原石試料は、採取原石を割って新鮮な面を露出させた上で、産地推定対象試料と同様の条件で測定した。表２に判別群一覧とそれぞれの原石の採取地点および点数を、図１に各原石の採取地の分布図を示す。

３．分析結果

表３に石器の測定値および算出した指標値を、図２と図３に黒曜石原石の判別図に石器の指標値をプロットした図を示す。視覚的にわかりやすくするため、図では各判別群を楕円で取り囲んだ。

分析の結果、２点が白滝１群（北海道、白滝エリア）、６点が所山群（北海道、置戸エリア）の範囲にプロットされた。また、ON3O-11は、図２では白滝２群（北海道、白滝エリア）にプロットされたが、図３では白滝２群の下方にプロットされた。これは先述したように遺物の風化による影響と考えられ（望月,1999）、白滝２群に属する可能性が高い。同様に、ON3O-3、6、8の３点は所山群に、ON3O-13は上士幌群（北海道、上士幌エリア）に属する可能性が高い。

赤井川群と上士幌群の判別図は、一部重複があるため、図２、３では区別が困難な場合がある。上士幌群とみられるON3O-13について以下に示すY分率を算出した。

Y分率＝Y強度×100/（Rb強度＋Sr強度＋Y強度＋Zr強度）

表２　東日本黒曜石産地の判別群

都道府県	エリア	判別群名	原石採取地	
北海道	白滝	白滝1	赤石山山頂（43）, 八号沢露頭（15）	赤石山山頂, 八号沢露頭, 八号沢, 黒曜の沢, 幌加林道（36）
		白滝2	7の沢川支流（2）, IK露頭（10）, 十勝石沢露頭直下河床（11）, アジサイの滝露頭（10）	
	赤井川	赤井川	曲川・土木川（24）	
	上士幌	上士幌	十勝三股（4）, タウシュベツ川右岸（42）, タウシュベツ川左岸（10）, 十三ノ沢（32）	
	置戸	置戸山	置戸山（5）	
		所山	所山（5）	
	豊浦	豊浦	豊泉（10）	
	旭川	旭川	近文台（8）, 雨紛台（2）	
	名寄	名寄	忠烈布川（19）	
	秩父別	秩父別1	中山（65）	
		秩父別2		
		秩父別3		
	遠軽	遠軽	社名淵川河床（2）	
	生田原	生田原	仁田布川河床（10）	
	留辺蘂	留辺蘂1	ケショマップ川河床（9）	
		留辺蘂2		
	釧路	釧路	釧路市営スキー場（9）, 阿寒川右岸（2）, 阿寒川左岸（6）	
青森	木造	出来島	出来島海岸（15）, 鶴ヶ坂（10）	
	深浦	八森山	岡崎沢（7）, 八森山公園（8）	
	青森	青森	天田内川（6）	
秋田	男鹿	金ヶ崎	金ヶ崎温泉（10）	
		脇本	脇本海岸（4）	
岩手	北上川	北上折居1	北上川（9）, 真城（33）	
		北上折居2		
		北上折居3		
宮城	宮崎	湯ノ倉	湯ノ倉（40）	
	色麻	根岸	根岸（40）	
	仙台	秋保1	土蔵（18）	
		秋保2		
	塩竈	塩竈	塩竈（10）	
山形	羽黒	月山	月山庄前（24）, 大越沢（10）	
		櫛引	たらのき代（19）	
新潟	新発田	板山	板山牧場（10）	
	新津	金津	金津（7）	
栃木	高原山	甘湯沢	甘湯沢（22）	
		七尋沢	七尋沢（3）, 宮川（3）, 枝持沢（3）	
長野	和田	西餅屋	芙蓉パーライト土砂集積場（30）	
		鷹山	鷹山（14）, 東餅屋（54）	
		小深沢	小深沢（42）	
		土屋橋1	土屋橋西（10）	
		土屋橋2	新和田トンネル北（20）, 土屋橋北西（58）, 土屋橋西（1）	
		古峠	和田峠トンネル上（28）, 古峠（38）, 和田峠スキー場（28）	
		ブドウ沢	ブドウ沢（20）	
		牧ヶ沢	牧ヶ沢下（20）	
		高松沢	高松沢（19）	
	諏訪	星ヶ台	星ヶ台（35）, 星ヶ塔（20）	
	蓼科	冷山	冷山（20）, 麦草峠（20）, 麦草峠東（20）	
神奈川	箱根	芦ノ湯	芦ノ湯（20）	
		畑宿	畑宿（51）	
		鍛冶屋	鍛冶屋（20）	
静岡		上多賀	上多賀（20）	
	天城	柏峠	柏峠（20）	
東京	神津島	恩馳島	恩馳島（27）	
		砂糖崎	砂糖崎（20）	
島根	隠岐	久見	久見パーライト中（6）, 久見採掘現場（5）	
		箕浦	箕浦海岸（3）, 加茂（4）, 岸浜（3）	

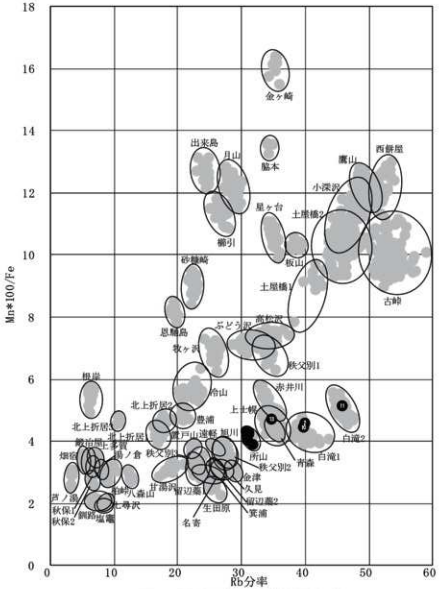


図2　黒曜石産地推定判別図（1）

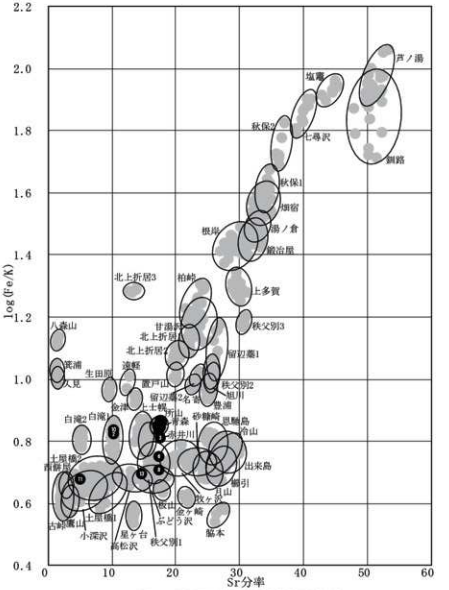


図3　黒曜石産地推定判別図（2）

表３　測定値および産地推定結果

番号	K強度 (cps)	Mn強度 (cps)	Fe強度 (cps)	Rb強度 (cps)	Sr強度 (cps)	Y強度 (cps)	Zr強度 (cps)	Rb分率	Mn×100/Fe	Sr分率	log Fe/K	Y分率	判別群	エリア	番号
ONJO-1	300.7	90.1	211.3	823.5	462.1	387.1	967.0	31.20	4.27	17.50	0.85		所山	置戸	ONJO-1
ONJO-2	331.8	101.6	2209.1	933.3	238.5	442.3	727.9	39.85	4.60	10.18	0.82		白滝1	白滝	ONJO-2
ONJO-3	306.5	83.6	1979.5	745.2	418.5	352.0	880.3	31.09	4.23	17.50	0.81		所山？	置戸？	ONJO-3
ONJO-4	246.2	72.8	1803.4	702.6	402.1	332.9	839.0	30.86	4.04	17.66	0.86		所山	置戸	ONJO-4
ONJO-5	195.9	56.7	1446.7	534.3	296.9	241.9	607.1	31.82	3.92	17.62	0.87		所山	置戸	ONJO-5
ONJO-6	138.4	32.7	784.8	316.1	177.1	150.2	379.3	30.91	4.16	17.32	0.75		所山？	置戸？	ONJO-6
ONJO-7	255.9	77.8	1800.4	712.2	406.5	338.3	850.5	30.87	4.32	17.62	0.85		所山	置戸	ONJO-7
ONJO-8	361.3	79.2	1853.3	743.3	412.8	347.8	877.9	31.21	4.27	17.33	0.71		所山？	置戸？	ONJO-8
ONJO-9	308.8	93.4	2185.3	852.4	475.7	400.4	1037.9	30.81	4.27	17.20	0.85		所山	置戸	ONJO-9
ONJO-10	321.2	98.4	2216.8	879.5	228.1	422.5	685.4	39.70	4.44	10.29	0.84		白滝1	白滝	ONJO-10
ONJO-11	395.2	96.9	1889.9	943.3	102.2	446.9	564.6	45.86	5.13	4.97	0.68		白滝2？	白滝？	ONJO-11
ONJO-12	250.9	74.1	1717.4	668.8	379.7	325.2	807.3	30.66	4.31	17.41	0.84		所山	置戸	ONJO-12
ONJO-13	344.0	80.6	1708.4	710.3	298.5	373.6	668.0	34.64	4.72	14.56	0.70	18.22	上士幌？	上士幌？	ONJO-13

Y分率とMn強度×100/Fe強度をプロットした判別図を図４に示す。図４をみると、上士幌群と確認できる。

表３に、判別図法により推定された判別群名とエリア名を示す。また、表４に器種別の産地推定結果を示す。

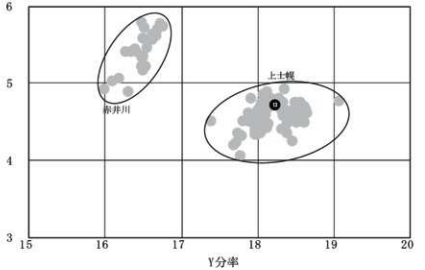


図４　黒曜石産地推定判別図（３）

４．おわりに

温根沼３遺跡より出土した黒曜石製石器13点について、蛍光X線分析による産地推定を行った結果、３点が白滝エリア、１点が上士幌エリア、９点が置戸エリア産と推定された。

表４　器種別の産地

器種	白滝	上士幌	置戸	合計
石刃鏃			2	2
彫器	1		5	6
スクレイパー	1		1	2
石錐	1			1
石核		1	1	2
合計	3	1	9	13

引用文献

望月明彦（1999）上和田城山遺跡出土の黒曜石産地推定．大和市教育委員会編「埋蔵文化財の保管と活用のための基礎的整理報告書２―上和田城山遺跡篇―」：172-179．大和市教育委員会．

Ⅷ章　総　括

1　遺　構

温根沼３遺跡は、根室湾の現海岸線から直線距離で約１㎞の海岸段丘上に立地する。遺跡の南側には、無名の沢が東から西に向かって流れ、下流の低位部には谷地が形成されている。調査範囲は標高約17m～23mの丘陵南側傾斜地である。Ⅲ層で検出した遺構は土坑が８基、焼土１か所、礫集中５か所、Ⅴ層（縄文時代早期）で確認した遺構は土坑墓が１基、焼土６か所、土器集中４か所、礫集中が４か所である。以下にいくつかの遺構について特徴等を記した。

【Ⅲ層の遺構】（図Ⅳ－２～５、図版３～６）

Ⅲ層で確認した土坑８基のうち、隅丸長方形を呈した土坑が４基、円形のものが４基である。このうち、隅丸長方形の土坑（ⅢＰ－２・３・４・８）は、いずれも64ラインから東側の傾斜の緩い標高約19m～21mの間に分布している。長軸方向はⅢＰ－２が南北を主軸とし、３・４・８は概ね東西方向を主軸にしており、重複はない。検出面での大きさの平均は、上端長径で1.56m、上端短径が0.60m、深さは0.26mである。ⅢＰ－３は上端の長径が1.84mを測り最も大きい。ⅢＰ－３の北西端の壁際からは、凝灰岩製の板状礫が壁に張り付くように1点出土した。この板状礫と同様の礫は、包含層中や礫集中として調査した、「礫集中３・４・５」でも確認されている。また、ⅢＰ－４の覆土中からはオホーツク式土器の破片が２点、黒曜石の剥片が１点、礫が２点出土している。ⅢＰ－８は覆土上層から小型の円礫や亜角礫がまとまって出土している。これら隅丸長方形の土坑が分布する区域の包含層中からは、ⅢＰ－８で出土したものと同様の礫が出土しており、他の土坑にもⅢＰ－８で確認したような礫集中が伴っていたものがあったことも考えられる。覆土は、上層がⅢ層主体の黒色土で、下層はこれにⅣ層の摩周テフラが僅かに混じる。ⅢＰ－２・３・４の覆土だけを見れば、自然堆積の様であるが、ⅢＰ－８が礫集中を伴う事から、ⅢＰ－２・３・４も埋戻しである可能性もある。また、各土坑の周辺を精査したが、これらの遺構に伴う柱穴等は検出していない。ⅢＰ－２・３・４・８の時期は擦文文化期後期、またはオホーツク文化期が考えられる。根室市内のトーサムポロ湧周辺竪穴群（北埋調報317）では、Ⅲ層中からオホーツク文化期の土坑墓が５基検出された。これらは土坑墓の上位に拳大～人頭大の礫集中（配石）を伴う例が報告されている。土坑墓５基のうち、２基から人骨が確認され、副葬品も出土している。

枝幸町目梨泊遺跡では、検出された43基の土坑墓のうち31基が砂利によって覆われている。（枝幸町教委 1994）。また、羅臼町相泊遺跡で確認された７号址は、北東方向を主軸にした土坑墓で、長軸が1.3m、短軸0.7m、深さは約20㎝である。壁際には20～40㎝の石で固められていた。北東側にはオホーツク式の完形土器が伏せられた状態で出土している。人骨は確認されていない（羅臼町教委 1996）。今回調査した隅丸長方形を呈したⅢＰ－２・３・４・８では、人骨や被甕、副葬品等は確認されなかったが、礫で覆われていた検出状況や形態等から、葬制に関わる遺構である可能性が考えられる。

円形の土坑では、丘陵傾斜地から緩斜面に変わる標高約19m付近で検出した。検出面での径はⅢＰ－５が0.95m、６は0.96m、７が1.08mである。深さはⅢＰ－５が0.72m、６は0.57m、７が0.56mであった。ⅢＰ－５の床面は漸移層まで掘り込まれ、南東側に傾斜する地形に沿って構築されている。覆土は埋戻しで、性格は不明である。時期はH61区の包含層中から縄文時代中期後半から後期前葉の北筒式期の土器片が89点出土しており、この時期に伴う可能性が考えられる。ⅢＰ－６・７はＩ59区で隣

接して確認した。共に規模に大きな差はないが、ⅢＰ－６の底面はⅤ層中に作られ、７はⅦ層中まで掘り込まれている。遺物等が出土していないために、時期を特定するには至っていない。しかし、遺構の規模や土層断面の形状等を観察した結果、類似したものに釧路町天寧１遺跡で調査した土坑Ｐ－５やＰ－20がある（北埋調報274）。Ｐ－５は確認面の径が1.30mで深さは約50cmである。坑底から北大Ⅱ式の土器が２個体出土している。Ｐ－20は口径が約1.5mで、深さは約80cmを測りやや大きい。時期はＰ－５と同様で続縄文時代後半北大Ⅱ式期の土坑墓である。今回調査したⅢＰ－６・７も続縄文時代後半期の遺構である可能性が考えられる。

【Ⅴ層の遺構】（図Ⅳ－６～９、図版６～８）

Ⅴ層で検出した遺構のうち、Ⅴ層礫集中１とＶＰ－１について記した。Ⅴ層礫集中１は調査区西端の南側に向かって緩やかに傾斜する標高約23mで検出した。5.74m×5.28mの比較的広範囲にわたって検出され、分布域は大きく二つに大別された。これらは被熱した転礫が多く、礫は1,493点を数えた。時期は縄文時代早期東釧路Ⅱ式期である。根室管内の摩周降下テフラ（Ma-f～j）の下位で確認された集石遺構の例には、コタンケシ川口遺跡第Ⅱ地点の礫群がある。コタンケシ川口遺跡は、根室半島のオホーツク海に注ぐコタンケシ川河口の両岸に広がる台地の縁辺部に分布している。礫群は、第６層直下で検出され、５つの群を形成していた。礫の総数は500点を超え、９割以上が角の取れた転礫である。これらは被熱しており、脆弱でヒビ割れたものが多い。この礫群には円形もしくは長円形を呈した土坑群が計16基伴っており、土坑墓である可能性も示唆されている。土坑の覆土中からは石錘や貝殻条痕文を持つ沼尻式と考えられる土器片等が出土している（北構 1976）。今回調査したⅤ層礫集中１の下位、Ⅵ層中から口径0.38mの小土坑が１基確認され覆土中から東釧路Ⅱ式と考えられる土器片等が出土している。礫集中に伴うものと判断されるが、性格は不明である。

ＶＰ－１は、Ⅵ層を精査中に検出した土坑墓である。北西から南東方向を長軸とし、北西隅の床面から、口縁部を欠くⅠ群ｂ類と考えられる土器が出土した（図版６－２・４）。土器は底部から胴部にかけて残存するもので筒型を呈し、ややあげ底で全体に指頭圧痕が顕著である。胴部には僅かに撚糸文と思われる文様が施文されている。（図Ⅴ－９－１、図版９－４）。坑底や覆土中に遺体の形骸を窺わせるようなものは残存していないが、副葬品を伴う縄文時代早期の貴重な出土例である。放射性炭素年代測定を行った結果では7,928 calBP -7,895calBP、7,873 calBP -7,725calBPという測定値を得ている（Ⅵ章１節参照）。本遺跡ではⅤ層中から東釧路Ⅱ式土器が多く出土しており、これを遡る資料は出土していない。このため、ＶＰ－１出土の土器も東釧路Ⅱ式期の範疇が妥当とも思われる。しかし、今回出土した他の東釧路Ⅱ式土器とは形態等が異なる。根室地方における縄文時代早期の土坑墓の例は乏しく、前述したコタンケシ川口遺跡第Ⅱ地点の例では、調査者は「ある種の貯蔵穴」を想定している。トーサムポロ湖周辺竪穴群のＬ－７地区からは、15基の土坑群が摩周テフラ下位で検出された（筑波大学歴史・人類学系 1980）。形体は様々で、円形に近いものから、不整円形、楕円形等を呈するものがある。大きさは長径が60～80cm前後のものが主体で、深さは約20cm前後のものが多い。遺物は条痕文土器や石刃・石核等の遺物を伴うものと伴わないものがあり、土坑群の性格を明らかにするまでには至っていない。ただし、中には深さが80cmを測るものもあり、他とは性格が異なることも考えられる。

また、根室海峡を挟んだ羅臼町中谷遺跡では、東釧路Ⅰ式期の墓壙様の円形土坑が5基検出されている（羅臼町教育委員会 1971）。土坑墓の可能性も考えられるが、遺物の出土状況等から決め手を欠く遺構であるとされ、貯蔵穴等他の機能も想定されている。

（笠原）

2　遺　物

今回の調査の遺物点数は11,957点で、分類別の内訳は土器6,348点、石器等5,608点、鉄製品１点である。また、遺構出土の遺物点数は2,889点、包含層出土は9,068点である。層位別（遺構出土を含める）では、Ⅰ～Ⅲ層が1,961点、Ⅴ・Ⅵ層が9,996点で、摩周テフラ降下以前の縄文時代早期後半の遺物が全体の約84％と多く出土した。

土器は、縄文時代早期後半（Ⅰ群ｂ類）の東釧路Ⅱ式、同Ⅲ式、中期後半～後期前葉（Ⅲ群ｂ類～Ⅳ群ａ類）の北筒式、続縄文時代（Ⅵ群）の後北C_2D式、擦文土器（Ⅶ群）、オホーツク式土器・トビニタイ式土器（共にⅧ群）がある。出土点数でみると縄文時代早期後半が5,916点、中期後半～後期前葉が91点、続縄文時代が40点、擦文文化期が87点、オホーツク文化期が212点、不明が２点である。以下本遺跡における各時期の土器の特徴を述べる。

縄文時代早期後半の東釧路Ⅱ・Ⅲ式土器は、主に摩周テフラ下位のⅤ層から出土し、遺構ではＶＰ－１、ＶＦ－４、Ⅴ層土器集中１～４、Ⅴ層礫集中１から出土した。復元個体は４個体である。土器の分布は、東釧路Ⅱ式土器は調査区ほぼ全体から出土しているのに対し、東釧路Ⅲ式土器は調査区中央よりやや東側の概ね55～65ラインの間から出土し、比較的狭い出土範囲である。出土した東釧路Ⅱ式土器の特徴をみると、器形は口縁部が直立ないしわずかに外反し底部にかけて緩やかにすぼむ器形で、底部は張り出す。文様は口唇部に斜めからの刺突文、刻み、縄文が施されるものがみられ、口縁部には斜めからの刺突文、横位の縄線文が施されるもの等がある。地文は、条間がややあく自縄自巻の原体と考えられる斜行縄文、横走縄文が組み合わされて施されるものが多い。また、撚糸文が施されるものもある。底部付近には刻みや刺突文、短縄文がみられる。内面には条痕文が施されるものが多い。東釧路Ⅲ式は器形がわかるものが少ないが、東釧路Ⅱ式土器と同様の器形と推定される。底部の張り出しは東釧路Ⅱ式に比べ弱い。文様は口唇部に刻み、縄文、短縄文が施され、外面には縄線文、組紐圧痕文、短縄文等が施される。また、斜行縄文や横位の縄文もみられる。横位の貼付文や円形の貼付文もみられ、貼付上に刻みや短縄文が施されるものもある。内面には条痕文が施されるものもある。摩周テフラと縄文時代早期後半の土器との層位的な出土関係をみると、摩周テフラｆ層の上下の土層から東釧路Ⅲ式土器の出土が確認されている。標茶町金子遺跡（宇田川編 1976）、飯島遺跡（宇田川編 1976）では摩周ｆテフラの下位から竪穴住居跡等の遺構と土器等が出土し、金子遺跡では摩周ｆテフラ上位からも東釧路Ⅲ式土器が出土している。また、当センターで調査した根室市内のトーサムポロ湖周辺竪穴群Ｂ地区（北埋調報324）では中茶路式土器が摩周ｆ～ｊテフラの上位の黒色土層から出土しており、同時期の土坑等も検出されている。

縄文時代中期後半～後期前葉の土器は全て包含層から出土した。小破片が多く、同一個体が細かく割れたものと考えられる。詳細は不明だが北筒Ⅱ式土器の可能性がある。

続縄文土器は土器型式が判断できるものは概ね後北C_2D式と考えられ、包含層とⅢ層礫集中３から出土した。包含層からは注口土器の破片も出土している。

擦文土器は後期のもので、全てⅢ層から出土している。器種は深鉢と高坏があり、高坏の出土量が多い。深鉢は小～中型のものが多く、胴部に沈線で文様が施されるものがある。高坏は坏部外面に、短い沈線により横位の綾杉文が施されるものが多い。また、台部にも刻み等の文様がみられ、中には記号状の線刻が施されるものもある（口絵３－２、図Ⅴ－１－21）。

オホーツク式土器は、貼付文土器が出土している。貼付は比較的細く断面形が丸みを帯びるものと、やや太く断面形が四角に近いものがある。口縁部は肥厚帯があるものが多い。貼付文は直線状と波状

がみられ、直線状の貼付文には刻みが施されるものもある。

トビニタイ式土器はごく少量出土した。深鉢で文様は直線状や小波状の貼付文が施され、貼付文上には押圧や刻みがみられる。

石器等では、定型的な石器として石鏃、石槍・ナイフ、石錐、スクレイパー、磨製石斧、たたき石、すり石、砥石、台石・石皿などがある。定型的な石器は全体的に少数で、つまみ付きナイフが出土していないなど、石器組成にもやや偏りがみられる。また、本遺跡の石器等の特徴として、Ⅴ層から石刃鏃、彫器、彫器削片、二次加工ある石刃からなる石刃鏃石器群の出土していることが挙げられる。特に彫器は53点出土し、定型的な石器の中では最も出土量が多く、遺跡内で彫器を用いた活動が行われていた可能性が高い。石核の中には石刃核もみられるが、二次加工ある石刃及び石刃の出土点数は５点のみで、遺跡内で石刃剝離が行われた様子はほとんどみられない。根室半島での石刃鏃石器群出土の類例として、当センターで調査を行った穂香竪穴群（北埋調報184）や、トーサムポロ湖周辺竪穴群（筑波大学・人類学系 1980、北埋調報317）などが挙げられる。これらの遺跡では東釧路Ⅱ式土器に伴って出土しているため、本遺跡の石刃鏃石器群も東釧路Ⅱ式土器に伴うものと考えられる。

（広田）

写　真　図　版

1　遺跡全景（東から）

2　Ⅴ層調査状況（西から）

図版２

１　基本土層60 ～ 63ライン（南西から）

２　基本土層Ｐ49区（西から）

３　基本土層Ｎ50区（南から）

1　ⅢＰ－１土層断面（南から）

2　ⅢＰ－１完掘（南から）

3　ⅢＰ－２土層断面（南から）

4　ⅢＰ－２完掘（南から）

5　ⅢＰ－３土層断面（東から）

6　ⅢＰ－３完掘（東から）

7　ⅢＰ－４土層断面（東から）

8　ⅢＰ－４完掘（東から）

図版４

1　ⅢＰ－５土層断面（南から）

2　ⅢＰ－５完掘（南から）

3　ⅢＰ－６土層断面（南から）

4　ⅢＰ－６完掘（南から）

5　ⅢＰ－７土層断面（南から）

6　ⅢＰ－７完掘（南から）

7　ⅢＰ－８検出（東から）

8　ⅢＰ－８調査状況（北から）

1　Ⅲ Ｆ－１土層断面（東から）

2　Ⅲ層礫集中２検出（南西から）

3　Ⅲ層礫集中１検出（南東から）

4　Ⅲ層礫集中４検出（南東から）

5　Ⅲ層礫集中３検出（北東から）

6　土器出土状況（北東から）

図版６

1　Ⅲ層礫集中５検出（南から）

2　ＶＰ－１完掘（東から）

3　ＶＰ－１土層断面（東から）

4　ＶＰ－１土器出土状況（南から）

5　ＶＦ－１土層断面（東から）

6　ＶＦ－２土層断面（東から）

1　ＶＦ－３土層断面（東から）

2　ＶＦ－４土層断面（東から）

3　ＶＦ－５土層断面（東から）

4　ＶＦ－６土層断面（東から）

5　Ｖ層土器集中１（南から）

6　Ｖ層土器集中２（南から）

7　Ｖ層土器集中３（東から）

8　Ｖ層土器集中４（南東から）

図版８

1　Ⅴ層礫集中１検出（南東から）

2　Ⅴ層礫集中１　Ｐ－１土層断面（東から）

3　Ⅴ層礫集中２検出（西から）

4　Ⅴ層礫集中３検出（南から）

5　Ⅴ層礫集中４検出（南から）

1　Ⅲ層の土器（図Ⅴ-1-6）

2　Ⅲ層の土器（図Ⅴ-1-21）

3　Ⅲ層の土器（図Ⅴ-1-22）

6　Ⅴ層土器集中3出土の土器（図Ⅴ-9-3）

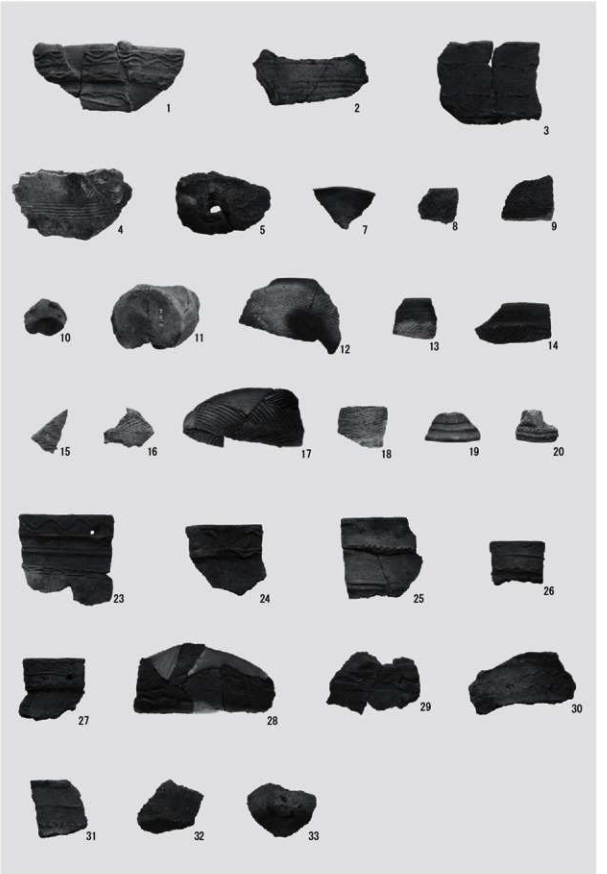
4　ⅤP-1出土の土器（図Ⅴ-9-1）

5　Ⅴ層土器集中2出土の土器（図Ⅴ-9-2）

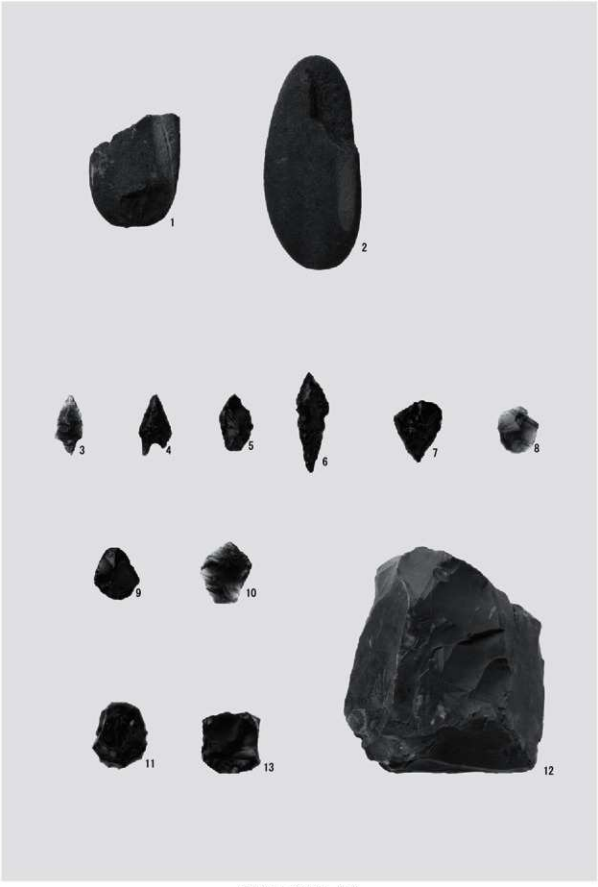
7　Ⅴ層土器集中4出土の土器（図Ⅴ-9-4）

Ⅲ層・Ⅴ層出土の復元土器

図版10

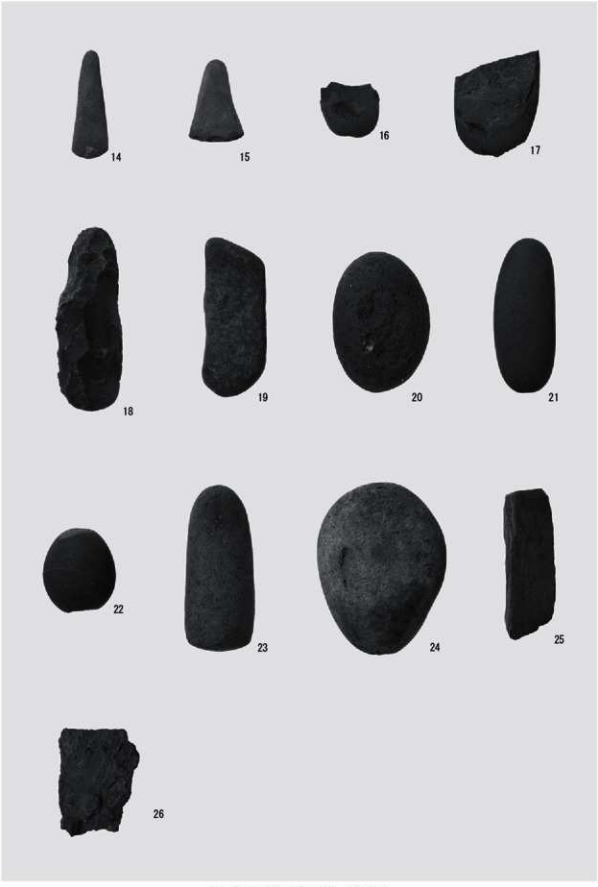


Ⅲ層出土の土器

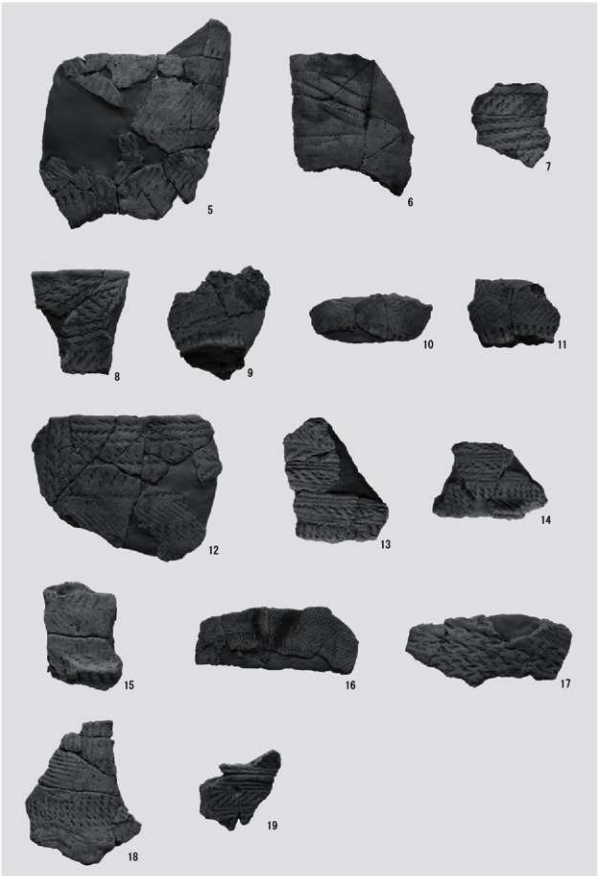


Ⅲ層出土の石器（1）

図版12

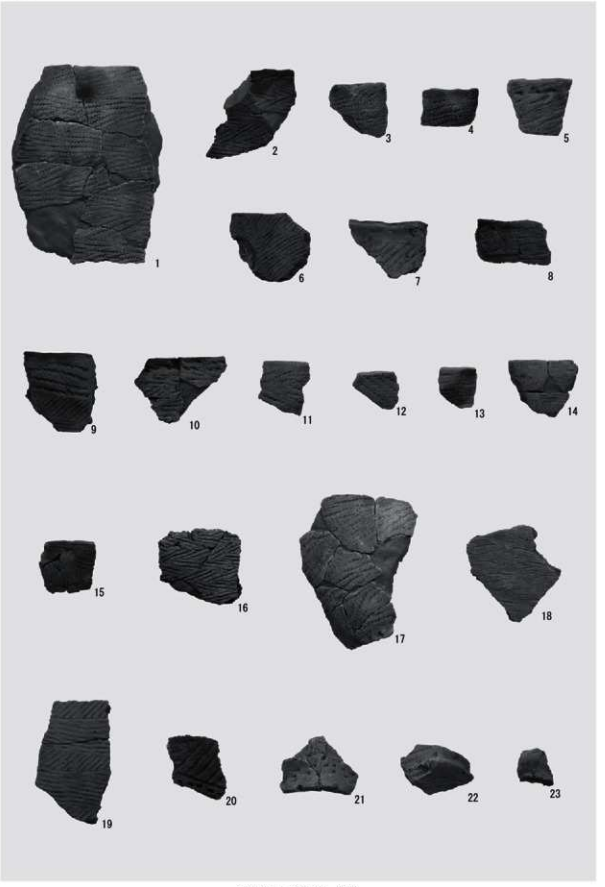


Ⅲ層出土の石器（2）・鉄製品

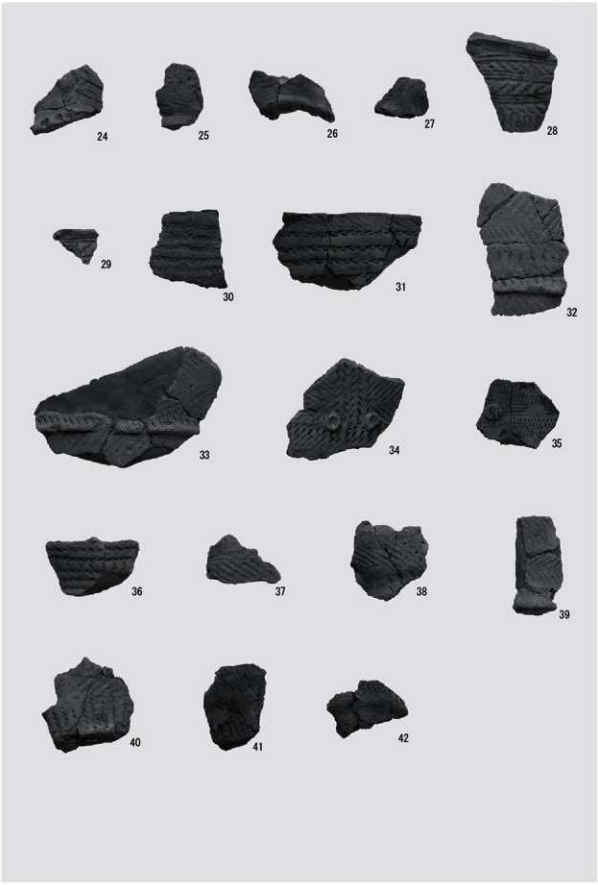


Ⅴ層出土の土器（1）

図版14

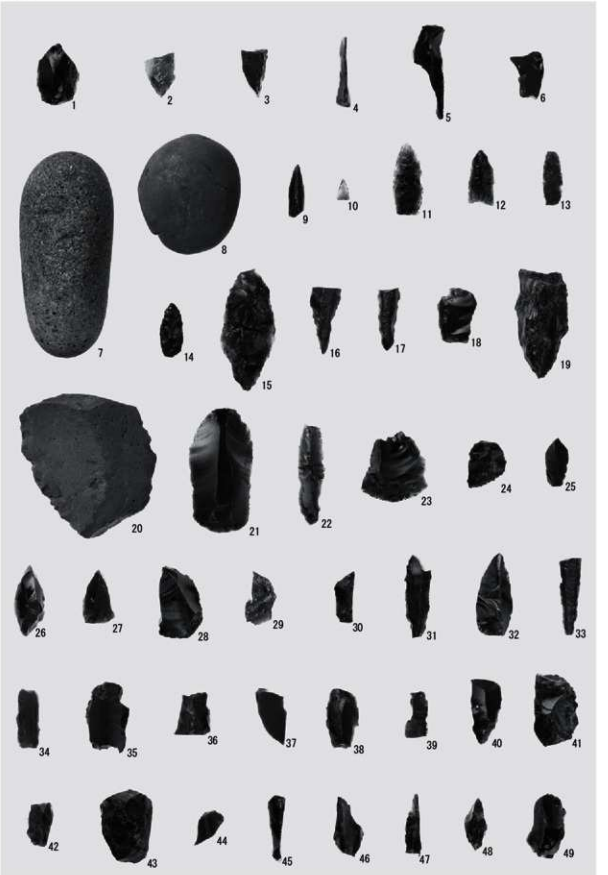


Ⅴ層出土の土器（2）



Ⅴ層出土の土器（3）

図版16



V層出土の石器（1）

V層出土の石器（2）・土製品

引用・参考文献

論文・書籍等

猪熊樹人・新美倫子　2007 「平成18年度根室市内埋蔵文化財測量調査概要」『根室市歴史と自然の資料館紀要』第21号

猪熊樹人　2013 「キナトイシ遺跡のアイヌ文化期資料について（1997年採集分）」『根室市歴史と自然の資料館紀要』第25号

猪熊樹人　2015 「キナトイシ遺跡のアイヌ文化期資料について（1999・2002年採集分）」『根室市歴史と自然の資料館紀要』第27号

宇田川　洋・豊原熙司・藤本　強編　1985 『北海道のチャシ集成図Ⅰ（道東北篇）』 北海道チャシ学会

小山正忠・竹原秀雄　1967 『新版　標準土色帖』26版　日本色研事業株式会社

川上　淳編　1985 『根室半島チャシ跡群環境整備事業報告書』根室市教育委員会

岸本博志・長谷川健他　2009 「最近約１万４千年間の摩周火山のテフラ層序と噴火様式」『火山』第54巻第１号

児玉作左衛門・大場利夫　1956 「根室國温根沼遺跡の発掘について―温根沼式押型文遺跡―」『北方文化研究報告』11

澤　四朗　1987 『釧路の先史』 釧路叢書第24巻

新美倫子・猪熊樹人他　2010 「根室市関江谷１竪穴群詳細分布調査報告Ⅰ」『根室市歴史と自然の資料館紀要』第22号

新美倫子・大谷茂之他　2011 「根室市関江谷１竪穴群詳細分布調査報告Ⅱ」『根室市歴史と自然の資料館紀要』第23号

新美倫子・猪熊樹人他　2012 「根室市関江谷１竪穴群詳細分布調査報告Ⅲ」『根室市歴史と自然の資料館紀要』第24号

松井信輝・吉元　豊　1987 「根室市の地質および岩石」『根室市の自然と文化財』 根室市教育委員会

山元孝広・伊藤順一他　2010 「北海道東部，屈斜路・摩周カルデラ噴出物の放射性炭素年代値」『地質調査研究報告』第61巻第5/6号

団体・組織刊行物

道東の自然史研究会 編　1999 『道東の自然を歩く』 北海道大学図書刊行会

根室市地名研究会　2015 『根室市の地名―地名と地域の歴史―』

ペドロジスト懇話会　1984 『土壌調査ハンドブック』 博友社

北海道教育委員会　1983 『北海道のチャシ』

埋蔵文化財発掘調査報告書

宇田川　洋編　1976 『釧路川中流域の縄文早期遺跡　－飯島遺跡－』 北海道川上郡標茶町教育委員会

宇田川　洋編　1976 『釧路川中流域の縄文早期遺跡　－金子遺跡－』 北海道川上郡標茶町教育委員会

枝幸町教育委員会　1994 『目梨泊遺跡　一般国道238号枝幸町斜内改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』

北構保男　1976 『根室市コタンケシ川口遺跡－調査概報－』 北地文化研究会

釧路市教育委員会　1968 『釧路市東釧路遺跡第Ⅱ地点発掘調査概報』
釧路市埋蔵文化財調査センター　1993 『釧路市北斗遺跡第１地点調査報告書』
筑波大学歴史・人類学系　1980 『筑波大学先史学・考古学研究調査報告Ⅰ　北海道東部地区の遺跡研究』
根室市教育委員会　1966 『北海道根室の先史遺跡』
根室市教育委員会　1983 『根室市西月ヶ岡遺跡発掘調査報告書』
根室市教育委員会　1994 『穂香竪穴群発掘調査報告書』
羅臼町教育委員会町　1971 『羅臼』 羅臼町文化財報告１
羅臼町教育委員会町　1996 『相泊遺跡（２）』 羅臼町文化財報告16

公益財団法人北海道埋蔵文化財センター刊行物

（公財）北海道埋蔵文化財センター　2017 『調査年報29　平成28年度』
（公財）北海道埋蔵文化財センター　2018 『調査年報30　平成29年度』

財団法人・公益財団法人北海道埋蔵文化財センター調査報告書（本文中では「北埋調報」と表記）

（財）北海道埋蔵文化財センター　2002 『根室市　穂香竪穴群』 北埋調報170
（財）北海道埋蔵文化財センター　2003 『根室市　穂香竪穴群（２）』 北埋調報184
（財）北海道埋蔵文化財センター　2004 『根室市　穂香竪穴群（３）』 北埋調報198
（財）北海道埋蔵文化財センター　2005 『根室市　穂香川右岸遺跡』 北埋調報212
（財）北海道埋蔵文化財センター　2011 『釧路町天寧１遺跡（２）』 北埋調報274
（公財）北海道埋蔵文化財センター　2015 『根室市　トーサムポロ湖周辺竪穴群（１）』 北埋調報317
（公財）北海道埋蔵文化財センター　2016 『根室市　トーサムポロ湖周辺竪穴群（２）』 北埋調報324
（公財）北海道埋蔵文化財センター　2017 『根室市　幌茂尻１遺跡』 北埋調報340

報告書抄録

ふりがな	ねむろし　おんねとうさんいせき
書　名	根室市　温根沼３遺跡
副書名	一般国道44号根室市温根沼改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	（公財）北海道埋蔵文化財センター調査報告書（北埋調報）
シリーズ番号	第342集
編著者名	笠原　興・広田良成・山中文雄
編集機関	（公財）北海道埋蔵文化財センター
所在地	〒069-0832　北海道江別市西野幌685番地１　　TEL（011）386－3231
発行年月日	西暦2018年２月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号	（L-58杭）				
おんねとうさんいせき 温根沼３遺跡	ほっかいどうねむろしおんねとう 北海道根室市温根沼 284－7	01223	N-01-308	43° 16′ 31″	145° 30′ 25″	20160512 ～ 20160720	2,610	根室道路 事業に伴う 事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
温根沼３遺跡	遺物包含地	続縄文時代・擦文文化期・オホーツク文化期	土坑8、焼土1、礫集中5	土器、鉄鍋片	
		縄文時代早期	土坑墓1、焼土6、土器集中4、礫集中4	土器・石器・礫	

要　約

温根沼３遺跡は、根室市街から南西へ約９km、温根沼地区の海岸段丘上（標高23m前後）から無名沢の源流部（標高16m前後）にかけて広がる。

遺構はⅢ層で土坑８基（ⅢＰ－１～８）、焼土１か所（ⅢＦ－１）、礫集中５か所を検出した。これらの時期は判然としないが、周囲の遺物出土状況からみて、64ライン以東のものは擦文文化期後期またはオホーツク文化期の可能性がある。

Ｖ層では、土坑墓１基（ＶＰ－１）、焼土６か所（ＶＦ－１～６）、土器集中４か所、礫集中４か所を検出した。いずれも縄文時代早期のものである。土坑墓（ＶＰ－１）は平面形が長径約1.3mの楕円形で、坑底の西北隅から小型の土器1個体が出土した。斜面下の平坦部で検出した焼土４か所（ＶＦ－１～４）は、約２mの間隔をあけて一列に並んでおり、その周囲では黒曜石の剥片石器が比較的多く出土した。土器集中１・４は東釧路Ⅲ式、２は同Ⅱ式、３は東釧路Ⅱ式・同Ⅲ式の破片のまとまりである。礫集中１は、拳よりやや大きな礫・礫片約1,500個が５×６mの範囲にまとまっており、一部ではそれらが隙間なく密集していた。礫・礫片の大部分は被熱している。

遺物は土器約6,300点、石器等約5,600点を数える。土器の大半はＶ層から出土した縄文時代早期の東釧路Ⅱ式・同Ⅲ式である。Ｖ層の石器では、石鏃、スクレイパー、彫刻刀形石器、砥石が目に付く他、石刃鏃が２点出土している。Ⅲ層の遺物は少ないが、続縄文時代や擦文文化期後期の土器、貼付文の施されたオホーツク式土器、鉄鍋片等がある。

（公財）北海道埋蔵文化財センター調査報告書　第342集

根室市　温根沼３遺跡

― 一般国道44号根室市温根沼改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 ―

平成30（2018）年２月28日

編集・発行　公益財団法人　北海道埋蔵文化財センター
〒069-0832　北海道江別市西野幌685番地１
TEL 011（386）3231　FAX 011（386）3238
［URL］http：//www.domaibun.or.jp/
［E-mail］mail@domaibun.or.jp

印　　刷　山藤三陽印刷株式会社
〒063-0051　札幌市西区宮の沢１条４丁目16－１
TEL 011（661）7163　FAX 011（661）7173